

3000人の前世療法で
見えてきた

人生の法則

I

一字
ichiu

目次

はじめに	6
第一章	9
人生は自分の思い通りになっている	9
出来事には意味はない。あなたが意味を与えている	11
本当の意味に気づく	16
自分の人生は自分に責任がある	17
事例一	19
ネガティブ感情の製造工場	28
事例二	31
こうあるべき！が×を作り出す	36
枠をかけない	44
「○」をもらうことで幸せを得ようとする	48
全てを認め受け入れることが出来る自分	50
不完全こそ完璧	54
認め受け入れるとは	58
本当の自分、人間は『神』そのもの	60
第二章	62

今までの体験や出来事の意味	6
人生の教科書	6
子供が親や環境を選ぶ	6
事例三	7
第三章	7
なぜ問題が発生してくるのか	7
前提条件が現実化する	8
真実に気づく	9
望みを実践する	9
修行をやめる許可を自分に与える	10
事例四	10
人生の法則は知ってはいけない	11
体験の意味	11
第四章	12
事例集	12
DVを受け続けた女性	12
生まれながらのアトピーの女性	12
わがままな夫との関係	12
前世からの思い込みに支配されている男性	13
神様に対する恐怖心	13

「楽しい人生を送ってはいけない」という思い込み.....	139
「発作的な寂しさと不安感に悩む女性の場合」.....	141
不安確認症の男性.....	145
離婚した元夫との関係.....	147
不登校のお子様二例.....	149
引きこもり、リストカットの娘さん.....	153
ウツの原因.....	165
まとめ.....	169
おわりに.....	175



はじめに

前世療法というのをご存じでしょうか。この本を手にとっておられるということは、すでにある程度の知識を持つておられることと思います。

前世療法というのは、ご本人が抱えている問題や悩みや、今置かれている環境や状況の大本の原因を、催眠状態の中で前世までさかのぼり、ご本人に思い出していただき、問題を解消していくという手法です。私が、占い師のように前世を言い当てるというようなやり方ではありません。ご本人が思い出しますから、とても実感と説得力があります。

私は、その前世療法を中心としたセラピーを二十年ほど前から行っています。この二十年間で述べ三千人以上の方の問題と向き合っていました。

私のセッションでは、お一人当たり三〜五つの前世を明らかにしていきますので、今まで一万以上の前世と向き合ってきたこととなります。

そのように、たくさんの方の事例と向き合っていくうちに、人生の奥底には実にシンプルな法則があることに気づきました。

その法則にもとづいて物事を考えていくと、本質的な答えが出てくるのです。クライアント様の悩みの根本原因がどこにあるのか、思考や価値感の何がずれているのか、どうすれば悩みや問題が解決するかが、自ずと分かるのです。

さらにその法則を、セッションの中でクライアント様にお話していくと、殆どの方がそれを理解するだけで、悩みの半分以上が解決していくことに気づきました。中には、全ての問題が解消してしまう人もいます。

たくさんのクライアント様から、早く本にまとめるようにご要望をいただいていたのですが、何年もの時間がかかってしまいました。

ところで、このセッションを始める前、私自身も沢山の悩みの中にいました。

子供の頃から、とても貧しい家に育ちました。その貧しさから抜け出したくて、二三歳で商売を始め、二七歳の時は同年代の方の一〇倍近くの年収がありました。

しかしその時ふと思っただんです。「こんな若造が、こんなに成功していいんだろうか。このまま行くと、傲慢な男になってしまいうんじやないか。まだ若いんだから、挫折も必要なんじゃないか。」と。

今考えると、とんでもないことを思ってしまったものです。人生は思い通りになります。

その直後から、挫折が始まりました。社員はどんどん辞めていきます。売上もどんどん落ちていきます。一生懸命頑張るのですが、何をやってもうまくいかなかったのです。

死にかける病氣もしましたし、仕事も家庭も何もかもうまくいかなくなり、五年間のウツにもなりました。どん底に落ちていったのです。

「こんなはずじゃなかった。あんなに順調だったのに、一体どうしてしまっただろう。」「一体何のために生まれてきたんだろう。」と真剣に悩みました。何ヶ月も何ヶ月も考え続けました。

そして出た答えが「皆、幸せになるために生まれてきたんだろう。自分も周りの人も全ての人がそうなんだろう。どうもそれは間違いなさそうだ。」と。「ならば、間違いなく幸せになる方法があるはずだ。」と思っただけです。「では、そ

8 の方法って何だろう？」と、また考え始めました。

しかし、考えても考えても答えが出てきません。何週間も考えた末に出てきた答えが「もう、分からん！」でした。「分からんから、神様にお任せしよう」と。「神様の右手として使ってもらおう」と思ったのです。「神様が自分の右手を不幸にすることはないだろう」と。諦めとも開き直りともつかない感覚です。まな板の上の鯉の心境です。

それからです。人生の流れが変わり始めました。沢山の不思議な出会いや、出来事が起きるようになったのです。「挫折が必要だ」と思ってから十年の月日が経っていました。その三年後、このセッションを始めることになりました。「間違いなく幸せになる方法があるはずだ」の答えが、少しはわかったような気がします。

一人でも多くの方に、この法則を理解していただき、本来のすばらしい自分に戻っていただくことを期待します。

第一章

人生は自分の思い通りになっている

いきなりですが、人生は自分の思い通りになっています。

そう言われると、皆様どう思いますか？

「そんなことはない！ 思い通りになんかまったくいかない！」そう言われる方も多いのではないのでしょうか。私もそう思っていました。

みんな間違いなく「楽しくて、イキイキと笑顔に満ちて、豊かな幸せな人生を歩みたい。」と思っています。しかしなかなかそうならない、だから自分の思い通りにはなっていない、と思っっている方がたくさんいます。しかしそれでも思い通りになっているのです。

では、あなたの中のどういう思いが現実化しているのか。それはあなたが、人生や自分や仕事や家庭というものに対してどういう前提で見ているのか。その前提こそが現実化しているのです。思考パターンと言ってもいいかもしれません。例えば、幸せになるためには苦勞が必要だとか、たくさん修行しなければいけないんじゃないかと思っっている方がたくさんいます。

中には、こんな自分は幸せになる資格は無いのではないかと、思っっている方もいます。しかし、資格のない自分であっても幸せにはなりたいたい。幸せになる資格を得るためには、自己犠牲が必要なのではないか、人のいうことをただ「ハイハイ」と聞いてなくてはいけないのか。あるいは自分の言いたいことを言っってはいけない、自由に生きていけないと思っ込んでいる方もいます。そうすると、その前提条件が現実化するのです。

実に単純なことです。苦勞が必要だと思っている方は、目の前に楽な道と、苦勞の道があれば、どちらの道を選択するでしょう。明らかですよね。間違いなく苦勞の道を選択するでしょう。楽な道の先には、幸せはないと思っ
ていますから、楽な道を選択することはないでしょう。そして、困難が待ち受けるいばらの道を選択することになります。そうすると、当然苦勞が始まります。では、その苦勞はいつまで続くのでしょうか。またいつになったら幸せになれるのでしょうか。

さらには、苦勞を手放すと幸せはやってこないと思ひ込んでいたりしますから、永遠に幸せになれなくなってしまう。目の前に人參をぶら下げて、走り続けているようなものです。そういうことを繰り返している方がたくさんいるのです。あなたはどうですか？

中には「過去や前世に焦点を当てるよりは、今や未来のことを考えた方がいいんじゃないの？」と言われる方がいらつしやいます。確かにそうです。過去の事にとらわれるよりは、「たつた今」そして「未来」のことを考えた方がはるかに前向きです。しかし、その未来を作るのは、あなたの奥底にある前提条件（思考パターン）なのです。そしてたつた今もその思考パターンで自分の世界を作り出しています。そして、その思考パターンは前世の体験が影響している場合が多いのです。ですから、前世を知ることによって思考パターンが変わり、未来が変わり始める場合が多いのです。

「幸せを得るためには」の前に、色んな前提条件を付けていませんか？ その前提条件が現実化していませんか？ あなたの人生で現実化しているのは、その前提条件（思考パターン）の方だということに気づけば、世界の見え方は大きく変わり、人生の流れは大きく変わります。

出来事には意味はない。あなたが意味を与えている

もともと、私たちの周りで起きている出来事には、実は何の意味もありません。

こういうと、ほとんどの方が否定されると思うのですが、意味がないというのは無意味ということではありません。その出来事そのものが意味を持っているのではなくて、出来事に対して、あなたが意味を与えているということです。そこには体験、現象、事実があるだけなのです。

その出来事、体験に対して自分がどういう基準で判断をし、価値を与えているかによって、あなたにとつての出来事の意味が決まっています。

例えば、訪問先でお茶を出されたとします。そのお茶に対して、人によって色んなことを考えます。いろんな反応を起こします。たとえば、「あくおいしい！」という人もいれば、「なんだこのお茶は！ 渋くて飲めたもんじゃない！」。あるいは「高そうな、いいお茶！」という人もいれば、何も思わない人もいます。人それぞれいろんな反応をします。そして、自分が感じたことをもとにして、さらに反応していきます。

「おいしい！」と言った人は「ありがとう。」と言う。「まずい！」と思った人は、さらに色んな反応することでしょう。「私の口には合わないけど、一生懸命入れてくれたんだよね。ありがとう。」と思う人もいれば、中には「なんでこんなお茶を出すんだ！ 嫌がらせか？」とか、「こんなお茶しか出してもらえないの？ 嫌われてるのかな？」と思ったりする人もいます。

1 1 「ありがとう！」と思った人は、その瞬間幸せな気持ちになれますが、「こんなお茶！」と思った人は、不快な気持ちになります。ではどこに問題があるのでしょうか。そのお茶は同じ一杯のお茶なのに、何が違ったのでしょうか。

お茶はお茶。それ以上でも、それ以下でもありません。そのお茶に対して、自分がどのような価値を与えているのか。それによって、あなたにとってのお茶の価値が決まっています。

そのお茶に、自分が「×(バツ)」というレッテルを張っておいて、自分が張ったレッテルに向かって文句を言ったり、不安がったりしているのです。だって、「○(マル)」のレッテルを張った人は、「ありがとう。」と言っているのですからぬ。

そこには、ただ「お茶」という事実があるだけ。しかし、そこに自分がどういう価値を与えているかで、その出来事の自分にとっての意味が決まってくるのです。

「猫に小判」ということわざがあります。一般に「物の価値の分らない人」という意味で使われますが、ではその価値はだれが与えているの？ということになってきます。猫にとっては、小判よりサンマー一匹の方がはるかに魅力的です。つまり、「小判そのものに価値があるのではなくて、受け取る人の状況や趣味嗜好、優先順位、その時の都合などによって物事の価値は変わる。自分が与えた価値によってその意味が決まってくる。」ということなのです。

そのようにして、周りの出来事、物、現象に自分自身が意味付け、価値付けをして、自分が付けた意味の中で生活しているのです。

そして、その意味付けも、ほとんどの場合その時の自分にとって、都合が良いか悪いかで変わってきます。都合ですから、同じ出来事でも都合によってコロコロ変わってきます。

例えば、あなたにとって大切な人が亡くなったとします。そうすると、悲しくつらい思いをします。そのように、生きていけばそうした辛い出来事、悲しい出来事というのは、残念ながら間違いなく起きてきます。そうすると、悪いことが起きたように受け止めてしまいがちです。

しかし、人が亡くなる事は悪いことでしょうか。そうではないですよ。当たり前ですが起きているだけのことで。間違いなく人は死ぬのですからね。それが、自分にとって辛かったり悲しかったりするから、悪いことが起きているように受け止めてしまうのです。

しかし、殺したいくらい憎んでいる人が死んだりすると、嬉しかったりします。

「そんなことは思っではいけない。」と頭で考えながらも、そんな風に思ってしまうことがあるのも事実です。そのように、私たちは人の死すらも、その時の自分の都合で意味付けをして、右往左往しているのです。

私たちは、苦しいことや悲しいことが起きると、悪いことが起きていると受け止めてしまいます。しかし、苦しいことや悲しいことは確かに起きますが、悪いことが起きているわけではないのです。自分がそのように意味づけをしているだけのことなのです。

では、なぜ苦しいとか悲しいとか悔しいとか思うのか。それはその時の自分にとって都合が悪いだけのことなのです。その時の自分の都合で意味付けをして、勝手に不安がったり悲しんだりしているだけのことです。都合ですから、同じ出来事に対しても、その時の都合によって違う意味付けをしてしまいます。

例えば、あなたが好きな人とデートの約束をして、待ち合わせ場所に車で向かっているとします。しかし、ずっと

赤信号ばかり。「なんで！ついてない！」とイライラしはじめます。信号に文句を言いたくなります。

しかし大嫌いな人と会わなくてはいけない時はどうですか？ 「ラッキー！ ずっと赤信号のままでもいいのに！」なんて思ったりします。そんな感覚、よくありますよね。ちよつとした出来事に一喜一憂しています。

しかし、信号はあなたの都合には全く関係なく、決められた通りに赤になったり青になったりしているだけなのです。あなたのデートの邪魔をするために、赤になっているわけではありません。皆がスムーズに通行できるように、事故が起きないように赤になっているのです。もつと言え、あなたの命を守るため。更には、あなたが恋人と楽しいデートができるように赤になっているのです。

そのように、赤信号の「**本当の意味**」に気づくことができれば、常に「ありがとう！」になるはずです。

つまり人生をスムーズに生きるコツ、問題を解決するコツは、「**物事の『本当の意味』に気づける自分になる**」ことなのです。

しかし、ほとんどの人が、問題を解決する方法というのは、出来事や状況を自分の都合の良いように、変えることだと思ひ込んでいます。だからそこに問題が発生してくるのです。

「私の人生、ずっと青ならいいのに！」 「信号を自分の思うように、コントロール出来るようになったらいいのに！」 「そんな幸運な人生だったらいいのに！」 と言いはじめます。

それは無理なことです。あなたの前がずっと青なら、反対側はずっと赤になります。大迷惑です。そうすると「なに、あいつ！」と周りに不満が生じます。「俺の方が青がいい！」 「いや私の方が青がいい！」。そこに、混乱や争い、奪い合

いが生じます。大渋滞、事故多発ということになるのです。思い当たる節はありませんか？

実はもともと何も問題は起きてはいなかったのです。しかし、本当の意味に気づくことができている私たちが、何もないと勝手に問題を作り出してしまったのです。逆にいうと、本当の意味に気づくことができる自分になれば、問題は起きて来ないということになります。

つまり、問題を解決するということは、周りの状況や人、出来事を自分の都合のいいように変えることではなく、「物の事の『本当の意味』に気づける自分になる」ということなのです。本当の意味に気づけば、何も悪いことは起きていなかった事がわかります。実は素晴らしいことしか起きていなかったことがわかります。すべてに「ありがとう」になります。



本当の意味に気づく

何度も言いますが、その『本当の意味』とは、「世の中には、本来素晴らしいことしか起きていない。」ということです。辛いこと苦しいことは確かに起きますが、悪いことが起きているわけではないのです。信号の例でもわかるように、その時の自分にとって都合が悪いと「悪いことが起きている」、都合が良いと「良いことが起きた」と、私たちが勝手に意味づけをしているだけなのです。ただ勘違いをしているだけなのです。しかし、本当の意味に気づいた時には全てが「ありがとう」に変わります。

色々な人や、様々な人が「全てに感謝をしなさい」と言っています。そして、多くの人が「全てに感謝しなくっちゃ」と思っています。確かに素晴らしいことです。しかし、「感謝しなさい」「感謝しなくっちゃ」と言っている間は、まだ違うんです。だって根底には「感謝できない」という思いがありますからね。本当に感謝している時は、「感謝しなくっちゃ」なんて思っていないから。

「感謝しなくっちゃ」と思っている間は、「立派な人、素晴らしい人にならなくちゃ」「我慢しなくっちゃ」と言っているようなものです。しかし無理や我慢は、いずれ限界が来て爆発します。

ですから、幸せな人生を歩むコツは「感謝しなくっちゃ！」をやるのではなくて、「本当の意味に気づける自分になる」事なのです。その本当の意味とは「本来、素晴らしいことしか起きていない」ということです。その本当の意味に気づいた瞬間、自動的にすべてが感謝に変わり「ありがとう」になるのです。

自分の人生は自分に責任がある

私たちはその時の自分の都合で、自分で自分の周りや出来事に、「○（マル）」だ「×（バツ）」だと色んなレッテルを張っています。そしてそのレッテルに一喜一憂しています。

周りに「○」をたくさん付けている人は、おのずと幸せになれます。では「×」ばかりを付けている人は、どんな人生を送ることになるのでしょうか。皆さんお分かりですよ。不平不満や不安だらけの人生になってしまいます。

ついつい自分の周りに「×」を付けてしまう。そして、「×ばかり！」と言って不安がったり、その「×」と戦わなければいけなくなります。では、その「×」は一体だれが付けたのでしょうか？

そう、間違いなく自分が付けているのです。自分が付けた「×」におびえたり、戦ったりしているのです。どうですか？ そんなことやっていませんか？

つまり、すべては自分が生み出し、作り上げている世界に生きているのです。そこに気づくと、自分が作り出したことだから、自分でどうにでもなるということがわかってきます。これが、「自分の人生は自分に責任がある、自分が責任を負う」ということです。

「自分の人生の責任は、全て自分にあるんだよ。」という、「じゃ私が悪いんですか！？」という人が中にはいます。良いとか悪いとかを言っているわけではありません。「自分の人生の責任は全て自分にある。」ということを経験したときに、自分の人生が自分のものになるのです。

17

しかし「そうは言っても、あいつが、こいつが！」「お父さんが、お母さんが！ 旦那が！ 会社が！ 社会が！」

と他者のせいにする人がいます。しかし、「あいつが、こいつが・・！」と言っている間に問題は解決したのでしょうか。問題はさらに大きくなっているのではないですか？

「あいつが、こいつが！」と言っている間は、自分の幸せは「あいつ、こいつ」次第ということになります。

「あいつ、こいつ」に自分の人生を、幸せを委ねているということになります。しかも、自分にとって一番都合の悪い相手にです。

それで本当に自分の望む幸せが手に入るのでしょうか。「あいつがこいつが自分の都合のいいように変わってくれたなら、私は幸せになれるのに！」「過去の出来事が変わってくれたらいいのに！」と言っているようなものです。そんな感覚どこかにありませんか？ しかし、それって可能なのでしょうか？ 永遠に無理ですよ。ただ腹が立つだけです。

しかし、それをやっているのも自分なんだということをお認めたときに、そして自分の人生は自分に責任があるということをお認めたときに、自分の人生が自分の元に帰ってくるのです。

そうすることで、初めて問題解決のスタートラインに立つことができます。

「自分の人生には全て自分に責任がある。だから自分でどうにでもなる。」と気付いた時に、初めて自分の思い通りに物事が動きはじめ、自分の人生が歩めるのです。

事例一

では、「辛いこと苦しいことは沢山あったけども、素晴らしいことしか起きていなかった。全ては『〇』だった。」という本当の意味に気づかれた、クライアントさんの体験を紹介いたします。

その前に、前置きがあります。

前世の記憶を呼び起こすと、何百年も前の出来事ですから、悲惨な場面や残忍な場面も出てきます。そうすると、中には「前世の事を思い出すことで、逆にそれがトラウマになるのではないか。」と言われる方もいらっしゃいます。しかし、今までの私の沢山の経験でいうと、トラウマになることはないようです。逆に、今まで自分を苦しめていた罪悪感や、自責の念や恐怖心が消えていきますので、とても楽になります。

前世の出来事を、思い出そうが思い出すまいが、その出来事によって作り上げた、思考パターンや罪悪感や恐怖心に、たつた今も支配されているのが事実です。その原因が明らかになり解消していきますので、とてもすっきりしていきます。ネガティブな循環から解放されます。

例えは悪いですが、あなたの中にゴミ箱があつて、そのゴミを見たくないものですから、きちんと蓋をしてあるのですが、ずっと臭いが部屋に充滿して気になっている、という状態なのです。ならばいつそのこと、ゴミ箱の蓋を開けてお掃除をしてみることです。奥底に隠した、ゴミ箱そのものを捨てることも可能になります。

19 19
そして、さらにその奥には、何事にも代えがたい宝物が隠れています。時には、神そのものの自分と対面することも可能なのです

では、最初の事例をご紹介させていただきます。仮に田中さんとします。彼女は、三八歳で三人のお子さんのお母さんです。彼女は、子供に対する対応に悩み、自分を責め続けていました。

彼女が言うには「最近、子供にきつくあたってしまった、ひどく怒鳴りつけたりしてしまっています。手が出そうになる時もあるんですが、それはどうにか押さえています。でもこのままいくと、押さえ続ける自信がありません。暴力も振うようになるのではないかと心配なんです。そんな状況ですから、子供達は私に気を使って、オドオドと顔色を窺うようになってしまってます。優しくしなくっちゃと思いつつも、ついイライラしてしまう自分をどうにかしたいんです。」というご相談でセッションにいらっしやいました。

カウンセリングを進めるうち、彼女自身が子供のころにひどい虐待を受けていたことを、涙ながらに話し始めました。彼女も彼女のお母さんから、その時の気分で殴られたり、食事を与えられなかったり、時には車で山に連れて行かれて置き去りにされたり…。さらには「あんたなんか産まなければよかった！」と事あるごとに言われていたのです。

「とにかく、お母さんの怒りのスイッチがどこにあるかわからないんです。」と悔しそうに言われます。「いきなり怒鳴り始めるんです。そして真冬でも庭に出されて、布団叩きやほうきで叩かれて、朝まで放置されるのです。それが高校卒業して家を出るまで続きました。」

あるいは、夜寝ているときいきなり叩き起こされて、怒鳴り始めるのです。とにかく意味が分からないんです。

そして、階段に正座をさせられます。しかも一番上ではなくて三段目位に。さらに内向きではなくて外向きに正座をさせられるんです。内向きだと上の段に手をつけて、少しでも休めるから。それすらできないように、外向きに正座をさせるんです。それが登校時間が来るまで続きます。

食事を抜かれることもしょっちゅうです。反発でもしようものなら、三倍になって返ってくるから、従わざるをえないんです。だから、お母さんのことが許せないんです。殺してやりたいくらいです。」と悔しそうに言われます。当然、彼女はお母さんを恨みました。

そんな母親に対して「その時の思いを母に訴えても、あの時は仕方なかったとか、あなたがあんなことをするからとか、そんなことしか言わないんです。絶対に謝ってくれないんです。一言でも本心で謝ってくれたら、少しは違うと思うんですが……。」と涙をこらえながら訴えられます。

さらに、「でも、あんなお母さんなんか、今まで絶対に許したくないと思ってきましたが、自分も同じようなことを子供たちにするようになってしまつて。母に対する怒りが子供に向いているんだということに、自分でも気づき始めました。母を許さなくちやと思うんですが、どうしても出来ないんです。結婚して実家から車で一〇分くらいの所に住んでいるんですが、母と会うとイライラするものですから、盆と正月くらいにしか帰らないようにしてゐるんです。

父も七年前に亡くなり、母も年をとつて一人暮らしで寂しそうなんです。体調も思わしくないようですから、昔の事は忘れて優しくなくつちやと思うんですが、どうしても出来ないんです。」と絞り出すように話してくれました。

彼女も子供の頃からひどい虐待を受け、悲しみと寂しさと、怒りが心の奥底にこびりついていたのでした。そのこびりついていた感情が、子供たちに向いていたのです。いわゆる虐待の連鎖が起きていたのでした。

「本当に辛かったね。悔しかったろう。恨んでも仕方ないよね。」と声をかけると、「はい」と苦しそうに涙を流されます。

「しかし、なぜあなたはそういうお母さんを選んで生まれきたんだろうね？」と私が言うと、「私は選んだ覚えはありません！ 子供が親を選ぶと本に書いてあるのは読んだことはあります。しかし、それは私には当てはまりません！ もし選んだとしても、間違いました！」と言い張るのです。

「認めたくないよね。しかしね、間違うという事は絶対にありえないからね。あなたが今のお母さんを選ぼうと思つた、原因となつてる人生と向き合おう。」と私がいうと、彼女も覚悟が決まつたようでした。

さらにセツシヨンを進め、彼女を催眠状態に誘導し、前世の記憶を蘇らせていくと、原因となつてゐる人生が明らかになつてきました。

彼女は中世のヨーロッパのある宮殿のお姫様でした。一人娘なものですから、とてもわがまま放題に育てられ、使用人に対してとても傲慢に接していたのです。気に入らないことがあると、罵倒したり、せっかんをしたり、平気でひどいことをしていました。わがままな彼女は気にも留めていませんでした。

そんな彼女も年頃になり、親の勧めで結婚はしたものの、そんな性格ですから嫁ぎ先でも同じようなことをやつてしまいます。当然、結婚生活もうまくいかず、離婚し実家に帰つてきたのです。そうすると、さらにわがままに拍車がかかり、せっかんを通り越して、家来に命じて拷問をしたり、監禁して餓死させたりと、どんどんエスカレートしていったのです。そうやって8人くらいのメイドさんを死なせてしまったのです。しかし彼女は、そんなことになつても気にも留めていません。もちろん使用人はどんどんいなくなりました。

しかし、まだご両親が健在な内は、どうにかなつていたようですが、当然ご両親も先に亡くなり、自分が後を継ぐことになつた時には、全ての使用人が出て行つてしまつたのです。一人ぼっちになつてしまつた彼女は、料理はもちろん、

身の回りのことも何もできません。そのみじめな姿を見かねて、一人のメイドさんが戻って来てくれました。

そんな彼女も年をとるにしたいがい、今までの自分の言動に気が付き始めました。「何て傲慢で、わがままな自分だったんだろう。みんなに本当にひどいことをしてしまった。こんな自分が、みじめで寂しい老後を送らなくてはいけないのも仕方ない。自業自得よね…。」

そして、彼女は亡くなるときに「次は、人の痛みがわかるもつと優しい自分にならなくちゃ…」。そう思いながら、五〇歳の若さで、最後まで残ってくれたメイドさんに見守られながら死を迎えたのです。

彼女は前世の場面を思い出しながら、ずっと泣き続けていました。

彼女の壮絶な前世が明らかになった後、さらに彼女を「今のお母さんのお腹の中に入る前、今回の人生の計画を立てている場面（中間生）」へと誘導しました。

彼女に「あなたはそこで、次の人生どうしようと思ってる？」と聞くと、「人の痛みがわかる優しい自分にならなくてはいけないと思っています。」と答えます。

さらに「ではあなたは、なぜ今のお母さんを選んだの？」と聞くと、彼女は号泣しはじめ、しばらく言葉になりません。そして、途切れ途切れに「とても優しい人だからです…」というのです。

私が「優しくしないでしょ。あなたにあんなひどいことをしたお母さん、優しくはないでしょう。」というと、彼女はさらに号泣しながら「優しいんです！ 優しいんです！ とても優しい人なんです。」と訴えるのです。

23
さらに私は「その優しいお母さんに、あなたは何かお願いしなかった？」と聞くと、「お願いしました。私に痛みを教

えてとお願いをしました。」と言います。

私 「あなたがお願いしたんだね。」

田中 「はい。」(涙)

私 「お願いされたお母さんは、何と言ったの？」

田中 「あなたのお母さんになることはいい。しかし、あなたにそんなひどいことをすることだけは勘弁して、と何度も断られました。」

私 「断られて、あなたはどうしたの？」

田中 「私も何度もお願いしました。こんなお願いができるのは、あなたしかいないから。あんなダメな自分には戻りたくないから。どうかお願いだから、私に厳しくして。私がメイドさん達にしたことと同じことをして、何度もお願ひしました。」(号泣)

私 「その時のお母さんはどんな気持ちだったんだろう。どんな表情をしてた？」

田中 「とてもつらそうな表情をしてました。」

私 「本当は、お母さんはあなたにどう接したかったんだろう。」

田中 「もっと優しくしたいと思っていました。」

私 「そうだよ。その方がお母さんだつて穏やかな人生が送れた。」

田中 「はい。」(号泣)

私 「お母さんも辛かっただろうね。そのお母さんに何て言いたい？」

田中 「本当にごめんなさい。辛い役目をお願いして本当にごめんなさい(泣)」

私 「そして、あなたの願いを聞いてくれたことに對しては何て言いたい？」

田中 「ありがとう。本当にありがとう。ありがとう。(号泣)」

さらに「そのお願いをしたお母さんは、前世の誰なの？」と私が訊くと、「最後に残ってくれたメイドさんです…。こんなお願いができるのは、あなたしかいないからつて、お願いしました。」と更に泣きじやくります。

「本当にごめんなさい。本当にごめんなさい。」と何度も何度も謝るのです。

そうなのです。彼女は今回生まれてくるときに、前世で自分を看取ってくれたメイドさんを、お母さんを選んだのです。自分のわがままを最後まで聞いてくれた、前世の使用者だった人を。この人なら私の真の願いを聞いてくれると思つて、文字通り一生のお願いをして生まれてきたのです。彼女は「もう前世のような失敗はしたくないから、人の痛みが分かる優しい自分になりたいから。」と、お母さんをお願いをしていたのです。

そのことに気づいた瞬間、全てが「ありがとう」に変わったのです。苦しいこと辛いことは沢山あったけど、実は素晴らしいことしか起きていなかった。自らの人生をかけたお母さんの深い愛に、ずっと包まれていたことに気づいた

のです。これが彼女とお母さんの、魂レベルの思考であり、契約だったのです。

その三日後のことです。彼女から電話がかかってきました。

「あの日、セッションが終わって、実家に直行したんです。」彼女の実家が、セッションルームの近くだったんです。さらに、「お母さんの顔を見た瞬間、産んでくれてありがとう、思わず言っていました。言った瞬間、涙が溢れてそれ以上何も言えなくなってしまいました。

それを見ていた母は、オロオロしながら、何かあったの？と言ってたようですが、しばらくして母も泣きながら、今まで本当にごめんね、と本心で謝ってくれたんです。」と電話口で泣いていました。ここまですぐと、人生が一八〇度変わらうそうですよね。

彼女は今までの体験の本当の意味に気づくことができたのです。彼女のお母さんは、自分の人生をかけて、彼女の魂レベルの望みを聞いてくれていたのです。

彼女はそのことを思い出したのです。そして、彼女とお母さんの間にあった魂の契約はすべて成就して、解約されたのです。自らに課した課題を手放すことができました。二人は、本来の素晴らしい関係に戻っていったのです。

その後お子さんたちにも怒鳴ることがなくなり、子供らしい表情にもどられたそうです。

どうですか？ 実は物事って、こういうふうにして起きているのです。確かに、つらい苦しいことは沢山あったけど、悪いことが起きていたわけではないのです。

すべては「私になりたい私になるために、私が望んだ素晴らしい出来事」だったのです。そして、あなたの周りの沢山の大切な人たちが、あなたの素晴らしい望みをかなえるために、人生をかけてお手伝いをしてきていたのです。その本当の意味に、気付いていない自分がいただけのことなのです。全てが「〇」だったのです。

ここで誤解をして欲しくないのですが、自分が望んだことから、虐めや虐待を受け続けても仕方ないと言っているわけではありません。荒波の人生を望んだとしても、想定外の大波が来るときもあります。時には逃げることも必要です。しかし、辛い状況の中にいる本当の原因に気づくことで、根本的な解決に至ることができるのです。荒波そのものをなくすことが出来るのです。

本当の意味に気づき、自分を許すことで、それが可能になります。自分で望んだことから、自分でどうにでもなるということがわかってきます。感謝に変わります。人生の流れが変わり始めます。

この本を読み進める内に、その意味がお分かりいただけると思います。

ネガティブ感情の製造工場

では物事って、どのようにして起きているのでしょうか。図1をごらんください。あなたの感情をコップに例えると、あなたのコップの中に不安感や自己否定、寂しさや罪悪感、怒りや必要のないプライドがたまっているといいます。それでも普段は余裕がありますから大丈夫なのですが、周りから何か刺激があると、それが一気に溢れ出します。

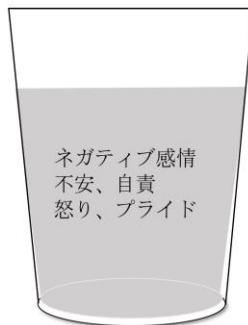
例えば、馬鹿にされたり、否定されたり、一人ぼっちになったりすると、自信をなくしたり、自己否定をしたり、寂しさに襲われたり、怒りが湧き上がってきたりします。(図1)

そうすると「どうせ私は一人ぼっちで当然よね…」「やっばり私なんか…」自分のことなんかわかってくれない…」「バカにしやがって！」というネガティブ感情に支配されていきます。

そして、溢れ出た感情を処理するために、一生懸命頑張ったり、自己犠牲をすることでごまかしたり、涙でこぼしたり、時には怒鳴った

図1

ネガティブ感情の製造工場



周りは製造工場をつついてくれる。
「それを持っていると苦しいでしょ」と教えてくれる。

周りの人



りすることで吐き出そうとしたりします。(図2)

そうすると、ネガティブ感情が少し減りますから、安心するのですが、また周りからつつかれると、同じことを繰り返していきます。

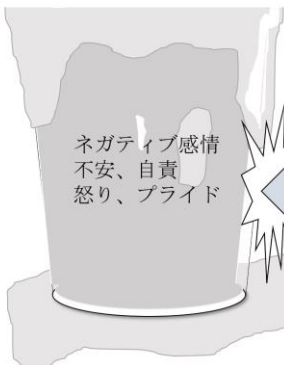
ではなぜ周りはあなたのことを否定したり、怒らせたり、不安がらせたりするのでしょうか。それは、「あなたの中に、不安感や自己否定や、怒りや無駄なプライドがあるでしょうか？ それを持ったままだとあなたは辛いでしょ？ 苦しいでしょ？ それがあなたを苦しめていることに気づいている？」「こうやって、否定されたり、無視されたりすると、すぐに反応してるでしょ？ あなたの中にネガティブ感情の製造工場があるでしょ？ それをどうするの？ いつまで持つておくの？」と、つついてくれるのです。教えてくれているのです。

しかし、本人はなかなかそれに気づきません。それどころか、本人にとっては、嫌な出来事でしょうかありません。ですから「自分が自分のことを認めてくれないから、不安だし寂しくなるんだ。」とか「あの人が自分のことを否定するから、腹が立って仕方ないんだ。」などと思ひ、さらにネガティブ感情に支配されていきます。

そして「こんな嫌な所にいたくない！」と言って、他の所に行こうとします。しかし、残念ながら、その製造工場を持ったまま行きますか

図2

ネガティブ感情の製造工場



つつかれると、ネガティブ感情が溢れ出す。

「あいつがこんなことするから！」と相手のせいにする。

周りの人

ら、また同じ事が起きます。同じことの繰り返しなのです。そんな経験ありませんか？

根本の問題はどこにあるのでしょうか。製造工場をついている周りの人に原因があるのでしょうか。それとも製造工場そのものに原因があるのでしょうか。明らかですよ。周りは、あなたを苦しめている製造工場が、そこにあるよと教えてくれているだけのことなのです。それに気づいていない自分がいるのです。ならば、それに気づいて、あなたが製造工場をなくすことなのです。それがなくなれば、周りが幾らつつこうが、反応するものではありませんので、素通りするだけのことです。何も起きていないことと同じになります。

さらに、周りは製造工場があることを教えてくれただけです。それが無くなれば、もう教えてあげる必要はありません。ですから、周りの人のあなたに対する対応がガラリと変わり始めるのです。

しかし、なかには「あんな意地悪な人が、そんな素晴らしいことをしているはずがない。本当に意地悪でやっているとは思えない。」と思う人もいるでしょう。そう思っても仕方ないことです。その意地悪な人は、表層意識（頭での思考）では本当に意地悪な気持ちでやっている可能性があるからです。

しかし、その奥の深層心理を越えて、さらなる奥の魂レベルでは、皆さん神そのものです。皆さんから全て善意でやっているのです。しかし、その意地悪な本人もそこには気づいていないのです。頭での思考と、魂レベルの思考とは全く違う場合が多いのです。実は、このように魂レベルの思考が現実化しているのです。しかし、人間を体験しに来ている私たちの世界（三次元、人間界）では、魂レベルの思考には、気づいてはいけないことになっています。これについても、後ほど詳しく説明いたします。

事例二

では、ここでもう一つ事例を紹介させていただきます。強い自己否定に悩まされていた方の事例です。

川口さん（仮名）三八歳女性の場合です。

セッションが始まり、「今日は、何を相談にいらつしやいましたか？」とお聞きすると、彼女は「いつも自信がないんです。結婚して主人の実家に同居してなんですが、いつもお義母さんの目が気になって、気が落ち着く時がないんです。お義母さんと仲が悪いわけではないですが、ちょっとした嫌みを言われたりもします。そうすると、とても落ち込んで自分が最低の人間のような気がするんです。そうやって、いつもオドオドしているんです。」と自信なさげに言われます。

確かに、彼女と普通にお話をしていても、何かにつけて「すみません」と言われます。「すみません」が口癖のようです。

「子供の頃はどうかでしたか？ お友達とは仲良くできていましたか？」聞くと、「思い起こしてみれば、子供の頃から周りに気を使ってたみたいです。自分の意見は言わずに、常に相手に合わせようとしていました。ちよつと強い口調で言われたりすると、何か叱られてるようで、ビクビクしてしまうんです。」

「どうもそんな感じみたいですね。すみませんが口癖みたいですね。」

「主人からも言われるんです。謝らなくてもいいことに、いつも謝っている…。」

「そうみたいですね。周りから否定されると思うと、どんな気持ちになりますか？」

「とても怖いんです。存在そのものを否定されそうな気がします。」

彼女の言葉の端はしに、強い罪悪感と自己否定が透けて見えます。ですから、周りから認めてもらうなり、許してもらう必要があるのでしょうか。「○」が必要なのです。少なくとも「×」をつけられてはいけません。「×」をつけられるということは、彼女の存在そのものを全否定されそうなことなのです。ですから彼女は、周りから○をもらうことだけに専念をして、どんなことでも受け入れて、自分の気持ちや考えを押し殺さなくてはいけない、と思っっているようです。

彼女ほど強くはないにしろ、そのような感覚を持つてらっしゃる方は沢山いらっしゃいます。

そこで、彼女がなぜそのように思いこんでしまったのか、原因となっている前世へと誘導しました。

二百年ほど前の東南アジアの人生がでてきました。彼女はその人生では男性で、漁師をやっていました。

ある日、いつものように友人と二人で小舟で漁に出掛けたのですが、突然の嵐に遭遇し、船は転覆して沖まで流されてしまいました。やつとの思いで、無人島に泳ぎ着いたのですが、自分たちがどこにいるのかさえもわかりません。食料もなく、何日もするうちに友人は餓死してしまいました。当然彼女も餓死寸前です。その極限状態の中で、彼女は友人の遺体を食べてしまったのです。そうすることで、やつと生き延びることができたのです。

その数日後、沖合を通りかかった船に助けられ、彼女は村に戻ることができました。

家族や村人たちは、生還したことをとても喜んでくれるのですが、自分がどのようにして生き残ったのか、誰にも言えません。友人の安否を聞かれても「わからない」と言うしかありません。本当のことを言えるはずがありません。ましてや、友人の遺族に合わせる顔などありません。申しわけなくて申しわけなくて仕方ないのです。加えて、いつかはそのことがバレそうで、神様から罰せられそうで、怖くて怖くて仕方ないのです。

彼女はその罪悪感と恐怖心の中で、毎日をオドオドとして「すみません」を口癖のようにして、暮らしていたのです。しかし、いくら謝っても本当のことを言えませんが、謝罪しきれないのです。

「そのときの友人は今のだれだかわかりますか？」と聞くと、彼女は「今の夫です」号泣しながら言います。実は前世の友人が今のご主人だったのです。さらに、その遺族が嫁ぎ先の家族だったのです。ですから、肩身が狭い思いをして当然だったのです。彼女の涙が止まりません。

ではなぜ彼女は、前世の友人の家族のところに嫁いできたのでしょうか。全く違うところに行けば、そんなに肩身の狭い思いをしなくても済んだはずですが、それをあえて今の嫁ぎ先を選んだ理由があるはずですが、そこで、事例一の田中さんと同じように、今回の人生の計画を立てている場面へと誘導しました。

私 「あなたはなぜ、前世の友人のところに嫁にいかうと決めたの？」

川口 「前世であんなことしてしまったから、罪滅ぼしをしたかったんです。」

私 「しかしそこに行くと、肩身の狭い思いをするということはわかっていたよね。」

川口 「はい。わかっていました。」

私 「それでもそこを選んだんだ。しかしあなた一人が選んでも、嫁ぎ先の家族の許可がなければそこにはいけないよね。では、嫁ぎ先の家族と、あなたの魂が話し合いをしている場面へと行こう。あなたはそこで、皆さんとどんな話し合いをしましたか？」

川口 「前世であんなことをしたから、罪滅ぼしをさせて下さいと皆さんにお願いをしました。」

私 「そうなんだ。皆さんはどうしてますか？」

川口 「みんなとても優しそうな顔をしています」（涙）

私 「そうだよね。皆さんはあなたに何か言ってますか？」

川口 「あなたがそれで気が済むならば、そうしなさいと言ってくれています。（号泣）

私 「最初から、みんなあなたのこと許してくれてたんだ。そうでなければ、あなたのことを家族にはしていないものね。」

川口 「そうでした。初めから許してくれました。（涙）

彼女の今回の結婚の大きな目的は「罪滅し」でした。それが、彼女の「すみません」の原因でした。

しかし、ご主人の家族は、「それであなたが楽になるならば」と、全てを分かった上で受け入れてくれていたのです。大本の原因がわかり、魂レベルの癒しをすることで、彼女の罪悪感がなくなり、心から安心することができたようです。

数日後、彼女からメールが来ました。

「先日は本当にありがとうございます。まさか私が前世であんなことをしていたとは思っていませんでした。しかし、思い出してみると、とても説得力があります。現に、とても楽になっています。

セッシヨンの翌日に、朝いつものように、主人と子供たちと、お義父さんのお弁当を作っていたら、お義母さんが横に来て『あなたのお弁当はいつもおいしそうね』と褒めてくれたんです。

びつくりしました。今までそんなことありませんでした。もしかしたら、褒めてくれていたのに、気づいてなかっただけなのかもしれないとも思いました。とても嬉しくて、素直に『ありがとうございます』と言えました。以前ならば、嫌みを言われているように受け止めていたんじゃないかと思います。

そういえば『すみません』の口癖も、気が付くとなくなっているようです。さつき、試しに『すみません』とつぶやいてみたのですが、とても違和感があつて、『謝る必要なんかないのに』という感じでした。

本当に楽になりました。肩こりもとても軽くなっています。今まで緊張していたんだということがよくわかります。また何かあつたらお願いしようと思います。本当にありがとうございます。」

ご主人やお義母さんは、罪悪感にさいなまれていた彼女を、嫁として迎えてくれていたのです。そして、ちよつとした嫌みを言うことで、彼女の中の罪悪感の製造工場をつついてくれていたのです。

「あなたはいつまでその罪悪感を持つておくの。それを持つたままだときついでしょう？」と教えてくれていたのです。彼女はそれに気づくことができました。そして、自分を苦しめていた罪悪感を手放すことができました。

彼女は今まで、周りから○をもらうこと、許してもらうことに専念をしていました。ましてや「×」をつけられることは、とんでもないことでした。そうでなければ、自分には存在価値はないという強い思い込みが根底にあったのです。その原因から解放され、彼女はとても楽になったようです。

彼女の場合は、少し特殊な事例ですが、そこまではないにしろ、多くの方が自分は誰かに認めてもらうなり許してもらうことで、「○」をもらわなくてはいけない、という思い込みを持っているようです。

「どうあるべき！」がXを作り出す

では、あなた自身が今の自分に○△「X」を付けるとしたら、さてどれですか？

はたして、「私は○（マル）です！」きっぱり言い切れる人が何人いるでしょうか？ 十人に一人いれば良い方でしょう。

ほとんどの方が「自分は○とは言えない。」と知っているのではないですか？

「X（バツ）ばかりとまではいかなくても、完全に○とは言いかねない。」という方がほとんどでしょう。事例二の川口さんは、自分に大きな「X」をつけている典型でした。クライアントさんの中には、そんな方が沢山いらっしゃいます。

実はそこに問題の根本があるようです。自分のどこかに「X」を付けている。

自分に「X」を付けていると、周りに○を付けられなくなります。だって、自分が「X」なのに周りに○を付けるのは悔しいものね。

さらに、物事を判断する基準は何を基準にするかということ、自分自身なんです。自分が一番よく知っている人間は自分でですから、その自分に「X」を付けていると「人間というものは、どうせそんなもんだ。」世の中って大変なんだ。」としか、見れなくなります。

例えは悪いですが、泥棒が家を建てるとすると、どんな家を建てようですか？ ちよつと考えてみてください。

防犯設備を厳重にやりそうですよね。自分が盗むから、他の人も盗むだろうと思いませんか？

詐欺師が人を信用できるでしょうか？ ずっと疑ってそうですね。自分が騙すから、周りも嘘をついているんじゃないかと思えなくなります。

そのように他の人を見るときも、無意識に自分を見るときと同じ目線で見えてしまいます。つまり、自分に「X」を付けていると、周りの人や世の中や、出来事もどうせ「X」だろうとしか見られなくなります。

しかし、「X」だらけの自分では生きていけませんから、誰かに○をもらわなくてはならなくなってきました。そこで○をもらうために、必要以上に頑張ったり、良い人のふり、良い子を演じていかなければならなくなります。時には「自分さえ我慢すれば……」と、自己犠牲をしたりします。そうすることで、他人から必死に○をもらおうとします。

あるいは、取り敢えず相手に○を付けることで○をもらおうとする人もいます。無駄に人をほめたり、おだてたり。しかし、○を付けているふりをしても、どこかに「X」を付けてしまいます。そうすることで、自分の「X」とのバランスを取ろうとします。

あなたはどうですか？ やってませんか？

しかし、相手に○を付けることで、自分が○をもらおうとしたり、良い人を演じることで「○」を集めようとする人はまだいい方です。

中には自分の「X」を正当化するために、相手にさらに大きい「X」を付けようとする人もいます。「あなたの「X」より、まだ私の方がましよ！」とやっつけてしまいます。そして、バトルが始まってしまったり、あるいは自分の理想像を相手に押し付けようとしたりします。それって大迷惑ですよね。

では、なぜ自分に「X」を付けてしまうのか。それは、自分の中に何かの基準があるからなのです。「これが正しい。」「こうあらねば……。」という基準が、実は「X」を作りだしているのです。

「これが正しい。」と思った瞬間、それ以外は「間違い」「X」になってしまいます。そして、「X」に囲まれて生きて

いかなければならなくなるのです。(図3)

では、その基準ってどんなものなのでしょう？ ○になるための基準ってどこにあるのでしょうか？ 絶対的な基準ってあるのでしょうか？

実はどこにもその基準ってないんですよ。

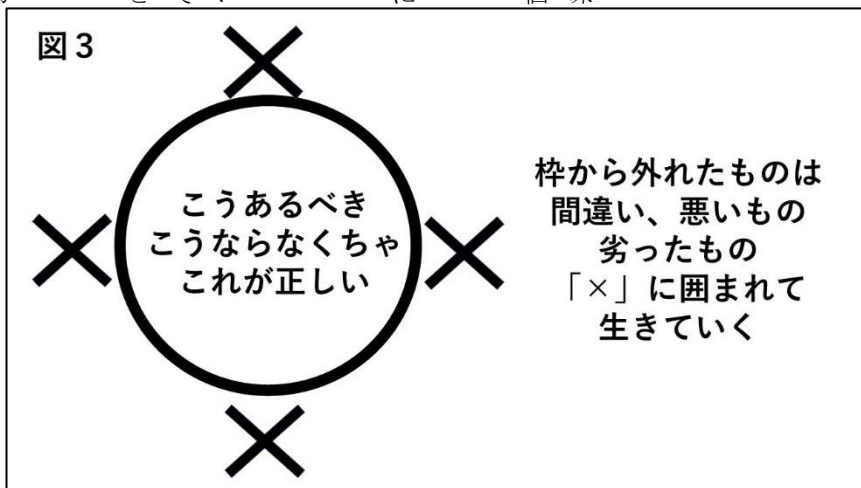
あるとすれば「誰かがこう言った」「これが普通」「常識」等々。実に曖昧なものなのです。それは、時代や国、宗教、個人によって違ってくるし、個人もその時の気分や都合によって、コロコロ変わってしまいます。

そんな曖昧なものを基準として自分で自分を評価し、その上、その基準に合わない自分に「×」を付け続けて苦しんでいる。

そんなことをやっていませんか？

実はこの「こうあるべき」が問題を作り出す大本なんです。これが正しいと言った瞬間、それ以外は間違いになります。自分で勝手に枠を作り出しておいて、その枠によって発生した「×」と戦っているんですね。あなたはどうですか？

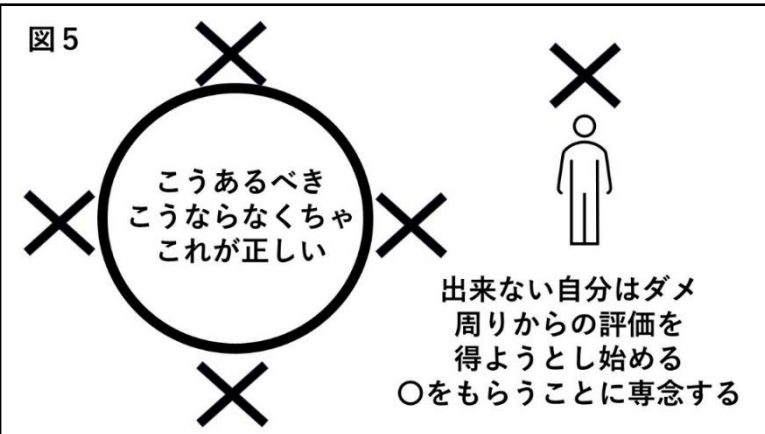
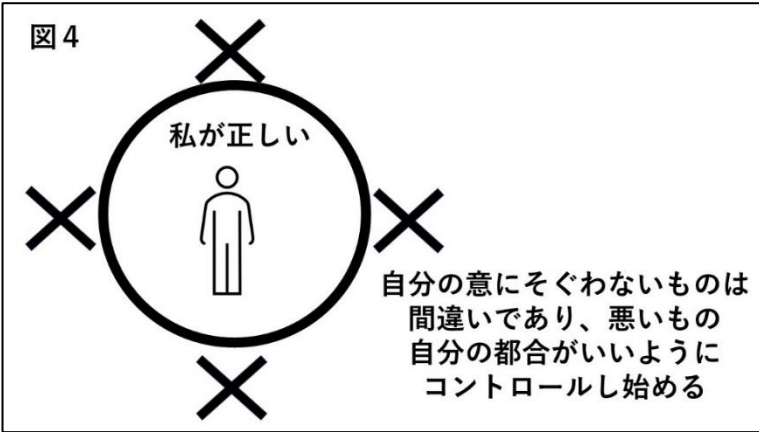
ほとんどの方がそれをやっているのですが、その中でも2種類の人種が



います。

一つは「こうあるべき」と言っ
て、自分はその枠の中にいる人。「私は正
しい」と言っている人です。(図4)
そして「あいつが、こいつが」「社会
が、政治が」と自分以外を批判したり、
他人に自分の価値観を押し付けよう
としたりしている人です。当然「あ
いつがこいつが」に囲まれて生きていく
こととなります。

それともうひとつは、「こうあるべ
きだ」と言いながら、自分はその中
に入っていない人です。「こうあるべ
きなんだけど、それが出来ていない
私はダメ…」となっている人です。
(図05) その人も当然「X」に囲
まれて生きていくこととなります。



そして「私は正しい」といって、枠の中にいる人は、枠の外にいる人に対して、「こうあるべきでしょ！」と相手の「×」の部分で攻撃し始めます。相手にダメ出しをしておいて、自分の思い通りにさせようとするんですね。自分の意に沿わないものは間違いであり、悪いものとなっていきます。そして周りをコントロールしはじめます。

そこまでいかないにしても、自分の理想像を相手に要求して、小さな衝突を繰り返したりします。あるいは、自分の価値観を相手に押し付けたりします。

しかし、周りは自分の思うようになりませんから、いつもイライラすることになってしまいます。

あるいは、枠の内側にいる人の中には、先ほども言いましたように、自分の「×」を正当化するために、周りに更に大きな「×」を付けようとする人もいます。それは、他人に「×」を付けることで、自分を正当化しようとしたり、自分の優位性を保とうとしているのです。つまり、そのような人も本当は自分の中の「×」を、一生懸命守ろうとしているということになります。沢山の鎧で守らなければならない何かがある中にあるのでしょうか。

さらに「私はダメだ」と枠の外にいる人は(図5)、「これが正しい。」「こうあるべき。」「立派にならなくちゃ。」「と言いながら、出来ない自分に対して「私のこんなところがダメだから、理想の自分にならなくちゃ。もっと立派な人にならなくちゃ…」とやり始めます。自分にダメ出しをしはじめます。

そうすると、「良い人」「元気な人」を演じたり、時には自己犠牲をやり始めたりします。「私さえ我慢すれば

…。」とやり始める人もいます。そうすることで、周りから「○」をもらうことに一生懸命になっていきます。「○」がたくさん集まれば、あるいは「○」を沢山もらえる自分になれば、誰かに許してもらえれば幸せになれるんじゃないかと思ひ始めます。しかし、いくら「○」をもらったところで、安心できません。もともと「私は×です」と言っているのですからね。

さらには、昨日もらった「○」を今日「返せ！」と言われるかもしれないし、今日もらったけども、明日はもらえないかもしれない…。そうやって、いつも不安の中で生きていかななくてはなりません。

事例二の川口さんがまさにそうですね。「こんなに罪深く、ダメな私は皆に許してもらわなくてはいけない。」「あなたはもう○よ」と言ってもらわなくてはいけないと思ひ込み、「許してもらおうこと」「○」をもらうこと」で幸せになる許可をもらおうとしていました。

しかし、枠の中にいようが、外にいようが結果は同じなんです。結局は「×」に囲まれて、「×」と戦い、「×」に怯えながら生きていくことになります。あなたはどっちにいますか？

これも、ほとんどの人が状況や都合に応じて、枠から出たり入ったりしているでしょう。例えば、会社や学校では「やっぱり私って…。」と思つて自信を無くしたり、しかし家に帰ると家族に対して「あんたが！」と人を責めたりします。残念ながら、まだ私にもそういう側面があります。

そのようにしても、どちらも自分や周りに付けた「X」をどうにかしようとし始めます。あなたもそれをやっていませんか？ そして、その「X」は無くなりましたか？ どうでしょう。逆に増えていませんか？

そうなんです。「X」をどうにかしようと思えば思うほど、「X」は逆に増えるんです。それは、当然のことなんです。

「X」をどうにかしようと思つているということは、枠にこだわっているということです。そして、その枠が「X」を作り出していたのですから、「X」をどうにかしようと思えば思うほど、「X」は逆に増える一方だという悪循環に陥ります。少なくとも「X」が無くなるということはずありません。

「なぜ、あなたは私のいう通りにしないの！」。そう言えば、相手から反発が返ってきます。もし、相手がおとなしい人であれば、その時は従うでしょうが、心の中では怒りが渦巻いていたり、自信をなくして、さらに出来ない人になっていたりします。

あるいは、「自分はダメだから、頑張らなくっちゃ！」と頑張るのですが、結局疲れ果てて、なにもできなくなったり、失敗したり…。そして結局「やっぱり私って…。」となつてしまいます。

そんな経験ありませんか？ それは、あなたの周りの「X」や、自分に付けた「X」をどうにかしようと思つたからなのです。

「X」をどうにかしようと思えば思うほど、「X」はどんどん増えていくことになります。

では、どうしたらいいのでしょうか。

それは、「×」をどうにかしようとするのではなく、「こうあるべき」という枠を無くすこと、はずすことなのです。枠が「×」を作り出していたのですからね。枠を外せば、自動的に「×」は無くなります。「×」から解放されるのです。



枠をかけたない

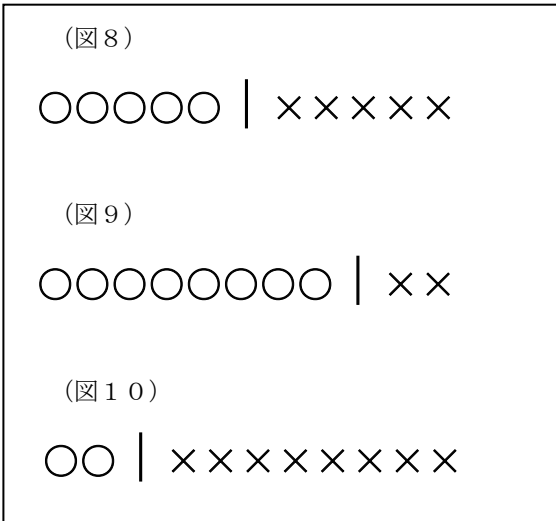
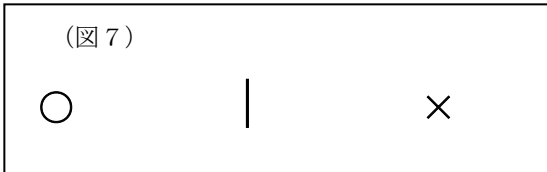
さらに、左の(図6)をご覧ください。「○」と「×」がありますね。ではその「○」と「×」の境目はどこにあるのでしょうか。その境目に線を入れてみてください。

どうですか？ ほとんどの方が(図7)のように線を入れたのではないのでしょうか。そうするとどうなるでしょう。

あなたが入れたその線の左側は○がいっぱいになり、右側は「×」だらけになります。(図8)

さらに(図9)のように線を引いたらどうなるでしょう。○が沢山になりましたよね。

ではさらに(図10)のように線を引きたらどうでしょう。今度は「×」ばかりになってしまいました。



もうお分かりでしょう。実は「○」や「×」が生まれる原因は、あなたが引いた線にあったのです。

あなたが境目の線を引いたから、そこに「○」と「×」が発生してきたのです。もともと「○」と「×」があったわけではありません。あなたが引いたその線が「×」を作り出していたのです。つまり「×」に問題があるのではなく、線の方に原因があったのです。そして、線を引いたのはあなた自身です。ですから自分でどうにでもなるということなのです。

しかしほとんどの方が、「×」に問題があると思いついで、「×」をどうにかしようとし、それによって本当の問題解決になるのでしょうか？

では(図11)のように線を引いたらどうなるでしょう。

全て「○」になりますよね。そして「○」に囲まれて生きていけるのです。

どうですか？ そんな人生を歩んでみたいと思いませんか？ それは可能なのです。自分が変わることで、全てに「○」を付けられる自分になることで、「○」に囲まれて生きていけるのです。

全てが「○」だという『本当の意味』に気づける自分になることで、全てが感謝に変わるのです。

しかし、「そうは言っても「×」はあるじゃないか」と言いたくなる人もいます。確かに、世界中ではいまだにテロや戦争も起きていますし、悲惨な出来事がたくさん起きています。それはたしかに「×」です。しかし、大抵の原因のほとんどは、実は全てが○だということに気づかず、恐怖心に支配されたり、自分の主張を繰り返したから

(図11)



にほかなりません。先ほど赤信号の話と同じです。自分に都合の悪い出来事や相手の価値観に、「×」を付けてしまったからなんです。

最初に、全ては「○」だということに気づいていれば、何も問題は起きなかったはずです。

しかし、どうしても線や枠を外せなくなってしまっている私たちがいます。これは仕方のないことかもしれません。何百年何千年にもわたって、三次元の世界（肉体界）で刷り込まれてきている事ですからね。無意識のうちに、深いところで線を引いてしまっているんです。それが当たり前になってますから、気づかないでいるのです。

しかし、その線をあえてはずしてみることです。そうしたら全てが「○」だということがわかってきます。少なくとも、私たちの周りの身近な世界には、今一度「○」を付けることは可能です。

それでもなお、「×」に見えてしまう時はあります。残念ながら私もまだそういう時もあります。一生懸命頑張ってもうまくいかなかったり、誤解されたりする時もあります。そうすると、否定的な考えになったりもします。

しかしそういう時は、「全てが『○』のはずなのに、まだ私には『×』に見えてしまう。何を勘違いしてるんだろう。何にまだ気づいていないんだろう。」と考えることです。思考のベクトルを外に向けるのではなく、自分の内面に向けてみることです。気づいていない自分がいるのです。そこに焦点を当ててみることです。

もちろん、身近なところで仕事での失敗や、人間関係のトラブルや争いは起きてきます。それは改善していく必要があります。しかし、その問題点やトラブルは、間違いなく私たちに大切なことを教えてくれますし、成長や大きな気づきを与えてくれます。そして、その問題点やトラブルも、ほとんどの場合、実は自分の深層心理が望んでいることなのです。自らの成長や大きな気づきを求めて、魂レベルで自分がいろいろな課題やトラブルを求めている場合がほとんど

です。自分の思いが現実化しているのです。そういう自分の思いに焦点を向けて「なぜ、なぜ、なぜ？」と考えてみることです。そうするとなんとなく答えが見えてきます。

「『×』ではなく、『○』っぽいぞ」とわかってきたときに、あなたは答えに近づいているということです。それは、すべてが「○」だということが真実だからです。物事は真実に基づいて考えてみることです。つまり、全てが「○」だという前提に立ってしまうことです。そうすると、なんとなく答えが見えてきます。人生が変わりはじめます。



「〇」をもらうことで幸せを得ようとする

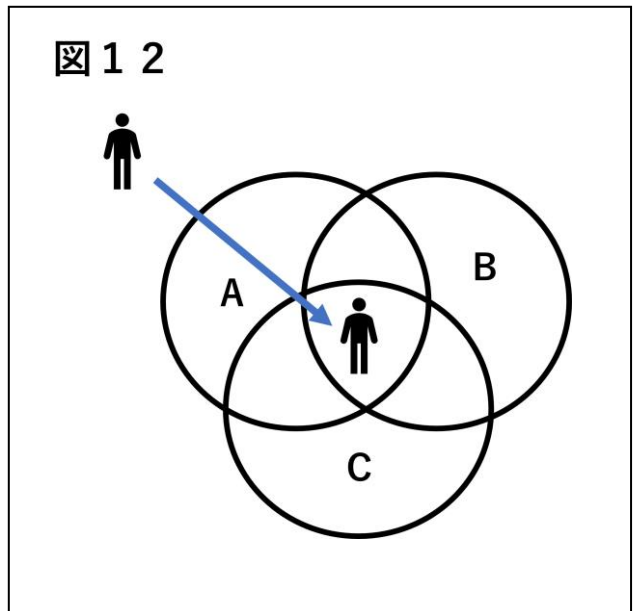
しかし、残念ながら自分に「×」を付けている方の多くは、周りから「〇」をもらわなくてはいけないという思い込みをしていますが。「〇」をたくさんもらうことによって、幸せが得られると信じ込んでいます。

つまり、周りからどれだけ認めてもらえるかで、幸せの量は決まると思い込んでいる方が多くいます。その為に、図12のようなことをやり始めます。

自分の周りのAさん、Bさん、Cさんに「〇」をもらわなくちゃいけないと思いついていますから、皆の価値観が交わる場所にいないではいけなくなります。つまり、みんなから「〇」をもらえる場所に入り込もうとします。

皆の価値観が共通する場所を探さなくてははいけません。それは至難のわざです。

しかし、こんなことをやってませんか？ こんな狭い枠の中に入り込んで窮屈じゃないですか？ 事例二の川口さん



はまさにそうでした。「すみません。すみません。」と言いながら、皆が受け入れてくれる場所をずっと探していたのです。

でも、Aさん、Bさん、Cさんだけがいるんならまだいいんです。狭いながらも居場所がありますからね。

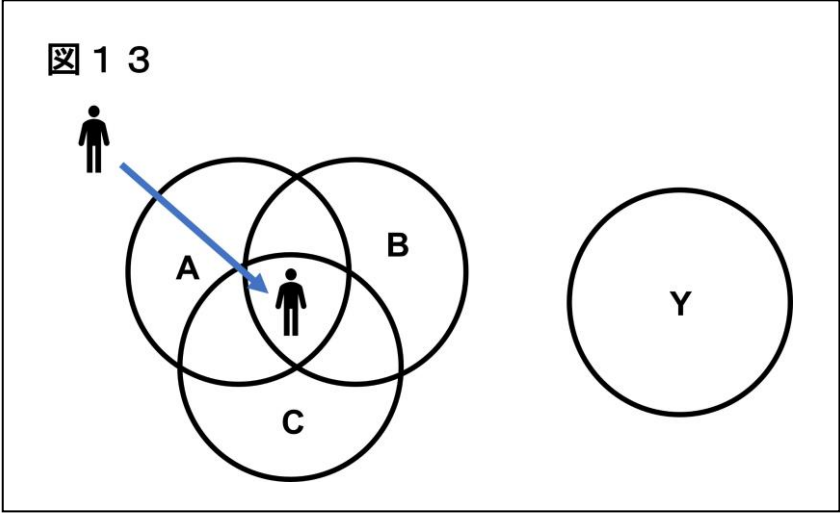
しかし、そこにAさんとも、Bさんとも、Cさんとも交わらないYさんが現れるとどうなるでしょう？ (図13)

もうどうにもなりませんよね。そこで破綻してしまいます。あなたの居場所が無くなってしまいますのです。

そうすると、どうし始めるでしょう。「Yさんっておかしいよね。」とAさん達に言い始めます。そうやって自分の立ち位置を正当化しようとしたり、確認しようとし始めます。

あるいは、どう対処したらいいのか分からなくなって、そこから立ち去ろうとし始める人もいます。そうやって、居場所を転々とする方もいます。

しかし、それをやっても、何も解決しないし、どんどん窮屈にな



ってしまったたり、居場所がなくなってしまったりするだけです。さらには、自分の居場所を確保するためにAさん用の自分、Bさん用の自分、Cさん用の自分、Yさん用、Xさん用の自分…と、限りなく他人用の自分を作りはじめたりもします。つまり沢山の仮面が必要になってくるのです。そして、どれが本当の自分なのか分からなくなってしまう方もいます。

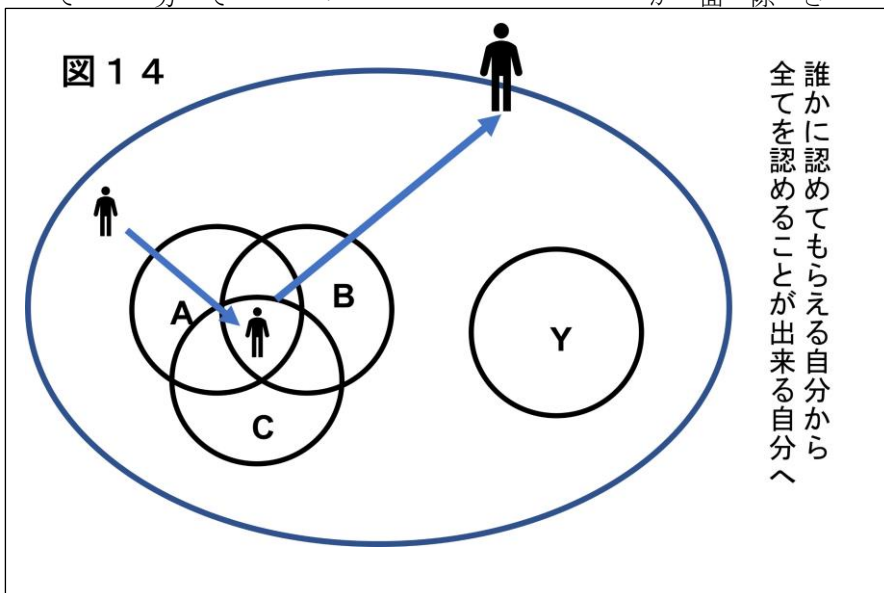
全てを認め受け入れることが出来る自分

では、どうしたらいいのでしょうか。

あなたが、AさんやBさん達の価値観の中に入るのはなくて、あなたがその枠から出たらどうでしょう。

それは、皆の価値観を否定したり、無視したりするということではありません。あなたが、全てを認め受け入れることが出来る自分になったらどうでしょう。(図14)

あなたは「周りから認めてもらえる自分」を目指してきませんで



したか？

だから、苦しいのです。「認めてもらえる自分」を目指せば、当然認めてもらえたり、もらえなかつたりします。人の価値観は様々ですからね。

時代や国や文化によっても違いますし、その時の気分によっても違います。

同じ田中さんが、昨日は「あなたは素晴らしいよね」と言ってくれたのに、今日は「何よ、あの人なんか！」と否定してきたりします。そうするとあなたは右往左往しはじめます。それはただ単に田中さんが昨日の夜、夫婦喧嘩していただけかもしれないのです。それで、ただ虫の居所が悪くて、イライラしていただけかもしれないのです。田中さんの夫婦喧嘩に、あなたは責任ありますか？ ありませんよね。

しかし、認めてもらえる自分を目指している人は、それだけでオロオロしてしまいます。人の評価なんてそんなものです。その時の気分によって大きく変わるのです。そんな不確かなものに右往左往していませんか？ 周りの評価や他人の物差しで自分の価値を計っていませんか？

「周りから認めてもらえる自分」を目指せば、いずれ破綻します。不可能です。

5 1
そこを目指すのではなくて、あなたが「全てを認め、受け入れることが出来る自分」を目指したらどうでしょう。つまり図でいうと、あなたがすべてを包み込む外側の大きな枠になるということです。

今までの方向性とは一八〇度違います。生き方が大きく変わり始めます。そして、それは今からでも、どんな人でも可能なのです。

ところで、今「全てを認め、受け入れる…」と言いましたが、あなたの思う「全て」の中に自分自身は入っていますか？ どうでしょう？

中には「全てを認める」というと、自分以外の全てと思っている方がいます。自分が入っていない人が沢山います。事例二の川口さんもそうでした。どんな状況であろうが、自分は我慢をして周りの人を受け入れようとしていました。彼女も全てを受け入れようとしていたのですが、そこに自分自身のことは含まれていませんでした。

しかし、それは全てとは言いませんよね。「全て」なので、もちろん自分も含まれますし、さらに言えば、全ての中には『私』がいるのです。

そうすると、また勘違いをする方がいます。「じゃ、全てを認められるような、立派な自分にならずにちゃ！」とプレッシャーをかけはじめます。

それも全てではないですよ。 「私の全て」なので、自分の中には強い自分もいれば弱い自分もいる。立派な自分もいれば情けない自分もいる。正直な自分もいれば、嘘をついたり、ちよつとずるい自分もいる…。そんな自分の全てを認めたときに、本当の自分へと戻り始めるのです。

今まで私たちは長い間「誰からも許されて認められる自分」を目指すことを、いつの間にか刷り込まれてきたようです。間違いなく、全ての人がこれまで一生懸命頑張ってきました。しかし、頑張れば頑張るほど苦しくなります。それは「誰からも許されて認められる自分」を目指したからなのかもしれません。いくら頑張ってもそれは成しえませんものね。認められるかどうかは、相手次第だからです。その判断も相手のその時の都合や気分次第で変わります。そうすると常に右往左往して、認めてもらうため、許してもらうために頑張り続けなければいけません。

ハムスターが輪っかの中を、カラカラと走り続けているようなものです。一生懸命がんばって走り続けているのですが、一歩も前には進んでいません。見える風景は同じです。

その輪っかから降りましょう。降りたら一歩踏み出した分、一歩前に進みます。風景や状況が変わるのです。

不完全こそ完璧

人間は何のために生まれてきているのか？ これは根源的な質問になります。あなたはどう思いますか？

よく耳にするのが、人間は「修行をするために生まれてきている」と多くの方がいわれます。確かにそれも一つです。修行という体験を選んでいる方もいます。あるいは楽しむという体験を選んでいる方もいます。中には、苦勞するという体験を選んでいる方もいます。

つまり、いろんな体験をするために、人間として生まれてきているようです。体験を通じて様々な感情を味わっている。そのために生まれてきていると言ってもいいかもしれません。

実は人間の魂は完璧です。神そのものです。皆さんの魂はお釈迦様や観音様のようなものです。完璧ですから本来修行は必要ありません。しかし、完璧だと色々な体験ができないのです。

例えば、完璧な存在であるお釈迦様と観音様が、天国でお互い向き合っているとします。お二人はどうしているでしょう？ 何をしているのでしょうか？ ちょっと想像してみてください。

お互いほえみあつて、「ごきげんよう」と言つて、お茶を飲んで、穏やかな風が吹いて・・・それで終わり。

こんな感じでしょうね。そう思いませんか？

そんな状態が、百年も千年も一万年も続いたら、あなただっただらどう思いますか？ そんなことを考えるでしょう？ 飽きそうですよね。何か体験をしたい、刺激が欲しいと思いませんか？ そうなんです。そう思つて、私たちの魂は人間界に降りてきたのです。全ての魂が、修行するために降りて来ているわけではありません。さまざまな体験をするために人間になったのです。

その体験の中に、修行というものを選んでいる人もいます。

楽しむということを選んでる人もいます。

苦勞するということを選んでる人もいます。

何もしないということを選んでる人もいます。

それはそれぞれが選んだ体験であって、全て同じ価値があります。どれが素晴らしいというわけではないのです。

では、人間になっても、お釈迦様と観音様のままだったらどうでしょう。人間になった意味がないですよね。

そこに、さまざまな体験をするためのトラブルが必要になります。そして、トラブルを引き起こしてくれるトラブルメーカーが必要になります。

つまり、人間を体験するという事は、トラブルメーカーの体験をしに来ていると言ってもいいのかもしれない。

トラブルメーカーという言葉に語弊があるならば、不完全な人間を体験しに来ていると言ってもいいでしょう。

ですから、人間は不完全で当たり前であり、不完全でなければ人間になった意味がないのです。

お釈迦様や観音様は完璧ですから「失恋したらつらい」「いじめられたら悔しい」「殴られたら痛い」という事は百も承知なのです。だって完璧ですからね。

ではお釈迦様や観音様が、失恋したり、いじめられたり、殴られたりするのでしょうか。

観音様とお釈迦様が喧嘩したりするのでしょうか。しなきそうですよね。

そうなのです。全てを知っているけれども、体験ができないのです。その体験をするために、人間になったのですから、人間は不完全なのです。

人間にとって不完全であることが完璧なのです。不完全である自分を、責める必要など全くないのです。

「じゃ不完全でいいなら、いっぱい嘘をついていいの？」と考える人もいるでしょう。

そうではありません。不完全な自分を認めたときに、嘘は必要なくなるのです。

例えば、「私は四〇点程度の人間だ。しかし一〇〇点だと思ってもらわなければ、世の中ではやっていけない。」とそんな感覚を持っている方も沢山います。

そうすると、六〇点分の嘘や見栄が必要になってきます。さらに四〇点の自分を見透かされたらどうしよう、否定されたらどうしようと、今度は六〇点分、緊張したり不安になったりしてしまいます。この差の六〇点があなたにとっての重石になってしまふんです。しかし、あなたが基準とした一〇〇点も先ほどの「〇」「×」と同じように、あなたが勝手に作り出した基準です。人によって違います。そして、足りない六〇点に苦しんで行くことになります。

では、「私は四〇点です！」と認めてしまったらどうでしょう。とても楽になりそうではありませんか？ 嘘や見栄や緊張は必要なくなってしまう。四〇点の私は、四〇点満点を目指せば良いのです。

だって、四〇点という体験をするために生まれてきたのですからね。四〇点ならば取れるでしょう。

ほとんどの人がその程度のもので。自信がある人と、自信がない人の違いはどこにあるかというと、不完全な自分、つまり四〇点の自分を認めているかどうかだと思います。

おそらく、自信がない人は、足りない六〇点に押しつぶされて、四〇点の自分も発揮できなくなっているのではないだろうか。足りない六〇点にばかり目がいって、「私は六〇点も足りない」と言っているようです。四〇点の自分など、取るに足らないものだと思いついでいるのではないのでしょうか。

反面、自信がある人は、足りない六〇点には気を留めず、ただただ四〇点の自分を認めているだけのことでしよう。四〇点である自分を認めると、重石の六〇点がなくなりやすから、その四〇点がフルに活用できそうですね。

六〇点に押しつぶされることなく、スムーズに成長ができるようです。

もう一度言います、全てを認めるといふのは、不完全な私を認めるといふことです。私たちは、不完全さを体験してきたわけですから、不完全で当たり前なのです。その不完全さを、そのまま認めることです。

不完全な自分を否定することなど全くありません。その不完全さこそが、人として完璧なのです。

認め受け入れるとは

さらに、「認め受け入れる」ということを勘違いしている方も沢山いらっしゃいます。

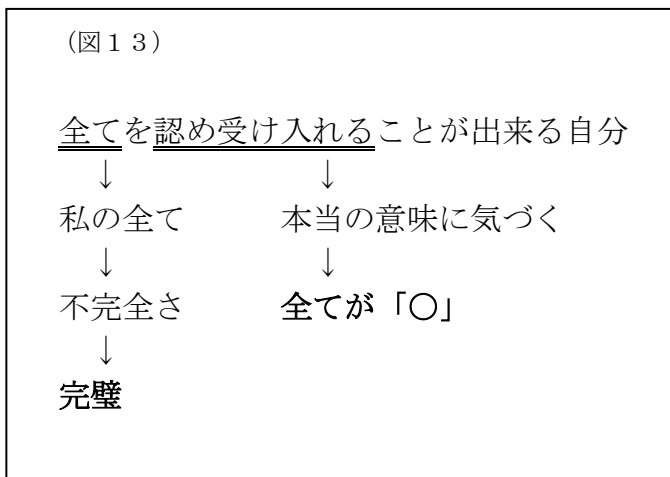
「認め受け入れる」というと、「×」すらも受け入れなくてはいけない。嫌なことも受け入れられるような、器の大きい立派な自分にならなくてはいけない、と思っていませんか？

結論からいうと、それは無理です。

「×」すらも、嫌なことすらも受け入れるというのは、受け入れているのではなくて、我慢しているだけのことです。我慢強くなるそうですが、器が大きくなってるわけではありません。

本心では「×」は受け入れたくありませんものね。我慢していれば、だんだん腹が立ってきます。ストレスでいっぱいになり、いずれ爆発します。そういう体験は何度もあるでしょう。そのたびに、喧嘩になったり落ち込んだり、自分を責めたりしてきたはずですよ。

「認め受け入れる」というのは、「×」すらも受け入れるということではありません。(図13)



「全てが○だ」ということに、気づける自分になることなのです。「全てが○」ということが真実なのです。

「○」だったら受け入れるでしょう。受け入れるというよりは、受け入れる、受け入れないという次元を超えそうですよね。「○」は受け入れようが、その辺に転がつていようが関係ないですよ。

そうすると、「○」に囲まれて生きていくこととなります。人生が変わり始めます。

本当の自分、人間は『神』そのもの

「誰からも認めてもらえる自分」を目指せば、いずれ破綻します。それをやめて「全てを認め、受け入れることが出来る自分」を目指しましょう。「本当の意味に気づける自分」になりましょう。

『本当の意味』とは、全てが『○』だということです。

そして、物事に粹をかけないこと、線引きをしないことです。そうすれば、何一つ悪いことは起きていないということがわかってきます。

確かに辛いこと苦しいことは起きてきます。しかし、悪いことは何一つ起きていません。ほとんどの方が、苦しいこと辛いこと、今の自分に都合の悪いことが起きると、悪いことが起きていると勘違いをしてしまいます。そうではないのです。

辛いこと苦しいことがあっても、何一つ悪いことは起きていません。それが真実です。その真実に気づくことなのです。

そういう考え方をしてみたらいい、というレベルのものではありません。それが真実だから、その真実に気づきましよう、ということなのです。それに気づいた時に、全ての問題から解放されます。

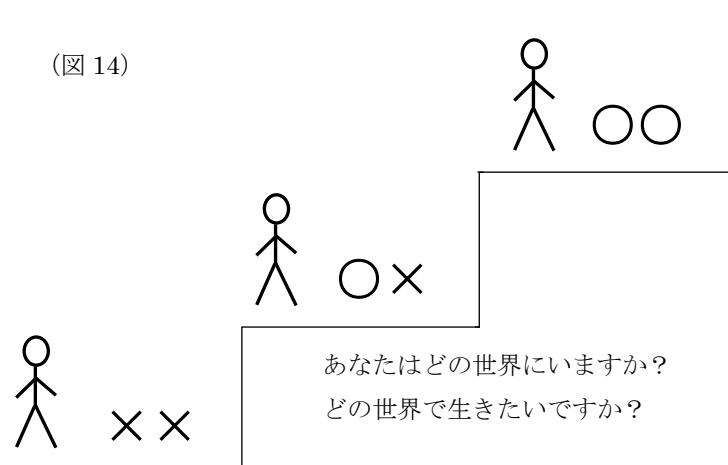
しかしそれでも、「×」に見えるときがあります。その時は、「○」のほ
 なのに、まだ自分には「×」に見えてしまう。何に気づいていないんだろ
 う。本当の意味は何なのだろうか？」と考えてみる事です。そうすること
 で本当の意味に近づくことができます。

あなたは、「××」の世界、「○×」の世界、「○○」の世界があるとす
 ならば、どの世界で生きたいですか？ (図14)

全ての方が、「○○」の世界が良いと思われるでしょう。
 ならば、あなたがその世界に行くことです。その行く方法というのは、
 全てが「○」だという前提に立つことなのです。全てが「○」という視点
 で物事を見ることが、ただそれだけで、あなたは「○○」の世界で生きて
 いくことができます。あなたのいる世界が変わります。周りで起きてくる
 出来事が変わります。

あなたが立っている次元が変わるのです。あなたが選ぶことができるの
 です。

あなたがどういう前提で自分や世の中や物事を見ているか。
 それが現実化するので。



第二章

今までの体験や出来事の意味

話は変わりますが、あなたは自分の事をどう定義していますか？

「私は、こんな両親のもとに生まれて、こんな学校に行って、こんな仕事をしていて、会社ではこんな立場で、昨日こんな失敗をした自分です。」というふうに思っていますか？

しかしよく考えると、それって自分が今まで置かれていた環境や状況、過去の出来事の事を言っていますよね。

「会社ではこんな立場で、こんな家族がいて。」というのには確かに現在進行形ですが、自分が置かれている立場や、役割のことをさしています。自分そのものの事を言っているわけではないではありません。

しかし、ほとんどの方が自分の中に積み重ねた記憶を、自分自身だと思いつ込んでいます。「自分ってどんな人？」と考えた時に、自分の記憶をほじくり返していませんか？

記憶を自分だと思っている限り、自分が変わることはなかなかできません。だって、過去の出来事は変わらないし、それを覚えている記憶も変わらないのですから。

そのように、過去の記憶や出来事や周りの状況に、囚われている自分があります。

では、あなたの中にある記憶や、過去の出来事や、今の状況とは、いったい何なのでしょう？

ここでちょっと時間をとって、過去の出来事や自分が置かれていた状況、その時の感情を時系列で思い出ししてください

い。できればノートに書きだしてもらおうと、さらにはつきりしてくるでしょう。

幼児期、学童期、青年期……。どんなことがありましたか？

物心ついた時から、小学校、中学校、高校といろんな出来事がありました。辛いことや苦しいこと、寂しいこと、もちろん楽しいこともありました。もしかしたら、いじめたり、いじめられたりもしたかもしれません。

そして大人になって、失恋もしたことでしょう、傷つけたり傷つけられたりしたことでしょう。楽しいことも嬉しいことも沢山あった。悩んだり泣いたり笑ったり、たくさん体験をしてきたことでしょう。どんな人に、どんなことをされたり、言われたりしましたか？ その時どんな気持ちになりましたか？

いろんなことが思い浮かぶでしょう。

そういう自分の歴史が、目の前に一冊の「自分史」として置いてあると想像してください。過去の出来事が、ありありと目の前に浮かんでくる方もいらっしゃるかもしれませんが。

そうすると、ほとんどの方がこの「自分史」を自分だと勘違いしています。「私はこういう私です」と思い込んでいる場合が多いのです。先程の事例の田中さんも川口さんもそうでした。今までの辛い苦しい体験と、憎しみや悲しみや寂しさを抱えていた体験を、自分だと思い込んでいました。

確かにそれは事実です。しかし、それは今までの体験でありその時の感情ですが、あなたそのものではありません。ではその自分史って何なのでしょう？

人生の教科書

実はその自分史は、あなたが生まれる前に、自分自身で決めて書いてきた、この人生の「台本」なのです。「教科書」と言ってもいいかもしれません。「私は、今回の人生はこういう体験を通して学びます。」と、あなたの魂が決めてきた台本・教科書なのです。事例の田中さんも川口さんも、今までの体験は、生まれてくる前に自分が周りの人をお願いしてきた台本であり、教科書だったことに気づいたのです。

その台本に沿って物事が起きていきましたから、たった今人生を振り返って自分史を書いても、台本と同じものが書きあがります。(図17)

つまり、今までの体験、出来事、状況、さらには感情すらも、あなたにとつての教科書であつて、あなたそのものではないということなのです。教科書を通じて学んでいたあなたの魂がいて、教科書や台本と自分とは別物なのです。

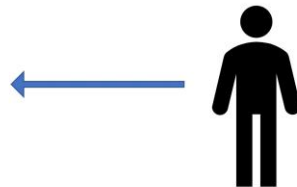
しかし、すべての人(魂)がとても真面目ですから、自分が設定した教科書を見て、一生懸命学んでいます。体験していま

図17

合格点は30点



教科書とあなたは別物。
教科書を通じて
学んでいる自分がある。
これが本当の自分であり
これは完璧。



す。一生懸命見ているうちに、いつの間にか、自分の顔がわからなくなってしまう。そして教科書の方を自分だと
思い込んでしまっているのです。

そこには嬉しく楽しいストーリーもあれば、辛い悲しい苦しいなどのストーリーもたくさん書いてあります。楽しい
ストーリーは、たくさんあった方がいいですからオッケーですが、辛い苦しいストーリーは嫌ですから、あなたは教科
書の方を、一生懸命書き換えようとし始めます。つまり設定された出来事や状況、ストーリーを書き換えようとするの
です。信号の事例で言ったように、赤信号を青に変えようとしはじめます。

しかし、それはある程度は可能かもしれませんが、ほとんどの場合無理です。かなりの軋轢を生じさせます。自分の
都合のいいように状況を変えようとはしますから、当然周りとの衝突を生んだりします。

基本的に教科書や台本は書き換えることはできません。

では、どうしたらいいのでしょうか？

教科書ですから、最後までしっかりと学び終える必要があります。例えば高校三年生の二学期なのに「もうこんな教科
書はいやだ！」と破り捨てたとしたらどうでしょう？ また一学期からやり直しですよ。新しい教科書を渡されて、
また一ページ目からやり直さなくてはいけなくなります。しかし、もうそんなのはいやでしょ？ うんざりですよ。

だから、教科書は三年生の三学期の最後の一日まで、しっかりと学び終える必要があります。そして、卒業試験を受け
て合格点ももらって、卒業証書と引き換えに手放すことができるのです。それを手放せば、そこに書いてあるストーリ
ーは起きてきません。苦しい出来事や辛い出来事、悔しい出来事は見事になくなります。起きてこなくなるのです。事
例のように、そういう体験をしている人は沢山います。

しかし、学び終えて、もう手放してもいいのに、手放そうとしない人が非常に多いのです。

それは、「教科書を手放すには一〇〇点満点を取らなくてはいけない。」と、どこかで思い込んでいる方が多いのです。あなたはどうか？ あなたは、自分も含めて色んなものに完璧を求めていますか？ 真面目な人ほど、そう思いがちですよ。

では、あなたの言う完璧ってなんでしよう？ 「これが完璧です！」と明確にできますか？ ほとんどの方が曖昧ではないですか？ そのわからないもの、曖昧なものを求めて、はたして辿り着くのでしょうか？ 無理ですよ。

そうすると、「一〇〇点を取れていない自分はまだまだです。」「まだまだな私には学びが必要です。」「学びが必要な私には教科書が必要です。」になって、教科書を手放そうとしないのです。

そして教科書に書いてあるストーリーに基づいて、苦しみや悲しみを通じて、学び続けなくてはなりません。どうですか？ そんなことをやっていませんか？

しかし、あなたは現実に高校を卒業する時に、全てのテストで一〇〇点を取りましたか？

そうではないでしょう？ それってほぼ不可能ですよ。では、一〇〇点を取れていないのに、なぜ卒業できたのでしょうか。

それは、最低ラインを越えたからではないですか？ その卒業の最低ラインって何点ですか？ 高校によって違うと思いますが、ほとんどの高校が三〇点ではなかったですか？ 赤点でなければ卒業していいのです。「合格点は三〇点」なのです。三〇点取れば卒業していいのです。

「私は一〇〇点取るまで頑張ります！」とあなたが言ったところで、「いいから卒業していいよ。新入生が来るから、もう卒業して。」と言われるのが落ちです。

どうですか？ 今までの自分に点数をつけるとしたら何点ですか？ 三〇点は取れているのではないですか？
もし、三〇点以下という人がいれば、それはあなたの基準・枠・合格ラインが厳しすぎるだけではないですか？
三〇点取れば卒業していいのです。卒業してくれないと、学校側も迷惑です。そして教科書を手放していいのです。
手放せば、教科書に書いてあるストーリーは一切起きてこなくなります。解放されるのです。

子供が親や環境を選ぼう

子供が親を選んで生まれてくるという話を聞いたことがあるでしょう。それは間違いない事実です。事例の虐待を受けていた田中さんもそうでした。あの優しく厳しいお母さんを、自分が選んでいたのです。

他の方のセッションでも、いくつかの前世を明らかにした後、三人に一人ぐらいの割合で「あなたが、今のお母さんのおなかの中に入る前、今回の人生の計画をしている場面へと戻ろう。」と誘導します。

そして「あなたはなぜ、そのお母さんの子供になろうと思ったのですか？」と質問をすると、「お母さんに厳しさや強さを教わりたかった。」「優しさを身につけたかった。」「お母さんを助けたかった。」など、いろんな理由を言われます。さらに「では、あなたがそのお母さんを選んだのですね？」と聞くと、皆さん間違いなく「そうです。私が選びました。」と、涙ながらに口をそろえて言われます。

そうなんです。どんな厳しい両親であろうが、どんなにだらしない両親であろうが、間違いなく皆さんは今のご両親を自分で生まれてきているのです。さらに事例のように、ご両親にいろんなお願いをして生まれてきている場合が多いようです。

そうであるならば、あなたも「大金持ちで、財産がいっぱいあって、優しいご両親で、一生働かなくていい家庭」を選ぶことも可能だったのです。実際にそういう家庭はありますからね。しかしほとんどの方がそうではないところを選んで生まれてきます。

貧しい家庭を選べば、惨めな思いをするということは、分かっていたのです。

仲の悪い両親を選べば、悲しい思いをする。暴力的な親を選べば怖い思い、悔しい思いをする。忙しい親を選べば、寂しい思いをする。頭ごなしに何でも押し付けてくる親を選べば、悔しい思いをする。それもこれも、全て分かっていたのです。

分かった上で選んで生まれてくるのです。どれだけの勇氣ある魂なのでしょう！

実は選ぶのは両親だけではありません。親を選べば、兄弟や親戚、さまざまな環境も大体決まりますよね。それだけでなく、自分の肉体も、顔も、脳みそも、色んな才能も、全て自分で設定をして生まれてくるのです。

そうであるならば、スタイル抜群で、顔もきれいで、成績優秀で、運動神経抜群で、歌も上手で、絵も上手で・・・そういう自分を選ぶことも可能だったのです。悔しいけど実際にそういう人いますものね。しかし、ほとんどの方がそうではない肉体を選んで生まれてくるのです。

ずんぐりした体を選べば、皆からバカにされる。実は分かっているのです。

運動神経が悪ければ、みじめな思いをする。これも分かっている。

回転の悪い脳みそを選べば、皆から苛められるかもしれない。これも分かっている。障害や病気のある肉体を選べば、不自由でつらい人生になる。これも分かっている。

分かった上で選んで生まれてくるのです。どれだけの勇氣でしょう。どれだけ強い魂なのでしょう。どれだけの素晴らしい魂なのでしょう。

それがあなたの真の姿なのです。そんな自分をけなしたり否定したりする必要は、全くありません。そういう体験を選んだすばらしい魂なのです。

そんな素晴らしい魂の存在である自分を、そして全ての人がそうであることを、そろそろ思い出しましょう。そして、その視点で今までの物事を見てみましょう。そうすると、今までとは違うものが見えてくるはずですよ。

しかしほとんどの人が、教科書や台本の中にとどまったまま、「この苦しい出来事をどうしたらいいですか？」と相談にいらつしやいます。

残念ながらその状態では無理なのです。だって、その教科書や台本は、辛さや苦しさを体験する場所なのですから。教科書の中にとどまったままでは、その体験、ストーリーが続くだけの話です。

ですから、その教科書を手放して、その世界から出てくる必要があります。教科書を高い次元から眺めてみるのです。そうすると本当の意味が見えてきます。あなたが、辛く苦しい教科書を通じて何を学ぼうとしたのか。どういう自分になろうとしたのか。

今までの教科書や台本は「**私がなりたい私になるために、私が望んだ素晴らしい出来事**」だったということに気づくことができます。それが、あなたの魂レベルの思考なのです。その思考に基づいて、今生きている世界の出来事が起きていたのです。

確かに辛く苦しい出来事はあったけど、悪いことが起きていたわけではなかった、ということに気づき始めます。感謝に変わり始めます。そうすることで教科書を手放すことができます。

「教科書を通じて学んでいる自分。それを選択した勇氣ある自分。」それが本当のあなたなのです。

あなたは実はもともと完璧なのです。完璧なあなた、「◎」のあなたが「×」という体験をしに来ただけなのです。あなた自身が「×」なのではありません。「×」という体験を選択するということは、とても勇氣がいることです。その勇氣ある存在、それがあなたなのです。

ですから、「×」から「○」になる必要などないのです。本来の自分に気づくだけでいいのです。実は全てが『○』だったんだということに気づくだけでいいのです。

そうすることで、教科書を手放すことができます。そうすると、教科書に書いてあるストーリーは起きなくなつてきます。そういう体験をしている人は沢山います。人生が一八〇度変わり始めるのです。

それではまた一つの事例を紹介させていただきます。

事例三

四十歳の女性のクライアントさんの事例です。仮に彼女を佐藤さんとします。

佐藤さんは今まで三回の結婚をして、今は三人目のご主人と暮らしてらっしゃるのですが、今までのご主人が全てギャンブル、借金、暴力と三拍子そろっていたのです。さらに結婚する前に付き合っていた二人の彼氏も同じような人です、つまり五人続けて暴力や借金に苦しめられてきました。

しかも、今の旦那さんが一番ひどく、ほぼ毎日パンチ。さらには半年前にはあごの骨を折られて、二か月入院をしなければいけないくらいの暴力を受けていたのです。もうそこまでいっていますから、二回も警察沙汰にもなっています

ので、スムーズに離婚届は出せているのです。しかし、ご主人がヒモ状態になっていきますから、家から出て行くつもりです。

彼女は彼女で、自分で商売をしていますから、自分が出ていくわけにもいきません。「いい加減に出て行ってよ！」と言おうものなら、殴る蹴るが始まる。もうどうにもならなくなつて、当方に相談に來られました。

彼女は、「どうしてこんな男ばかりに引つかかるんでしょうか。新しい彼を見つけたら、この人なら真面目そうだし、優しそうだから大丈夫、と思つてもそれは最初の三カ月だけ。しばらくすると仕事をしなくなる。借金が發覚。ギャンブルにはまりだす。それを責めると暴力。もう本当に嫌なんです。私に何か原因があるんでしょうか。」と、疲れ切つた表情です。

セツシオンを続けていくうちに、なぜ彼女がそのような男性ばかりと縁が出来るのか、その原因が明らかになり始めました。

彼女は前世で七回続けて、武士や兵士ばかりをやっていました。しかも、とてつもなく強かつたようで、戦のたびに功績を上げ、どんどん出世をしていました。功績をあげたということは、たくさん人を殺していたということですよね。

しかし彼女は「俺はとても強いんだ！ みんな俺のことを尊敬してるんだ！俺はすごいんだ！」と反省もなく、とても傲慢な男になっていったのです。しかもそれを七回もの人生で繰り返していました。

七回目の人生も同じようにやっていたのですが、その人生では最期に、一番信頼していた部下から殺されてしまいました。その時にハツと思つたんですね。「俺は尊敬されると勘違いしてたんじゃないか。こんな傲慢で残忍な自分なんか、実はみんな軽蔑してたんじゃないか。嫌つてたんじゃないか。」とやつと気づいたんです。

そして、「こんな自分ではだめだ。次の人生では人の痛みが分かる、優しい自分にならなくちゃ。そして、今まで沢山の人がご迷惑をかけてきたから、今度は苦しんでいる人を助けられる自分にならなくちゃいけない。」と、思っただけで生まれてきていたのです。

では、人の痛みが分かる自分になるためには、どんな体験が必要になるでしょう。

先程の事例一の田中さんと同じです。自分が痛い思いをする必要がありますよね。ですから彼女はご主人たちに「私に痛みを教えてください」とお願いをして生まれてきていたのです。自分がお願いをしていたんだ、ということをお願い出したのです。

その瞬間、彼女は泣きながら「ありがとう」に変わっていました。

私 「あなたがみんなにお願いをして生まれてきてたんだね。」

佐藤 「そうです（涙）。私がお願いをしました。」

私 「そのことについてどう思う？」

佐藤 「今まで私は被害者だとばかり思っていました。実はそうではありませんでした。私が、どうしようもない自分だったから、みんなにお願いをして生まれてきたんです。」

私 「では、お願いされたご主人たちは、どんな気持ちだっただろう？」

佐藤 （号泣）

私 「あなたの願いを聞けば、自分の人生が台無しになる可能性だってあったんだよね。実際に今のご主人はあなたへ

の暴力で、警察に二回も捕まっているもんね。」

佐藤 「はい、そうです。」

私 「そのリスクを背負ってでも、あなたの望みを聞いてくれたご主人たちに何て言いたい？」

佐藤 「本当にごめんなさい。ありがとう。」(号泣)

私 「そうだね。」

佐藤 「はい。」

私 「そして、あなたは痛みを通じて、優しさを身につけようと思って生まれてきてたんだね？」

佐藤 「そうです。」

私 「では、まだあなたには『痛みを通じて』という前提条件は必要なの？」

佐藤 「いえ、もういりません。」 (彼女にとって、痛みを通じて学ぶ、という前提条件が教科書だったので)

私 「もういらないよね？」

佐藤 「はい。もういりません。痛みは充分体験したし、それによって優しさも少しは身につきました。そして、苦しんでいる人を助けたいというのも、出来つつあります。ですから、もう痛みを通じてという前提条件は必要ありません。」 (彼女は虐待児を助けたいと、既に活動をやり始めていたのです)

私 「では、手放さない。」
佐藤 「はい、手放します。」（涙）

彼女は自らに「痛みを通じて、優しさを身につける。」という課題を課して、生まれてきていました。そして、自分に痛みを与えてくれるように、ご主人たちにお願いをして生まれてきていたのです。そのことに気づいた瞬間、全ての意味が解かりました。全ては自分が望んだことだったことを、思い出したのです。そして、教科書を手放すことが出来たのです。

その日の夜から、ご主人の暴力はピタリとやみました。ご主人に何かを言ったわけでもなく、ご主人のセッションをしたわけでもありません。

事例一でも申しましたが、決して暴力を肯定するわけではありません。その根本原因と向き合うことで、問題を解決することができるとです。

彼女の置かれていた状況の根本の原因は「痛みを通じて学ばなくてはいけない」という、彼女の魂レベルでの強い思い込みでした。ですから、新しい彼が出来るたびに、暴力を振るわれることになったのです。

29ページで説明しました「ネガティブ感情の製造工場」を持ったままなのです。

もし、今のご主人から逃げる事が出来たとしても、今までもそうだったように、新しい彼からの暴力が始まった可能性は高かっただろうと、想像できます。根本解決には至りません。

ですから、問題の大元の原因を探り出し、解消する必要があります。

そうすることで、彼女もご主人も、魂レベルの契約から解放されたのです。

第三章

なぜ問題が発生してくるのか

では、出来事や人生のストーリーは、何に基づいて起きているのか。

そこにはとてもシンプルで、簡単明瞭な人生の法則が存在しています。それに基づいて物事を考えていくと、実に見事に答えが見つかってきます。

全ての出来事は、「私がなりたいたい私になるために、私が望んだ素晴らしい出来事」なのです。つまり、物事は「どういう自分でありたいか」に基づいて起きてくるのです。

ここからは、当方でのセッションの前半の実際のやり取りを、会話形式で再現したいと思います。ごく一部ではありますが参考になれば幸いです。

75
小野さん（仮名 二児の母 三五才）は自分に自信がなく、いつも不安とイライラを抱えてご相談にいらっしやいました。彼女は、小さいときから両親の仲が悪く、そんな両親の元で、自分の気持ちを言えず、甘えることも出来ませんでした。そんな両親に対して、ずっとどこかに怒りを抱えていたのです。そして、大人になって、大切な人にも自分の気

持ちを素直に表現することが出来ず、漠然とした寂しさやイライラ、不安感を抱えていたのです。可愛いわが子に対しても、ついついイライラして感情的になったりしてしまうのです。そしていつも人の目が気になっていたのです。

では、その彼女とのやり取りの一部を元に再現いたします。

読者の皆様にわかりやすいように、脚色をしておりますので、その点をお含みおき下さい。

私 「ところで、小野さんはどういう自分になりたいですか？どういう自分でありたいと思っておりますか？」

小野 「ん〜。人のことを気にならなくなりたいです。」

私 「人のことを気にしない自分になりたい。そして？」

小野 「ん・・・これ！ と思ったことに一生懸命になりたい。」

私 「そう。人のことを気にせず、自分の信念を貫くということかな？」

小野 「はい。」

私 「他に何かありますか？」

小野 「えっと、自分に自信がないんです。」

私 「自信が持てないんだ。だから信念が持てないのかな？」

小野 「そうなのかもしれません。」

私 「そう。自信を持ちたいんだね。そして・・・？」

小野 「人に愛情をあげる側になりたいし、子供を純粹に愛したいです。」

私 「素晴らしいね。愛情をいっぱい与えられる人になりたいの？ 子供も素直に可愛がつてあげたい？」

小野 「はい」

私 「ではその愛情を実際に与えることができるためには、さらに何が必要だと思いますか？」

小野 「ん……。変な言い方かもしれないけど、余裕？」

私 「そう、余裕ね。それ必要ですよ。他には？」

小野 「思いやりと優しさが足りないような感じがします。」

私 「そう、思いやりと優しさも必要ですよ。さらに、実際にそれを実行しようとすると、勇気も必要だね。どう思いますか？」

小野 「はい。必要です。」

私 「そうだよ。じゃあね、思いやりがあつて、優しくして、自信があつて、余裕があつて、勇気があつて、人を気にせず信念を貫く、そういう自分でありたい、と思っているんだよね。他に何かありますか？」

小野 「それと、どうしても許せない人がいるんです。毎日のようにその人のことが頭をよぎるんです。」

私 「それはきついよね。いじめにでもあいましたか？」

小野 「そんな感じですよ。今でも頭をよぎって、イライラしたり不安になったりするんです。」

私 「辛かったり悔しかったりしたんでしょうね。だから今でも忘れられないんだ。では、その出来事を許すことができたならどうだろう。」

小野 「でも、それって難しいです……。やっぱり許せない人はいます。」

私 「そう。難しいよね。でも、もしできたらどうかかな？」

小野 「ん……。とても楽になれそうです。」

私 「そうだよね。自分が楽になれそうだよね。許せない人のために、自分が苦しい思いをするなんてバカらしいよね。」

小野 「確かにそうですね。」

私 「では、思いやりがあって、優しくして、自信があって、余裕があって、全てを許して受け入れることが出来て、勇気があって、人を気にせず信念を貫く。そういう自分になれたなら、どういう人生になりそう？」

小野 「パツと思ったのが、しっかりと明るい人生。」

私 「そう。しっかりと明るい人生になったならば、さらにどうなりそうかな？」

小野 「充実して楽しそう。」

私 「そうだよね。充実して楽しくて、明るくイキイキとした人生が送れそうだよね？」

小野 「はい。」

私 「じゃあね、こういう人生って、一言で言うるとどんな人生？」

小野 「……。幸せ？」

私 「そう。幸せになるよね。あなたは一番この『幸せ』が欲しいでしょ？」

小野 「はい！」

私 「そうだよね。しかも最高の幸せを望んでいるよね。」

小野 「はい！ でも幸せと想っているところもあります。」

私 「そう。ご主人もいて、可愛いお子さんもいて、幸せなところも沢山あるけど、あなたが欲しいがっているのは『最高の幸せ』だよね。しかし、今はそうではないから、そこに悩みが発生してきているんじゃないかな？」

小野 「そうです。」

私 「しかし、自分に思いやりがあつて、優しく、自信があつて、余裕があつて、勇気があつて、人を気にせず信念を貫く、そして全てを許して受け入れることが出来たら、充実したしっかりとした人生になって、明るくイキイキとした自分になれるそう。そして最高の幸せが手に入りそう。というのが分かっているんだよね。『幸せ』になる方法

を分かっているんだ。」

小野「あ、そうですね。」

私 「実はこれがあなたの今回の人生の目的なんだよ。こういう自分になること。それがあなたの今回の人生の目的。

(図18)

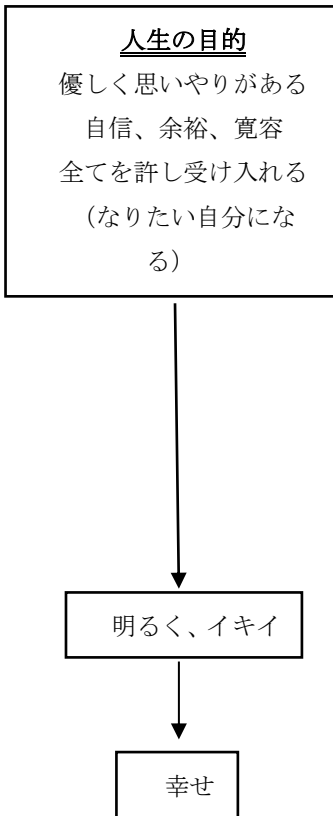
ほとんどの人が人生の目的を知りたいとセッションを受ける動機に書いていらつしやるんだけど、実はみんな人生の目的は分かっているんだ。『あなたは、どういう自分になりたいですか?』と聞くとほとんどの人がちゃんと答える。実はそれが人生の目的なんだ。しかし、ほとんどの人がそれを人生の目的だと思っていない。

『人生の目的』と言われると、『どんな仕事につくかとか、何を成し遂げるかとか、どこまで出世するかとか、どれだけ稼ぐか、名誉が得られるか』そんなことを目的だと勘違いしている。実はこれは手段とオマケなんだよ。

『夢を実現する』というと、裕福になるとか出世するとか有名になるとか、そういう話になっている。確かにそれも素晴らしいし、うらやましい部分もあるけども、本来の目的はちよつと違うところにあると思う。

仕事や勉強、人間関係などは手段。そして、名誉や地位やお金はオマケ。しかしほとんどの人が手段やオマケを目的だと勘違いしている。

(図18)



そうではなくて、仕事や、そこに生じる人間関係など様々なものを通じて、いま小野さんが言ったような自分になるうとしている。実はそれが『目的』なんだと思う。しかし、ほとんどの人が、目的と手段、オマケがひっくり返っている。だから、わけが分からなくなっている。でも、それは仕方ないと言えば仕方ない部分もある。みんなそういう教育を受けてきてるからね。例えば小野さんも、小さいときに『将来の夢は？』と何度も聞かれたよね？　なんと答えてましたか？」

小野「看護師さんとか、先生とか・・・」

私「ね？　職業を答えていたでしょ？」

小野「うん。そう。確かに。」

私「そうでしょ。聞くほうも『夢は？』と言いながら、職業を聞いている。」

小野「うん、うん。」

私「だから、いつの間にか職業が目的に摩り替わってしまった。」

小野「ホントだ。」

私「どういう人になりたい？　どんな大人になりたい？　とかそんなことは聞かれてきていない。『看護師になりたい』というと、『じゃ、あの高校に行って、こんな勉強をして・・・いやそれより、大学のほうがいい。』とかいつの間にか方法論ばかりになっていく。そして、その手段・方法が目的に摩り替わってしまう。あるいは「看護師は夜勤があつてきついから、やめた方がいいよ。」なんて話になってしまう。

小野さんが子供の頃、看護師になりたいと言ったのは、その奥に『人を助きたい』という思いがあったんじゃないのかな？」

小野「あ、そうです。」

私 「しかし、大人から職業を聞かれたから、職業を答えた。ましてや、子供のあなたが知っている職種なんてごくわずかだからね。そのいくつかの中から選ばなくちゃいけなかった。しかし、大人はその職業のことにしか受け止めてないから、そこでずれてしまう。」

小野「たしかにそうです。私も子供にそんなことやってるかもしれない。」

私 「人を助きたい、お役に立ちたいという思いを成就するには、どんな仕事であろうがそれはできる。そして、純粋にさっきあなたが言った、思いやりがあつて、優しく、自信があつて……。そういう自分になれたなら、最高の幸せが手に入るよね。そして、その幸せは何物にも揺るがない最高の幸せが手に入りそうだよね。」

小野「はい！」

私 「では、その中に、周りの人がどうだとか、お母さんが、お父さんが、会社がとか、そんなこと一言でも言っていますか？」

小野「言ってます。」

私 「言っていないでしょ？『私がこうなれば』と言っているでしょ？

『私がこうなれば最高の幸せが手に入ります！』と自分でわかっているんだよ。ならば、それをそのまま目指せば

いい。それをストレートに求めれば、最高の幸せが手に入る。

しかし、今までもその最高の幸せは求めてきた。でも、今までのあなたは『周りの評価』『周りが変わることに』『周りからもらうこと』でその幸せを得ようとしてこなかった？ 周りに認めてもらうとか、褒めてもらうとか。あるいは、自分の都合のいいように周りが変わってくれるとか、地位や名誉も他人の評価だよね。中には自分を『犠牲』にするこゝとで幸せを得ようとしている人もいる。そういうものを通じて幸せを得ようとしてこなかった？」

小野「そうでした。」

私「あなたが幸せを求めていたのは間違いない。しかしその手段として『他人の評価や物』を通じてその幸せを求めようとしている人がたくさんいる。あるいは、自分を『犠牲』にすることで幸せを得ようとしている人もいる。」

小野「はい。私もそういうところがあります。」

私「だからずれてしまった。他人の評価では『最高の幸せ』は手に入らない。だって、他人の評価というものは、国によつても、時代によつても、さらには人によつても違うし、たとえ同じ人であっても、その基準はその時のその人の都合や気分で常に変わるものだから。でも、それで人の目が気になって、右往左往しなくちゃいけなくなってしまう。そんな不確かなものを通じて幸せを得ようとしている人が沢山いる。」

小野「そうかもしれません。」

私「でも時には幸せに感じるときもある。褒めたりされるとね。こういう私も、褒めてもらいたいし、褒めてもらうと嬉しい。けなされたり無視されたりするよりは遙かにいいもんね。しかし、それが目的になってしまつと、さらに認められるように頑張らなくちゃいけない。○」を誰かからもらい続けなくてはいけなくなる。

今までも幸せになりたくて確かに頑張ってきた。でもそれは、周りの評価を得るために、色んな手段を使って頑張ってきたんじゃないかな。中には、社会や常識が求める理想の人になるために、あるいは神様から認め許してもらうために、自分を高めようとしている人もいる。

あるいは自分をけなしたり否定したりすることで、許してもらおうとしたり、周りに気に入ってもらえる自分になることで、評価を得ようとしている人もいる。単純に『なりたい自分になる』ためではなかった。だからまたそこでずれてしまった。『自分を認めてくれた誰かが、幸せを与えてくれるんじゃないか』『自分を否定していたら、許してもらえないのではないか』『誰かから許してもらったら、あるいは神様が良いよと言ってくれたら、幸せになっても良いのかもしれない』と思っている人もいる。あなたはどうかかな？」

小野「あ、そんな感覚どこかにあります。」

私「そういう人は沢山いるみたいだよ。しかし一瞬手に入ったものも、実は幸せではなくて幸せのようなものだった。

それは他人の評価で、自分を判断しよう。あるいは、自分を犠牲にすることで許可をもらおう、幸せを感じよう。

もつと言えば、他人から幸せをもらおうとしていたから、いつまでたっても『自分の幸せ』にはなっていないかったということなんだよ。そして、幸せが手に入らないと、裏切られたとか、人のせいに行ったりとか、どうせ無理だと勘違いしている人も多い。

そうやって、ほとんどの人が、他人の物差しで自分を計ろうとしている。そして、他人は自分の物差しで計ろうとしている。訳わかんないことをしていない？ あなたは常に周りに認められる自分、時には許してもらえる自分を指しできませんでしたか？」

小野「はい。そんな感覚ありません。」

私 「結局それで苦しむことになったよね。そうではなくて、『私が、思いやりがあつて、自信があつて、全てを許して受け入れることが出来て、そういう自分になれたなら、最高の幸せが手に入る』ということが分かっている。では単純に、そのままを求めていけばいいということになってくる。そして、その幸せは何物にも揺るがないでしょ？」

小野 「はい。」

私 「そう、何物にも揺るがない幸せが手に入る。そして、小野さんがいうような人は世の中にとって必要ですか？ 不要ですか？」

小野 「必要です。」

私 「必要だよね。ならば、そういう人には沢山の応援がやってくる。皆が力を貸してくれるようになる。そういう人を潰そうという力は働かない。だから結果として周りの評価もついてくることになる。しかし、それはあくまでもオマケだからね。」

小野 「はい・・・。」

私 「『でもそれが出来ないから困ってるんです』と言いたそうですけど、必ず出来るようになるから、もう少し話しを聞いてね。」

人生の目的が、あなたがさっき言った『なりたい自分』であるとは、今まで思っていなかっただろうけど、どこかで漠然とだけど、それを求めてはいたよね。」

小野 「はい。」

私 「第一章で言ったように、あなたはこの世に生まれる前は、神様のような存在だった。神様のようなというよりも、神そのものだった。神そのものだったあなたが、実は人間を体験しに来ているだけなんだ。

では、なぜ人間を体験しに来たのか。それは、『思いやりがあつて、自信があつて、自由で、全てを許して受け入れることが出来る』という自分を、体験を通じて実感したかった。そして、体験の質を高めるために、それが出来ないという状況が必要だった。

もし仮に、あなたが生まれてから今まで、周りの人の全てが、『小野さんって本当にすごいよね。素晴らしい！』と言ってくれていたならばどうだっただろう？ そして、あなたが言ったことに対して、皆が『もつともだよね！ やっぱ小野さんのいうことは素晴らしいね！』と言ってくれていたなら、どういう自分になっていたと思う？」

小野 「ん・・・生意気になっていたかな。でも、自信は持っているかも。」

私 「そうだよね。ある意味『自信があつて、自由で、全てを許して受け入れることが出来る。』自分になっていたと思うよ。だって、誰も自分のことを否定しないから、自信もあるし許せない人もいない、嫌な人はいないから優しく出来る。なんでも自由に出来るし、人の目も気にならない。そうなれているよね？」

小野 「そうですね。なれていると思います。」

私 「しかし、みんなが『小野さんてすごいよね！』と言われ続けた中での、その優しさや、自信や、許しは本物だろうか？」

小野 「いや・・・何か違うような気がします。」

私 「うん。何か違うよね。周りがそう言うてくれただけ。周りがお膳立てをしてくれただけのこと。自分がそうなるわけではない。その逆に『あんななんかダメよ！』『いったい何やってんの？』と言われる。あるいは誰かに裏切られる、だまされる。そういう状況の中でも、『私はあなたを許します。そして自分を信じ、思いやりを持ってみんなに優しくします。』となったときに、その優しさや、自信や、勇気や、許しは本物だと言えるでしょう。高いレベルの体験だと言えるでしょう。」

小野 「はい。」

私 「その優しさや、自信や、勇気や、許しを手に入れたあなたはどうなれるの？」

小野 「楽しい人生を送れそうです。充実してそうです。」

私 「そのために今までの体験は必要だった。だから、つらいこと、苦しいことはたくさんあったけど、悪いことなどな
に一つ起きていなかった。」

小野 「はい。」

前提条件が現実化する

私 「そして、あなたが望む『なりたい自分』の前に「どんな時も」「どんな人にも」という言葉を入れてない？ 例え
ば『どんな時も、自信のある自分でありたい。』『どんな人にも、優しい自分でありたい。』『どんな人も、許せる自
分でありたい。』 そう思っていないかった？」

小野 「はい。思っていました。」

私 「そうだよね。では、その「どんな時」って、どんな時のことを言っているのかな？ 「どんな人」って、どんな人
のことを言ってるの？」

小野 「どんな時って？ いつも？」

私 「その『いつも』ってどんな時のことを言ってるんだろう？」

『自信が持てる時も、自信满满でいたい！』『好きな人にも、優しい自分でありたい！』と言っていますか？」

小野 「あ、ちよつと違います。」

私 「違うよね。『つらい時も、苦しい時も自信のある優しい自分でありたい。』『どんな困難があっても、成し遂げられ
る強い自分でありたい。』『嫌な人にも、優しい自分でありたい。』『許せないような人も、許せる自分でありたい。』
と書いていませんか？」

小野 「はい、確かにそう思ってます。」

私 「そう、自分が痛い思いをする必要がある

小野 「自分が痛い体験をする必要がありま
す。」

私 「先ほどの事例にもあったように、『人の
痛みの分かる優しい自分になりたい』と
望んだら、どういう体験が必要になるか
な？」

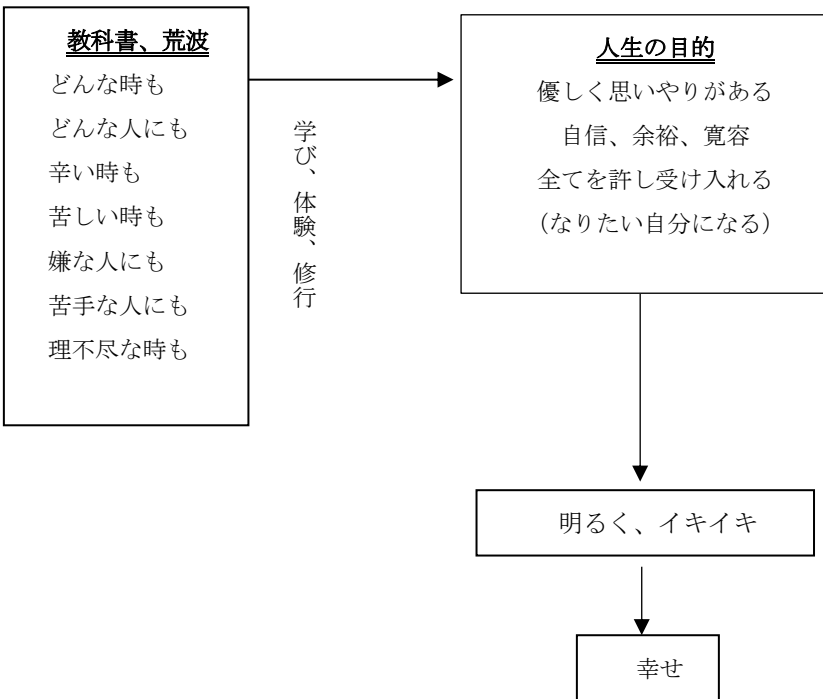
小野 「あ、そうなんですわね！」

私 「そう思ってるでしょ？ だから『辛い時
も苦しい時も』が与えられた。」(図17)

小野 「あ、確かにそう思ってます！」

私 「そうだよ。本当に素晴らしいよね。と
いうことは、あなたが『つらい時も、苦し
い時も、困難な時も、嫌な人も、許せない
人も、理不尽な時も…』と設定したとい
うことだよ。『つらい時も、苦しい時も』
と、あなたが望まなかった？」

(図 17)



よね。自分が体験しなければ、本当の痛みは分からない。どんなに素晴らしい本を何百冊読もうが分からない。だから、神様はあなたの望み通りに痛みを与えてくれる。しかし、痛みを与えられると、ほとんどの方が文句を言い始める。『なんで私がこんな目にあわなくちゃいけないの！ 何も悪いことはしてないのに！』とね。

そう、間違いなく悪いことはしていない。それどころか『人の痛みが分かる優しい自分になりたい』という素晴らしい望みを持った。そんな素晴らしい望みを神様はほつとかない。必ず叶えてくれようとしてくれる。だから、痛みを与えてくれる。では、その痛みを望んだのは誰だろう？」

小野「わたし？」

私「そう、間違いなく自分だよね。」

小野「そういう事なんです。確かにそう思ってきました。」

私「そうだよ。さらにあなたが、『千メートル泳げるようになりたい！』と望んだならば何が必要だろう？」

小野「練習？ 練習できる場所？ プール？」

私「そう。ただ千メートル泳げるようになるためには、プールがあればそれでオッケー。静かなプールで練習すれば、千メートルは泳げるようになる。ではあなたが『どんな荒波の中でも泳げるようになりたい！』と望んだら、何が必要になる？」

小野「海？ 荒波？」

私「そう、荒波が必要になるよね。リゾート地にあるような、おしゃれなプールでは荒波の中を泳げるようにならな

い。荒波の中を泳げるようになるためには、荒波が必要になる。だから神様は、あなたの望みどおりに、荒波をあなたに届けてくれる。

そうすると、ほとんどの方がまた文句を言いはじめる。『私の所ばかり波が来る！ みんなおしゃれなプールでチャブチャブ楽しそうにしてるのに！』とね。では、その荒波を望んだのは誰だろう？

小野「自分自身ということになるんですね。」

私「そう、あなた自身が望んだことだよね？ あなたが望んだとおりに、神様はあなたに荒波を届けてくれた。それも、溺れかけるような荒波をね。だって、さざ波では荒波の中を泳げるようにはならないものね。」

小野「確かにそうですね。」

私『『どんな時も』自信のある自分でありたい。『どんな人にも』優しい自分でありたい。『どんなに嫌な人でも』許せる自分でありたい。『どんなに辛く苦しい時も』前向きな自分でありたい。そんなあなたの素晴らしい望みが叶うように、神様はあなたの望み通りの荒波（どんな時、どんな人）を、あなたに与えてくれていたんだよ。

それは、あなたが充実した人生、最高の幸せを、だれかにもらうのではなく、自分自身の手で掴むことが出来る自分になれるように、あなたが望んだものなんだ。『あなたが望む最高の自分になるために、最高の体験をあなたが望んだ』だから、人生は全てあなたが望んだ通りになっていたんだよ。神様や、周りの人たちは、そのお手伝いをしてくれていただけなんだ。」

小野「そうなんですネ！」

私「どんな時も、どんな人にも、どんなに辛い時も、どんなに苦しい時も、どんなに許せないような人にも。実は、

これがあなたが望んだ最高の体験、最高の自分になるための『教科書』であり『台本』だったんだ。この教科書を通じて、今まで私たちは自分を高めようとしてきた。これが『学び』『体験』なんだよ。」

小野「はい。」

私「もつと解りやすく説明するとね、(図20)のコップをあなただとする。そこに色々な出来事が起きてくる。AやBがやってくる。しかしそれはあなたの容量よりも小さいから、すんなり受け入れることができるよね。A

しかしあなたは自分を成長させたいと思っている。つまり、あなたのコップを大きくしたいと思っているよね。

そのためには(図21)のようにCが必要になってくる。Cがやってきてはじめて自分の大きさがわかるよね。しかし、あなたにとってはきついから、受け入れられないから、『なんで！受け入れられない！イヤだ！』となってくる。

あるいは、『こん

な小さい自分なん

てダメだ・』に

なってしまう。

そうやってCに

対して、文句を言

ったり、不安がっ

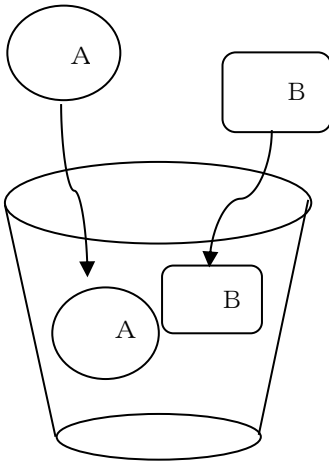
たり、自分を否定

したりしはじめる

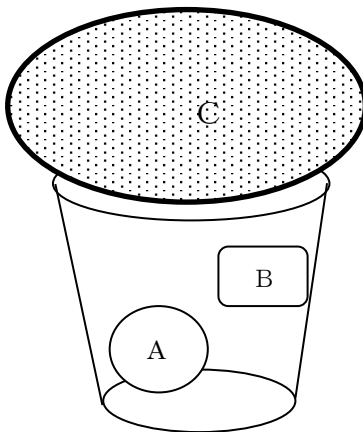
ことになる。

しかし、Cがあ

(図20)



(図21)



つてはじめて自分の大きさに気づくことができるし、成長を始めるスタートを切ることができるんだよ。しかしそれにあなたが気付いていなかった。

その出来事に、嫌な出来事だと「X」を付けてきていたものだから、その「X」からは何も学べない。ただ拒否をしたり、否定するだけで、そこから学ぼうとしなくなる。排除することや、我慢することに力を注ぎ、それを自分が受け入れられるように、本当の意味に気づけるように、器を大きくしようとしなさい。だから逆に小さい器のまま、そのレベルに留まってしまう事になる。卒業できなくなってしまうことになる。しかし、そこに「X」をつけていたのは誰だろうか？」

小野「・・自分です。」

私「そうだよ。自分で付けていたんだよね。ほとんどの人が『嫌な出来事はかき起きている世の中で、私が苦しんでいる。』』』と
『でいる。』』』と
思っているんだけど、それは大間違い。

実は『素晴らしいことしか起きていない世の中で、その素晴らしいさに気付いていない自分が苦しんでいる。』だけなんだ。『全ての出来事は、私になりたい私になるために、私が望んだ素晴らしい出来事。』なのに、ただそれに気付いていなかった自分がいただけなんだよ。

それは、『こういう考え方をしてみたらいい』というのとは違う。『これが真実だから、それに気づいてごらん。』』』
ということなんだ。だから、第一章で言ったように「全てが○」という前提に立つことがとても大切なんだ。

真実に気づく

私 『『こういう考え方をする』『信じる』ということと、『真実に気付く』のとは、まったく次元が違うよね。』
『こういう考え方をする』『信じる』というのは、その裏に『もしかしたら、そうではないかもしれない・・』という思いがある。』
『もしかしたらそうではないかもしれないけれど、こういう考え方をしてみよう。』
あるいは『信じてみよう』
と言っている。そうすると常に不安がつきまとうことになる。そうではなくて『真実に気付く』必要があるんだよ。
例えばね、テレビで「来週の日曜日は晴れの予想です」と言っていると。『あなたはそれを信じますか？』
「どうだろう。つまり、それは信じるか信じないかのレベルだよ。仮に「信じます」と言ったところで、その裏には「違うかもしれない」
「もしかしたら雨になるかもしれない」という思いがある。そうすると、不安感がつきまとうことになる。」

小野 「確かにそうですね。」

私 「では、物は上から下に向かって落ちる。これを信じますか？と言われたらどうだろう。」

小野 「信じます。というか、当たり前です。」

私 「そうだよ。当たり前だよ。だから、気にも留めていない。だから、普通に生活ができる。これが「信じる」
のレベルになってしまおうと「物って、ちゃんと上から下に落ちるんだよ。下に置いてある物が、いきなり浮き上がったり、飛んできたりすることはないよね。大丈夫だよ。信じよう。」
となつて、不安でしよがなくなつてしまふ。夜も眠れないし、普通に生活もできなくなつてしまふ。つまり、気づくというのは、「当たり前」というレベルにいくことなんだ。だから、考え方を変わるとか、信じるとかいうレベルではなくて、気付くことが必要になつ

てくる。その真実に気付くと、人生が一八〇度ひっくり返ってしまう。それは前半で言った「全てが〇」ということだよ。

「有り難い」というのは「滅多にないこと」という意味だとよく言われるけども、そうではなくて、「有り難いことに満ちあふれている」ことに気づけていないだけだと思うよ。しかし、いきなりそのレベルに行くのも難しいものがある。だから最初は、真似から入っても構わないと思う。つまり『全てが「〇」なんだよね』という前提に立つ練習をしてみるだけでも構わない。そうするうちに、だんだんわかってくるみたいだよ。だって「全てが〇」の世界であなたも生きたいでしょ？」

小野「はい！」

私「ならば、とりあえずそれをやってみることだよ。そうすることで真実が見えてくる。

自分に都合がいいことが起きてくると『思い通りになった！』という。しかし、都合が悪いことが起きると『思い通りになっていない！』と思ってしまうよね。そして、それに向かって不満を持ってしまう。」

小野「確かにそうです。私もよくやっています。」

私「そうだよね。こう言ってる私もついやってしまう。一生懸命頑張ってもうまくいかなかったり、誰かに誤解されたりすると、つい文句を言いたくなってしまう。

『なぜ自分だけ荒波の中を泳がなくちゃいけないの！ 皆は綺麗なプールでチャブチャブ楽しそうなのに！』そんな風に思っていた自分がいた。しかし、全ては自分が望んだ最高の自分になるために、自分が望んだものだった。ただ本当の意味に気づいていなかった自分がいただけだった。」

小野「はい、何となくわかってきました。」

私 「よかった。神様や宇宙はあなたの望みを、そのまま一〇〇%叶えてくれるんだよ。学びたい、体験したい、成長したいと思ってるということは、同時に教科書・問題集が欲しいと言っていることになる。だから、あなたが望んだとおりに、神様は問題集や荒波を届けてくれるんだ。学び、体験し続けるためには、教科書や問題集や荒波が必要になるからね。」

では、神様はあなたの望み通りに、荒波を届けてくれるという何度も言ってるけども、その神様って一体どこにいらっしやるのだろう。小野さんはどう思う？」

小野 「ん〜。漠然とですが、どこか高いところから、私たちを見おろしているような、見守ってくれてるような、そんな感じですよ。」

私 「実は私も、以前はそんな感じで思ってた。でも、沢山の人のセッションするうちに、考え方が変わってきた。さつきから何度も言ってるように、私たち一人一人が神そのものなんだ。つまり、あなたも神様だし、あなたの周りの人、一人一人が神様そのものなんだ。」

だから、あなたの望み通りに荒波を送ってくれる神様は、あなたの周りの人達そのものなんだ。前の事例でも紹介したように、暴力を振るい続けたご主人も、虐待を続けたお母さんも、その奥さんや娘さんの「人の痛みがわかる、優しい自分になりたい」という素晴らしい望みを叶えてあげたくて、自分の人生をかけて、悪役を引き受けてくれた素晴らしい魂だった。

魂レベルでは、そういう素晴らしいことをやっているんだ。だから、神様はどこか遠くにいるのではなくて、あなたの周りに沢山いるんだよ。全てが神様そのものなんだ。ただそこに、気づけるかどうかなんだよ。」

小野 「そうなんです！何だか感動します！・・・そうなんだ・・・。」

私 「そう。それに気づくと、世の中の見え方が違ってくるよね。」

小野 「本当にそうですね。」

望みを実践する

私 「しかしね、成長を望んだり、学びを望んだりするから苦しみがあるのなら、成長を望まなければいいんですか？
という人も中にいる。」

小野 「私もそこを疑問に思っていました。」

私 「そういうふう勘違いする人も確かに多い。もちろん、成長や学びを望むことは素晴らしいことだし、必要なことだよ。成長しようとしなくていい、人の痛みが分からないわがままな人は、どんな人生を送ることになるだろうね。想像したらわかるよね。一人ぼっちの寂しい人生になっていくだろう。それはそれで一つの体験だから、それもいいんだと思うけれども、でもやっぱり嫌だよ。それを魂レベルではわかっているから、自然と成長の方を選ぶことになる。事例で紹介した方々もそうだったよね。しかし、学び続けなくてはいけないと思いつけると、実は本来の目的が達せられなくなってしまう」

小野 「??？」

私 「幸せになるためには、修業や学びが必要だと思ってる人が沢山いるんだけど、そうすると、修行の人生だけで

終わってしまうことになる。」

小野「あ、そうですね。」

私「小野さんは小学校の時に、足し算を習ったよね？」

小野「はい。」

私「では、足し算は何のために習ったんだろう？ 第一の目的はなんだろう？」

小野「あとあとの勉強ができるように？」

私「たしかにそれも大切。ではね、今あなたはどんな時に足し算を使っていますか？」

小野「ものを数えたり、お買物の時にお金の計算をしたり。」

私「そうだね。足し算を習った第一の目的は、計算ができるようになって、お買い物に行ったり、普通に日常の生活ができるようになるために習ったんだよね。だからまず「読み、書き、そろばん（計算）」なんだ。決して、問題集を解くために習ったのではないよね。問題集や教科書は足し算ができるようになるための手段であって目的ではない。しかし、学ぶことが目的になってしまうと、永遠と問題集を解くことになってしまう。」

小野「そうですね。」

私「一桁の足し算ができた。次は二桁、三桁、五桁、十桁、百桁、……。そういうことをやっている人も沢山いる。百桁の足し算の練習の意味があるのかな？ せいぜい三桁くらいが出来れば充分じゃない？」

私 「あなたが学ぼうとしたのは「優しさや思

小野 「そうなんです。」

る。」(図22)

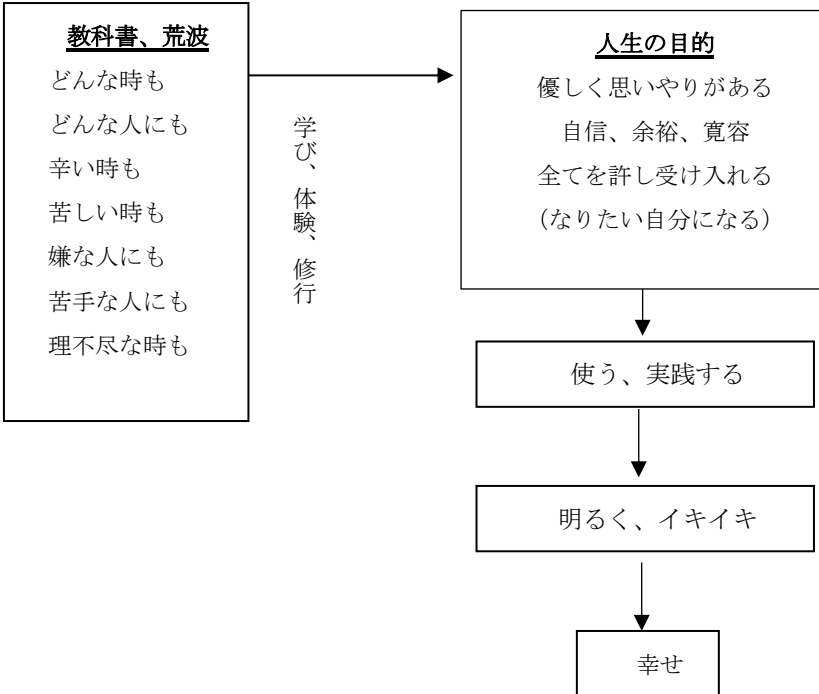
私 「そうなんだよ。足し算は、学ぶことが目的ではなくて、それを使って面白い物をして、おいしいケーキを食べる。そして幸せを手に入れる。それが目的なんだよ。つまり、学ぶことが目的ではなくて、使うこと、実践することが目的なんだ。そうすれば、あなたが望んでいるものが手に入る。」(図22)

小野 「はい。」

私 「そうだよ。それが出来たら、それを使って面白い物に行けばいい。そして、おいしいケーキを買って、みんなで食べる。『美味い！幸せ！』。一番ほしかったものが手に入るでしょう。」

小野 「そうですよね。」

(図22)



いやり。本当の強さや勇氣。許しや自信。など」だった。そういう自分であつたなら、どんな状況であろうと、どんな仕事をしていようと、最高の自分になれること、最高の人生を送れること、皆が笑顔になることが、魂の奥底では分かっている。それは、とても素晴らしい望みであり、そのためのとても困難な学びを、何千年も続けて来た。

ではなぜそれを身につけようとしたのか。それを『実践する』ためだよ。実践することで、初めてあなたの望む最高の自分や、最高の人生が手に入る。(図20)

しかし、あなたも今まで、実際にそれを実践した時があるはずだよ。その時は一瞬でも幸福感が手に入らなかったかな？　そういう経験は沢山あるはずだよ。」

小野「確かにそうです。私が優しい気持ちで人に接したときは、相手も笑顔になつて幸せな気持ちになります。」

私「そうだよね。そんな体験はいっぱいあるでしょう。しかし、あなたがいつまでも学ばなくてはいけないと思いつけていれば、なりたい自分、つまり優しさや自信や許しを、実践できない状況が現れてくることになるんだよ。

だって、「許せないような人も許せる自分でありたい。」と望んでいるからね。そして、あなたが許せないような状況が現れ、許せない、でも許さなくちゃ…、という苦しみが繰り返されることになる。」

小野「そういうことなんですね。」

私「言ってみれば、荒波の発注伝票を出し続けているようなものだよ。神様(宇宙)はあなたの望みをそのままの形で一〇〇%叶えてくれるんだ。だから、あなたの発注に応じて荒波が届けられる。荒波が届くとあなたはまた溺れなくてはならなくなる。溺れたあなたは『もっと鍛えなくちゃ！』とさらに発注をかけてしまう。いつまで続ける？」

小野 「確かにそんなことをやってますね。でも、もう嫌です。」

私 「そうだよね。もう嫌だよね。だから、あなたの人生の目的を達成するには、学びや修行から卒業する必要があるんだよ。しかし、なかなかそこから卒業できない。どこかで、『自分は学ばなくちゃいけない。』もつと成長しなければいけない。『学び続けなければ幸せになれない。』という思い込みがある。それはそれで素晴らしいんだけど、実はそこに落とし穴があるんだ。さらに例えると、あなたがボクシングをやっているとしよう。あなたが『もつと強いボクサーになりたい。もつと強く、もつと強くなりたい。』と望んだならば、どんな練習相手が必要になるかな？」

小野 「自分よりも強い人？」

私 「そうだよね。自分よりも弱い練習相手で、あなたの望む強いボクサーになれるだろうか。」

小野 「なれそうにないですね。」

私 「そう。もつと強いボクサーになるためには、自分よりも強い練習相手が必要になる。では、その自分よりも強い練習相手にあなたは勝てるだろうか？」

小野 「負けちゃいます。」

私 「無理だよ。そうして、結局あなたは負け続けるということになってしまふ。」

「負け続けるとあなたはどう思うだろう。『もつと強くならなければ……』と思う人もいるだろうし、あるいは『やっぱり私はダメだ……』と諦めてしまう方もいるだろう。」

『もっと強くならなければ…』と思った人は、もっと強い練習相手を望むことになるだろう。そうすると、いつまでも殴り倒され、負け続けるということが繰り返されることになるよね。

そして『やっぱり私はダメだ…』と諦めてしまった人も、自信を喪失し不本意な人生が待っていることになるだろう。結局どちらも同じ結果になりかねない。実際に、そうなってしまっているクライアントさんを、今までも何人も見てきているよ。」

小野「確かにそうなりますね。もしかしたら私もやっていたかもしれません。」

修行をやめる許可を自分に与える

私 「ではどうしたらいいのかわかるのか。」

それは『修行を止める許可を自分に与える』ことなんだよ。ほとんどの人が、幸せな人生、理想の人生を歩むためには『修行が必須だ』とどこかで思い込んでいる。思い込んできているというよりも、刷り込まれてきていると言ったほうが正確かもしれない。あなたはどうですか？」(図23)

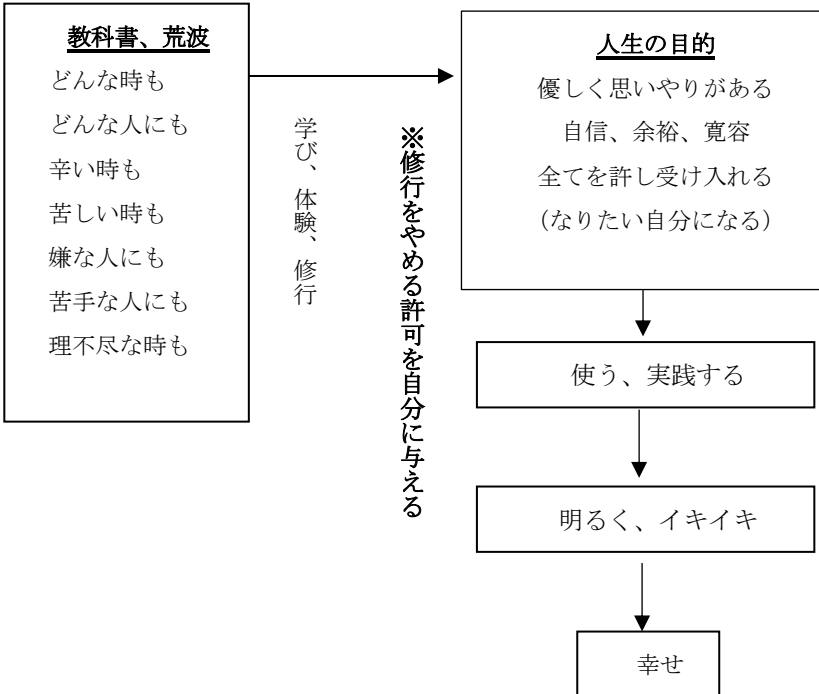
小野 「確かにそう思ってきました。」

私 「おそらくほとんどの人はそうだろうと思う。以前は、私もそう思っていた。」

しかしいずれにしても、ここでも最初に言った『前提条件』が現実化し始めることになる。

『幸せになるためには、立派な自分にならなくてはならない。そのためには、たくさん

(図23)



苦勞や修行が必要だ。』と、どこかで思い込んでいる。それはそれで素晴らしい。

やはり、人の痛みがわからない傲慢な人は、人が離れていき、いずれ寂しい人生になっていくことになる。だから、辛い苦しい体験は少なからず必要。成長も必要。しかしそれをいつまで続けるんだろう。

修行が必要だという思い込みをいつまでも続けていると、その思い通りに修行だけの人生になってしまうよね。本当にあなたはそれを望んでいるのかな？」

小野「やっぱりそれはいやです。」

私「周りの人も、それをあなたに望んでいるのだろうか？」

小野「ん・・。私の両親は望んでいたみたいです。」

私「確かにそういう人は沢山いるよね。おそらくあなたのご両親も、人生は修行だと思い込んでたタイプなんだろうね。それはそれでオッケーだけど、修行だけの人生って楽しくなさそうだよね。」

修行というものに対するとらえ方も、人それぞれだと思うけど、「修行≡苦行」になっている人が多いと思う。修行も、その中に喜びがあれば、それはそれで素晴らしいと思う。なりたい自分になるためには努力は必要だよ。

しかし、苦行は必要ない。苦行と努力は違うからね。努力という言葉にはポジティブな側面がある。しかし、自分を否定し責め続けて、苦しみの中での修行は文字通り苦行や苦勞でしかない。下手をすると、つぶされかねない。そうやってる人も沢山いる。」

小野「私もそうなってたかもしれませんが。」

私「そんな人が沢山いるよ。昔の私もそうなりかけてた。しかし、あなたが望んだのは、『優しく思いやりのある、自

信に満ちた自分が、みんなを笑顔にして、そして私も幸せになる。』ではなかった？」

小野 「そうです。」

私 「そのための、今までの修行であり苦行や努力や体験ではなかったかな？」

小野 「はい。」

私 「その修行や苦行は手段であって、目的ではなかった。本来の目的であり、あなたの望みは、『優しく思いやりのある、自信に満ちた自分』が、『みんなを笑顔にし、そして幸せになる。』を『実践することだったはずなんだ。』

しかし、ほとんどの人が、実践をする前に『優しく自信に満ちた理想の自分になりたい』をやっている。『なりたい』と言っているということは、『私はまだまだです』と、言っているということだから、『まだまだ私には修行が必要です』になって、修行の世界から抜けられないことになってしまう。いつまで修行を続けますか？」

小野 「そういうことです。でも、もう修行は嫌です。」

私 「そうだよ。もういいよね。だから、『修行の世界』から『理想の世界』に移るためには、修行が必要なのではなくて、『修行をやめる許可を自分に与える』ことなんだよ。そうすれば、あなたの本来の望みである『明るくいキキキとした幸せな人生』が手にはいる。」(図23)

小野 「はい。」

私 「『学ばなくてはいけない。修行や苦行が必要だ』の世界から卒業して、今まで学んできたこと、身に付けたものを実践する世界に行こう。そうすれば、あなたの本当の望みが、現実化し始める。あなたはそれを望んでいなかった？」

小野 「はい確かにそうです。」

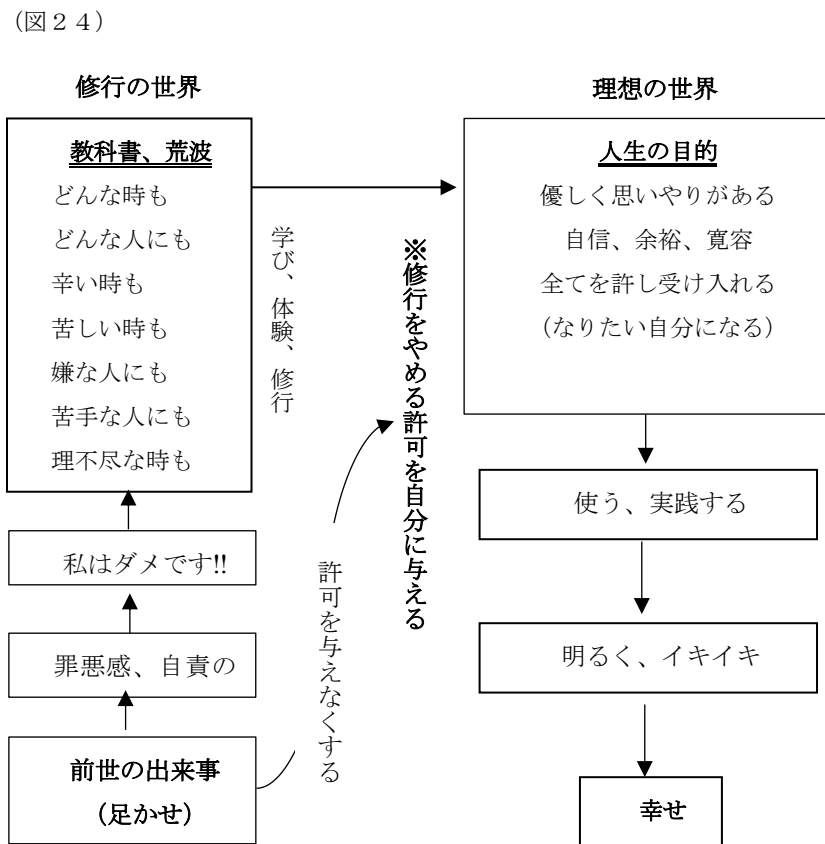
私 「そうだよ。しかしまた、ここで問題が起きてくる。『修行を止める許可を自分に与える』ことがなかなかできない。許可を与えることに、また躊躇してしまふ。申し訳ないような気になつてしまふ。

だから、悩みや苦しみがなかなかなくなるらないと言つても良いのかもしれない。」

小野 「確かにそうですね。そんな感覚があります。」

私 「ではなぜ、『修行を止める許可を自分に与える』ことができないのか。

それは、最初に言つたように、自分に「×」をつけているからなんだ。どこかで自分を否定している。『私はためです』と思ひ込んでいる人が多い。あなたはどうかだつた？」 (図24)



修行の世界

理想の世界

教科書、荒波

どんな時も
どんな人にも
辛い時も
苦しい時も
嫌な人にも
苦手な人にも
理不尽な時も

私はダメです!!

罪悪感、自責の

前世の出来事
(足かせ)

学び、体験、修行

※修行をやめる許可を自分に与える

許可を与えなくする

人生の目的

優しく思いやりがある
自信、余裕、寛容
全てを許し受け入れる
(なりたい自分になる)

使う、実践する

明るく、イキイキ

幸せ

小野 「はいそうです。だからここに相談に来たのかも知れません。」

私 「そうだよ。しかし『私はだめです』と思い込んでいると、『だめな私には修行や苦行が必要だ』になってくるよね。だから、修行の世界にとどまろうとはしはじめ。そうすると、苦行や苦労だけの人生で終わってしまう。

ではなぜ、自分のことを『ダメな私』と思い続けるのか。そこには、自分の奥底に漠然とした『罪悪感、自責の念』があるからなんだ。あなたはどうか？」

小野 「そう言われてみると、確かにあります。漠然としたものがあります。」

私 「そういう人が多いんだよ。ではなぜ『罪悪感、自責の念』を持っているのか。それは、過去に何か体験があったからなんだ。何もなければそういうネガティブな感情は持たないものね。

ではどういう体験があったのか。大体想像がつくでしょう。今までのたくさんセッションの事例からいうと、過去に大失敗をしていたり、誰かに迷惑をかけていたり、他にもあるかもしれないけども、自分が罪悪感や自責の念を持ってしまふような、過去の大きな体験を引きずってきている場合が多いんだ。そして、その体験のほとんどは、前世の場合が多い。いくつかの事例でも示したように、大きな失敗や、周りに迷惑をかけた自分を責め続けて、無意識のうちに、自分を罰したり償いの人生を送ってる人が非常に多いんだよ。

つまり、今の人生を支配している思考パターンのほとんどは、前世の体験に基づいている場合が多いんだ。『あんなひどいことをした自分が、幸せになるわけにはいかない。』とか『辛い思いをしても当然だ。』『思い通りの人生を歩んではいけない。』と知っている人も沢山いる。前世の思い込みが足かせになって、修行を止める許可を与えられなくなってしまうている。

ならばどうしたらいいのか。その自分を否定するようになった過去、前世の体験を具体的に明らかにし、それを解消し、さらにはその体験によって抱え込んでしまった感情（罪悪感、自責の念、後悔、自己否定、不安感、恐怖心、喪失感、猜疑心など）を解放することによって、自分を許すことができるようになる。

そうすることで、自分に課した課題や修行を続けなければいけない、という思い込みから解放されることになるんだ。足かせが外れるんだよ。それには、前世療法がとて有効な手段になる。自分が前世の出来事を思い出して、解消することができるからね。

そうすると、『自分を許し、修行をやめる許可』『幸せになる許可』を自分に与えることができる。本来の自分の人生の目的が現実化し始めることになるんだよ。

しかし、なかには「過去や前世のことをほじくり返すより、これからの事の方が大事なんじゃないですか？」と言われる方もいらっしゃる。確かに、終わった過去のことよりも未来のことが大切。でも、その未来に一步を踏み出そうにも、足かせが重くて踏み出せない人が沢山いるんだよ。仮に踏み出したところで、自分を許さないままの一步だから、また苦行の道になりかねない。その足かせさえ外してあげれば、意外とすんなり、明るい未来への一步を踏み出すことができるし、人生の流れが大きく変わるみたいだよ。幸せになる許可を自分に与えた上での、新たな一步だからね。」

小野「そうなんです。なんだか楽しみになってきました。」

私「では、過去の罪悪感乗り越えて自分を許し、足かせを外して、未来への一步を踏み出すことができた、あるクライアントさんの事例を紹介するね。」

事例四

彼女は三七歳独身です。実は生まれてからこの方、いちども男性とお付き合いしたことがありません。見た目も性格も感じのいい女性ですから、彼氏がいても全くおかしくない女性でした。

カウンセリングを進めていくと、彼女は性的な行為に対する恐怖心がとても強いことがわかりました。

「今までに、お付き合いした人とキスとか、そういうことになりかけた事は何度かあったでしょ？」と聞くと、「はい。何度かありました。」

「その時はどうだったの？」

「例えば、デートに誘われて、それはとてもうれしくて、楽しいのですが、帰り間際に手を握られたりすると、それが怖くて次からは会えなくなるんです。」

「なぜそれが怖いのか？」

「次に会うと、それ以上の事になるのではないかと思うと、とても怖くなるんです。」

「それでは、恋人も結婚も難しいよね。」

「そうなんです。私も早く結婚をして、子供が欲しいと思うんですが、それを考えるのも怖くなるんです。」と彼女は言います。彼女は、男性とお付き合いすること、性的な行為に及ぶことに対して強い恐怖心を持っているようです。

その恐怖心に焦点を当て、原因となっている前世へと誘導しました。

三〇〇年ほど前の、日本の人生の記憶が出てきました。

前世の彼女は子供二人を抱えたお母さんです。とても幸せそうな家庭です。ご主人とも仲が良く、子供もとても可愛い理想的な家庭のようでした。しかし、ある時ご主人とちよつとしたことで喧嘩になってしまいました。ほんとにささいなことです。彼女はご主人を困らせてやろうと、ドイツと外に出て行つたのです。

二時間ほどして家に帰ると、子供たちがいません。ご主人に「子供たちはどうしたの？」と聞くと、ご主人は「お前が連れて行つたんじゃないの？」というのです。びっくりした二人は、あわてて子供たちを探しに飛び出しました。

子供たちは、いなくなつたお母さんの後を追つて、探しに出て行つたのです。

何時間も探しても見つかりません。そのうち土砂降りになってきました。半日ほどかけてやっと、びしょ濡れの子供を見つけることができました。急いで家に連れて帰り、冷え切つた体を温めるのですが、それが原因で二人は肺炎になり、必死の看病もむなしく亡くなつてしまつたのです。

母親である彼女は、二人の子供を死なせてしまつたのは自分のせいだと、自分を責め続けました。あんなに仲の良かったご主人との関係も、破綻してしまい、一人で暮らすようになりました。

「こんな自分が幸せになるわけにはいかない。苦しんで当然だ。」と思つていたのです。

そして、「何度生まれ変わっても、私には結婚する資格は無い。ましてや、子供を産む資格などあるわけがない。一人寂しい人生でちょうどいい。」と思つて亡くなつていたのでした。

ですから彼女は、子供を作るといふ行為のずっと手前から遮断をしていたのです。結婚することはもちろん、子供を産み母親になるずっと手前から、ストップをかけていたのです。

結婚することも子供を産み母親になることも、幸せな人生を歩むことも、自分には資格はないことだったのです。そう堅く決めて生まれてきていたのです。

そのことがわかり、亡くなった子供たちの魂に謝罪をし、ご主人の魂とも和解をし、皆に許してもらうことで、自分を許すことができました。自分が幸せになる許可を、自分に与えることができましたのです。

その半年後、彼女に恋人ができました。そしてさらに一年後には結婚をして、幸せな家庭を築いてらっしゃいます。近いうちに可愛いお子さんにも恵まれることでしょう。

事例以上

私 「どうも？」

小野 「すごいですね。何だか感動しますよね。」

私 「そうだね。彼女は前世の出来事を何百年も引きずって、自分に幸せになる許可をずっと与えてこなかった。こんな私が幸せになる資格なんかないと、ずっと責め続けていたんだ。だから、目の前に幸せになるチャンスが現れると、自ら身を引いたり、自分の手で潰してきたんだよ。同じことを何度も繰り返して来ていた。

そのことを思い出し、みんなに許してもらうことで、自分を許すことが出来た。そして、幸せになる許可を自分に与えることが出来たんだ。

セッションでこのような体験をして、自分を許すことが出来た人は沢山いるよ。人生が大きく変わり始めるんだよ。

しかし、ここで勘違いしてほしくないのは、先程から言っているように、向上心を持つことが苦しみを作り出す直接の原因ではないということ。その根本にある感情が問題なんだよ。

それが罪悪感や自責の念からのものであれば、この事例の彼女みたいに常に自分を責め続け、どこかで自分が幸せになる許可を与えなくするからね。どこかで『罪滅ぼし』をすることが、『自分の成長』と混同してしまっている場合もある。確かに、「罪滅ぼし」によっても成長は可能だと思うけど、本来の目的である「みんなの幸せ」には行きつかなくなってしまふ。中には、事例の彼女のように「罪滅ぼしと自罰」だけが目的になってしまっている人もいる。反省は必要だけでも、自分を罰し続ける必要はない。

「罪滅ぼし」から来る修行は、ただ苦しみを生むだけ。みんなの幸せにはつながらない。ただ自己犠牲を続けるだけになってしまふ。自己犠牲を続けている人の周りの人はどんな気持だろう。周りもつらくなるよね。」

小野 「そうですね。しかし、私にもそういう部分があるみたいです。」

私 「ではね、もしあなたの前に、溺れている人がいるとしたら、あなたは どうする？」

小野 「もちろん助けようとしませす。」

私 「助けようとするよね。優しいからね。しかし、あなたは沈みかけてる船で助けに行こうとするだろう。さっきの事例の彼女もね。だって、あなたも彼女も、立派な船に乗る資格は自分にはないと思っっているものね。自分が立派な船に乗るのは、どこかに申し訳ない感覚がある。」

小野 「あ、確かにそうですね。」

私 「そういう人が多いんだよ。どこかで自分は立派な船に乗る資格はないと思っっている。つまり、幸せになる資格は

ないと思ってる人が沢山いる。しかし一方では、困ってる人がいたら助けてあげたいという悲しくなるほどの優しさを持っている。では、沈みかけてる船で溺れてる人を救うことができるだろうか。」

小野「無理ですよね。」

私「どう考えても無理だよね。助けるどころか、助けなくてはいけない人が、もう一人増えるだけのことで、残念ながら大迷惑な結果になってしまう。だから、あなたが苦しんでる人を助けて、みんなに笑顔になって欲しい、と思うのであれば、あなたは絶対に沈まない船に乗っておかなくてはいけない。十人助けたのであれば、十人乗りの船に。百人助けたのであれば、百人乗りの立派な船に自分が乗る許可を与えなければいけない。そうすることで、初めてみんなを笑顔にすることができる。だから、遠慮なく自分が幸せになる許可を与えることだよ。そして、立派な船を今から造る必要もない。その船は、あなたが気づけばあなたの中にあるからね。本来みんな完璧な存在だからね。」

自分を許し認めることで、あなたの望む人生は手に入る。そして、みんなの笑顔も自動的に手に入る。」
小野「はい。何となくわかってきました。」

人生の法則は知ってはいけない

私 「しかしね、今まで説明した『人生の目的』や『人生の法則』は知ってちゃいけないことになっているんだ。」

小野 「え?？」

私 「そう言われると、なんだか混乱するよね。だから、あなたが今まで知らなかったとしても、当然だった。ではなぜ、知ってちゃいけなかったんだろう。」

もしあなたが、小さい時から『今回の私の人生の目的は、全てを許し、自信を持って自由に生きることです。』ということが分かっていたとしたらどうだっただろう。」

『許すことを学ぶためには、許せないということが必要だ。更なる自信を持つためには、沢山の失敗や周りから否定される必要がある。』ということが分かってしまう。それが分かっていると、あなたのことを否定したり、裏切ったりする人が現れて来たときにあなたは思うだろう。『いよいよやって来たな。私を蹴落とそうとしているな。私の自信を奪おうとしているな。』あるいは、『許せないという体験をさせようとしているな・・』ということが分かってしまう。」

そうなる、もう蹴落とされない。自信をなくすこともなくなってしまった。そうすると、悔しいとか自信がないという体験も出来なくなってしまう。許せないという体験もできなくなってしまう。そうすると、自信を持つ、許すという学びが出来なくなると、あなたは成長しないまま、ということになってしまふ。」

小野 「確かにそうですね。」

私 「そうならないように、全ての人が『人生の目的、法則』も『自分が設定した計画や教科書』もすっかり忘れて生まれてくるんだ。だから、誰かがあなたを裏切ったとき、あるいは否定してきたときに、まんまと引っ掛かってしまう。『許せない！』『私ってダメだ…』という辛い苦しい体験が始まる。そして、泥沼の中に蹴落とされてしまう。その中で、もがき苦しみながら、はじめて許しと自信の学びを一〇〇%体験することができる。そしてそれを学び終えたときに、最高の自分が手に入ることになる。」

小野 「そうなんです。」

私 「そして、もちろん前世もすっかり忘れて生まれてくることになっているんだ。もしそれを覚えていたならば、『この前の人生で私はこんな失敗をしたから、今回はこうしよう！』と、もう人生の目的が分かってしまう。だから、前世すらも忘れて生まれてこなくちゃいけなかった。

一見理不尽に見えるけど、『人生の目的、法則』も『前世』も『今回の人生の計画』すらも全て忘れて来ているから、一〇〇%の体験が出来たんだよ。

例えば、『一週間後に英語の試験があります。ちなみに試験問題と解答はこれです。』とテスト用紙と解答集を渡されたらどうだろう？」

小野 「その答えを必死で覚えます。」

私 「そうだよ。私もそうするだろう。ラッキーと思うよね。しかし、そうなるともう勉強しないよね。せいぜい答えを丸暗記して終わり。それ以上は出来なくなってしまう。

そうならないように、問題も答えも全て隠される。実力試験となると、試験範囲すら伏せられる。だから必死で勉強しなくちゃいけなくなる。

実は人生も同じだった。『人生の目的、法則』も『前世』すらも全て忘れて来ているから、一〇〇%の学びが出来たんだ。つまり、何も知らなかったあなただが、実は一番得をしていたということになる。

よくテレビで魂や前世のことをやってるよね。そして必ずそれを頭から否定している人がいるね。しかしそういう人は、人間として優等生ということになってくるんだよ。何も分からないから一〇〇%の体験ができています。」

小野「そうなんですネ。」

私「では、その知ってちゃいけないことが、今から明らかになってくるんだけど、知っていいんでしょうか？」

小野「私もそう思っていました。知っていいんでしょうか？」

私「それはね、『もう卒業していいよ』ってことなんだよ。あなたは今まで何度も試験を受けてきた。中間試験も期末試験も実力試験も。そして卒業試験も受けてきた。そして、どうにか合格点をもらった。だから、今から答え合わせをしましょう、ということなんだよ。試験を受けてきていない人に、答え合わせをするわけにはいかないからね。試験を受けてるから、答え合わせが出来る。しかし沢山間違っているところもあるから、ここでしっかり答え合わせをして、間違っているところはちゃんと改めて、そして次のステップに進みなさい、ということなんだよ。」

小野「そうなんですネ！ 私も進んでいいですネ！」

私「もちろんだよ。いつまでもその問題の中、修行の中にいる必要はないよ。今まで沢山の問題を通じて、しっかりと勉強をして、テストも受けて、そして合格点をもらっているんだから、もう答え合わせをして次のステップに進もうということなんだよ。」

人生には大きく分けて三つのステップがあるようだ。人生を一つの機械に例えると、第一ステップは人生の部品をつ

くる段階。自分を完成させるための部品を作ると言ってもいいかもしれない。そして次にその部品を使って、機械を組み立てる第二段階。自分を完成に近づけていく段階だね。そして、その機械を使う第三段階。つまり、今まで学んだこと、培ってきたことを実際に使って、皆の役に立つ、人生の目的を達成する段階ということ。

しかし機械の部品をつくっているときは、一体何をしているのかわからない。この部品がなんに使われるのか、なんのために作られているのか、この歯車や、ネジがなんの役に立つのか、サッパリ分からないんだ。

色んな人間関係の中で、苦しいことや悲しいこと、悔しいこと、感動することを体験することで、その部品が作られていく。だから、イヤでイヤでしようがない時もある。不安だったり自分を責めたりしてしまう時もある。しかし、その部品をしっかりと作っておかないと、機械作りには進めない。進んだとしても、途中で足りない部品を作らなくちゃいけないってしまう。

だから、つらいことや苦しいことがあっても、それにしっかりと向き合って乗り越える時期が必要なんだよ。

そして、その部品作りが終わると、第二のステップの組み立て作業が始まる。しかし、その時も初めのうちはまだ分からない。何が出来るのかね。時には、足りない部品を作り、また戻らなくてはいけないときだってある。しばらくは、部品作りと組み立てを、行ったり来たりする場合もある。

それが終わると、いよいよ第三ステップ。その機械を使うときがやってくる。それを使って皆の役に立つときがね。実はそれが今回の人生の本番ということになる。

今まであなたは部品を作ってきた。しかし部品を作っているときは、何をさせられているのか分からないから、不安でしょうがなかったり、自分を責めたりイライラしてしまう。しかしその不安感や自責の念があるから、頑張れるし慎重に部品を作ることができたんだ。つまり、今まであなたが抱えてきた不安感や自信のなさは、実はあなたに必要だっ

たんだよ。さらに、その部品を使って機械を組み立てるときも、不安感が必要になる。そうじゃないと慎重に組み立てられないからね。

でも、その機械を使おうとしたときに、そのネガティブな感情は邪魔になってくる。不安感があると、機械を使えなくなってしまうよね。不安で機械のスイッチすら入れられなくなってしまう。機械を作った意味がなくなってしまう。だから、今度は不安感が確信に変わらなくちゃいけないんだ。

そして、今あなたはその機械を使う段階に来た。あなたの中にはすでに沢山の宝物がある。もうその宝物を使うときに来ているんだよ。

だからあなたは答え合わせをする必要がある。答え合わせをして、ネガティブな感情は捨てて、間違っているところはしっかり改めて、次のステップ、つまり本当のあなたの人生を歩みなさい、ということなんだよ。」

小野「はい！わかりました。何だか気持ち明るくなってきました！」

体験の意味

小野さんとの会話を聞いてどうですか？

前半の部分でも申しましたように、人間は様々な体験をするために生まれてきているようです。「人間は成長するために生まれてきている」と言われます。確かに、それも一つの大きな目的だと思います。

しかし、成長するということは、いわゆる「素晴らしい人になる。立派な人になる。」という事は少し違うようです。

「素晴らしい人。立派な人。」というのは、前半でお話した〇「×」と同じで、その基準は国や地域、性別や文化、時代によって変わってくる曖昧なものです。

魂の成長というものは、「素晴らしい人。立派な人。」になるということではなくて、たくさん体験を積むということなのだろうと思います。その体験の中には、善行をつむ事もあれば、他人に迷惑をかけたり、傷つけたり傷ついたりすることも含まれるのです。

それによつて感じた「喜び、楽しみ、悲しみ、苦しみ、後悔、自責、恨み、嫉妬、怒り、慈愛」など、喜怒哀楽をたくさん体験するために、人として生まれてきているようです。

つまり、さまざまな感情を体験したかった。そのために、沢山の体験が必要だった。そこには、良い体験も、悪い体験も、辛い体験も、悲しい体験も必要だった。

それは、「私が望んだ最高の私になるために、私が望んだ最高の出来事」だったのです。

そして、体験をし尽くした時に、本来の自分の姿、つまり「神そのものの自分」に戻るのかもしれない。

人間は「人の間」と書きます。

つまり、「人と人との間」にあるものを人間と呼ぶのでしょうか。では、人と人との間にあるものとは何なのでしょう。

それは、人と人との関わりによる、様々な体験のことをいうのだと思います。

人と人との間にある、様々な感情や、やりとりや、思いや、体験のこと。それを人間というのでしょうか。

私たちは「人」を体験しに来ているのではなくて、「人間」を体験しに来ているのです。

もともとは全ての人が「神そのもの」であり、「素晴らしい魂」なのです。

旧約聖書には「神は人を自らに似せて作った」と書いてあります。神のように作られた人であるならば、人が作った世界も神の国のような素晴らしい世界になるはずですが、しかし、現実は違います。ではなぜ違う世界になっているのでしょうか。

それは、神の世界と同じであれば作る意味がないからでしょう。私たちの魂は、神の世界とは違う体験をしたかったのだと思います。そのために、わざわざこのような過酷な世界を作ったのでしょうか。同じものは二つ必要ありません。完璧な魂のままでは体験できなかった、過酷な状況の中で生まれる人と人との間の「情」を体験したかったのでしょうか。そして、その「温もり」を感じたかったのでしょうか。

そのために、神の世界とは全く違う世界を作ったのだと思います。

しかし、その過酷さゆえに本来の目的を忘れてしまっている場合も沢山あるようです。怒りや恐怖心に占領され、本来の望みとは違う世界になってしまっている部分もあります。

前世誘導の中で、「あなたが人間になる前の場面へと戻ろう」「なぜあなたが、人間になろうと思ったのか。人間界に
来ようと思ったのか。そのきっかけとなっている場面に戻ろう。」と誘導する場合があります。

そうすると、大きく分けて二つの状況が出てきます。

まず一つは「上の世界から人間界を見ていたら、皆がいろんな体験をしているのが見えました。怒ったり、泣いたり、
笑ったり、喜んだりしているのを見て、私もあんな体験をしてみたいと思って、地上に降りてきました。」という場合と、
「上の世界から人間界を見ていたら、皆が大切なこと忘れてしまっているのが見えました。怒りや不安や欲望に任せて、
争いばかりをしている。あの状況をどうにかしたい。大切なこと思い出させてあげたい。そう思って地上に降りてきま
した。」という、二つのパターンです。そして、ほとんどの方が「思った以上に過酷でした」と言われます。

つまり、私たちは人間界でさまざまな体験をしたいと思って、地上に降りてきたようですが、体験の過酷さに負けて
しまっている人が沢山いるようです。さらに、大切なことを伝えようと思って降りてきた人たちも、その過酷さや誘惑
に負けて、ミイラ取りがミイラになってしまっている場合も沢山あります。

高次元の世界では、体験できないことを体験しようとして人間界を作ったのですが、本来の目的とは、ずれてしまっ
ているようです。当初は、ただ体験や刺激が欲しくて「地上に降りてプロレスごっこでもしよう」という乗りだつたの
が、いつの間にか本気の殴り合いになって、さらには殺し合いにまでなってしまうのが現状なのかもしれません。
そろそろ本来の姿に戻らなくてははいけません。

では、人間として沢山の体験をされてきたクライアント様の事例をいくつかご紹介します。

第四章 事例集

DVを受け続けた女性

まずはじめに、事例三でご紹介しました、ご主人から暴力を受け続けた佐藤さんの続編です。

一度目のセツシヨンの数ヶ月後、彼女は「さらに自分のことを知りたい」と、再度セツシヨンにいらつしやいました。私も、彼女がなぜ何度も武士や兵士を繰り返そうとしたのか。なぜそこまでして力が欲しかったのかが気になっていました。そこに焦点を当てて、前世に誘導しました。

そうすると、千年ほど前の十字軍の人生ができました。その人生でも彼女は男性でした。彼は敬虔なクリスチャンで、十字軍に徴兵され、敵地に向かうのですが、人殺しなどしたくありません。でも、断ることは許されません。仕方なく戦場に赴きました。

運良く、実戦に遭遇することはなかったようですが、そこには戦で親を亡くした子供たちが沢山いました。かわいそうに思った彼は、五人ほどの孤児を連れて帰り、私費で育て始めたのです。

初めのうちは、周りから奇異の目で見られていたようですが、戦も落ち着き始めた頃、国王から呼び出しがありました。異教徒の子供を育てることを、咎められ罰せられるのではないかと、ビクビクしながら城に上がりました。

しかし、王様は意外なことに彼を褒め称えるのです。「お前がやっつてゐることは素晴らしい。まさしく神の教えそのものだ。資金を援助してあげよう。」というのです。

資金援助を受けるようになった彼は、沢山の孤児を育て始め、百人ほどの施設になったようです。子供たちの笑顔に囲まれ、充実した日々を送っていました。戦で沢山の人を殺していた前世とは、別人のようです。

しかし、そういう毎日でも長くは続きませんでした。また戦が激化し始め、余裕がなくなった王様からまた呼び出しがありました。「もう資金の援助はできない。兵士が不足しているから、戦えそうな子供を兵士として差し出せ。兵士にならない子供は処分しろ！」と命令されたのです。

しかし彼に、そんな酷いことができるはずがありません。彼はその命令に背きました。怒った王様は、その施設を襲い、子供たちを皆殺しにしてみましたのです。

彼は、自分を責め続けました。「自分にもつと力があれば皆を守れたのに。弱い者たちを守るためには、力が必要だ！」
「次の人生では、何ものにも屈しない力を身につけよう！」と違って亡くなっていたのです。

そうして、彼女は次の人生から力を求めたのです。武士や兵士になって、誰にも屈しない力を身につけよう。そして、弱い者たちを守ろうとしたのです。しかし、力に走るあまりに、使い方を誤り、弱い者を傷付けてしまったのです。そして、自分を責め続けていたのです。

その事を思い出した彼女は、「自分の力を弱い人たちのために使おう」と、さらなる深い気づきを得ることができました。

生まれながらのアトピーの女性

二八歳の彼女は生まれながらのアトピーです。知り合いのご紹介で初めて彼女に会った時も、彼女はいつもニコニコして、明るく振る舞っていました。

しかしその笑顔の奥には、寂しさの影が見えました。自分の感情を押し隠して、無理に明るくしているような、そんな雰囲気を感じました。

セッションをすることで、彼女のアトピーの原因が明らかになりました。

【原因となっている前世】

三〇〇年ほど前のヨーロッパの人生が出てきました。彼女は五人家族の長女です。お父さんお母さんと下に二人の妹がいました。とても仲の良い家族です。しかし長女である彼女は、いつもお母さんから「お姉ちゃんだから我慢しなさい。しっかりしなさい。」と言われ続けていたのです。どこかでいつも寂しい思いをしていました。

ある日彼女は、その寂しさをわかってもらいたくて、いたずら半分でカーテンに火をつけたのです。お母さんを少し困らせたという、ほんのいたずらのつもりだったのですが、その炎は一気に燃え広がってしまいました。

びっくりした彼女は、慌てて家の外に逃げだしたのですが、家族は取り残されてしまいました。近所の人が総出で消火活動にあたるのですが、手に負えず全焼してしまいました。

彼女は、近所の方々から「一人だけ取り残されてかわいそうに」という扱いを受けるのですが、自分では自分が原因ということがわかっていきますから、怖くて仕方ありません。

やっと鎮火した家から、家族の遺体が運び出されます。その黒焦げの遺体を見て、「私はこの姿を忘れてはいけません。自分は幸せになってはいけません。」と心に決めたのでした。さらにその印として、家族の焼けただれた遺体の姿を忘れないように、アトピーを持って生まれてきていたのでした。そして、自分が火をつけたということも、決して言うてはいけなかったのです。

前世でのアトピーの原因が分かり、彼女の家族の魂と対面をし、家族が自分を責めてないことを知って、自分を許すことができました。

そして、印としてのアトピーはもう自分には必要ではないことがわかり、手放すことを決めました。

一週間後のメールで、アトピーが半減したことと、漠然とした不安感がなくなったと報告がありました。

わがままな夫との関係

四八歳女性の場合

彼女はご主人のご相談にいらしゃいました。

「主人は躁病なんです。お酒と浪費、さらには暴言。注意しても全く聞く耳を持ちません。子供のことや仕事のことを相談しても、話し合いにもならず疲れ果てました。まるで駄々っ子の子のようです。何度も離婚を考えましたが、なかなか踏ん切りがつかず、今に至ってしまいました。」「今後どうしたらいいのかわかりません。子供も自立して離婚も考えているのですが、なかなか踏ん切りがつかなくて。」と悩みぬいた表情でした。

そのご主人との関係を知りたくて、ご相談においでになったのです。

【原因となっている前世】

その人生で、彼女は妻子ある男性と不倫関係にありました。罪悪感を感じながらも交際を続けているうちに、妊娠してしまったのです。誰にも相談できません。彼にも言うこともできません。彼に言うのと随胎するように言われそうです。

彼女は悩みに悩んだ末に、産むことを決心しました。誰にも内緒で病院で出産したのですが、産んではみたものの育てる自信がありません。怖くなった彼女は、赤ちゃんを置き去りにして、病院から逃げ出してしまったのです。彼女は罪悪感を抱えながら、一人で暮らしていました。もちろん恋人も作れません。

数年後のある時、我が子が施設に預けられていることを知りました。気になって施設まで行くのですが、名乗り出ることができません。

年月も過ぎ、大人になった我が子を時々町で見かけるのですが、いつも寂しそうに暗い表情をしています。経済的にも苦しそうな身なりで、家族もいないようです。

息子の姿を見かける度に、息子を捨ててしまった自分を責め続けます。そんな息子の姿を見かけるのが辛く、彼女は町を出ました。そして、知らない町で暮らすのですが、歳を取り一人寂しく亡くなったのです。

魂だけになった彼女は、元いた街に戻り息子を探し廻るのですが、息子は既に亡くなっていました。

魂だけになってさまよっている息子の魂と再会した彼女は、息子の魂に何度も謝りますが、息子は許してくれません。

ほとんど反応もなく、暗く無表情なのです。彼女は産むだけ産んで、何もできなかった自分を責め続けました。その息子が今のご主人だったので。

彼女は、前世の息子の魂を引き受けよう。そして、いつぱいわがまを聞いてあげようと思って、彼を夫として選んでいたのです。ご主人の躁病の原因がわかりました。彼女がご主人のわがまを許していたのです。

彼女が、ご主人の心残り、奥底にある悲しみに気づくことが出来たことで、ご主人の行動を以前より許すことが出来るようになり、それに伴ってご主人にも良い変化が起きてきたそうです。

前世からの思い込みに支配されている男性

すぐに嘘をついてしまう三六歳男性の場合

石井さん（仮名）は、すぐに嘘をついてしまう自分に嫌気がさしていました。つかなくていい嘘をとっさについてしまうのです。

私 「どんな時に嘘をついてしまうんですか？」

石井 「ほんとにどうでもいい嘘なんです。例えば会社で、昨日の休みは何をしていたの？とか聞かれると、本当は遊びに出かけたのに、昨日は一日中家でゴロゴロしていましたとか、昨日のテレビ面白かったよね？とか言われても、自分も見ているのに、見えないからわかりません、とかどうでもいいような嘘なんです。」

私 「確かにどうでもいい嘘ですよ。」

石井 「そうなんです。自分でもよくわからないです。そのたびに後悔して自分を責めるんです。信用もなくしてしまい、そうだし、何よりもそんな自分が嫌で仕方ないです。」

私 「そうなんですね。それはどうにかしたいですよ。ほかには何か気になることはありませんか？」

石井 「もう一つあります。もしかしたらこっちの方が大きいかもしれません。恋愛がなかなかうまくいかないんです。早く結婚したいと思ってるんですが、彼女とうまく行きかけると、自分でだめにしてしまうような行動をとってしまふんです。最近気づいたのですが、女性といい感じになり始めると、意味もなく約束を破ったり、またここでも嘘をついたりして、だめになってしまふパターンを繰り返しているんです。自分でもよくわからないんです。」

彼は自分でもよくわからない行動に戸惑っているようでした。話しの内容からすると、彼の奥底に「本当のことを言っではいけない」、あるいは「本当のことを知られてはいけない」という思考があるようです。さらには、恋愛を自ら潰してしまうということは「自分は幸せになっではいけない」、あるいは「結婚する資格がない」という思いもありそうです。

彼の場合も根底に強い罪悪感がありそうです。その罪悪感と思考パターンを作ってしまった原因となっている前世へと、誘導しました。

【原因となっている前世】

二〇〇年ほど前のヨーロッパの青年の人生が出てきました。彼にはとても仲のいい男友達と女友達がいました。三人はとても仲良しで三人でよく遊んでいたようです。

その前世でのある日の場面です。

私 「何が見えていますか？」

石井「私と彼女と二人で食事をしています。」

私「どんな気持ち？」

石井「とても楽しいです。」

私「そこで何かありましたか？」

石井「近くのバーのようなどころで酔っ払いの喧嘩が起きています。出てみると友達が五人の男たちに囲まれて袋叩きにあっています。」

私「あなたはどうしたの？」

石井「…気づいたときには遅くて、彼は死んでいました。」

私「男たちに殴り殺されたの？」

石井「そうみたいです。」

私「殺したのは誰だか分りますか？」

石井「知らない人たちです。」

私「どんな気持ちだった？」

石井「とても悲しいし悔しいです。彼女も泣いています。」

私 「その後どうしたの？」

石井 「彼女と二人で、友達の亡き骸を浜辺に埋葬して、お墓を作りました。」

私 「二人だけで吊ったの？」

石井 「……。そうです。すぐ近くにいたのに助けられなかったのが申し訳なくて、彼女と二人でお墓をつくってあげました。」

私 「その時の罪悪感を今まで引きずってきたの？」

石井 「そうです。」

ここまで読んで皆様はどう思われますか。確かに罪悪感をかかえるようになった原因ではありそうですが、何か不自然だとは思いませんか。

なぜ彼女と二人だけで友人の墓造ったのでしょうか。友人の家族や、知り合いや教会はどうしたのでしょうか。なぜほかの人たちには知らせずに、二人だけで埋葬したのでしょうか。疑問が残ります。そこで彼に質問をしていきました。

私 「なぜ二人だけで埋葬したの？ 彼の両親や教会はどうしたの？」

石井 「……親友だったから……。」

私 「彼には家族はいなかったの？」

石井「・・・わかりません。」

私「お墓の場所はほかの人たちには知らせましたか？　ほかの人もお参りに来てましたか？」

石井「・・・わかりません。」

だんだん答えが、しどろもどろになってきました。

私「大丈夫だから本当のことを言ってもいいよ。だれもあなたを罰したり責めたりする人はいないよ。大丈夫だから本当のことを言っごらん。」

石井「・・・。」

私「大丈夫だよ。神様だってあなたを罰しないし、救うことしか考えていないから心配しないでいいよ。」

石井「・・・。殺したかもしれない・・・。」

私「そうみたいだね。もう大丈夫だから詳しく話してごらん。」

石井(涙)「そうです。私が殺したようです。」

私「そうだったんだ。何があったの？」

石井(号泣)「友達が彼女を押し倒して乱暴しようとしていたんです。そこにたまたま出くわしたんです。」

私 「もしかして、あなたも友達も彼女のことが好きだった？」

石井 「そうです。彼女のことが好きでした。友達も好きだったと思います。」

私 「そうなんだ。その場面に出くわして、あなたはどうしたの？」

石井 「カッとなって、友達に飛びかかり殴り合いのけんかになりました。そして、近くにあったナイフで刺してしまっ
たんです。」

私 「彼はどうなったの？」

石井 「死んでしまいました。」(号泣)

私 「そうなんだ。そしてその後どうしたの？」

石井 「パニックになって、彼女と二人で浜に埋めました。」

私 「だから二人だけで埋めたんだ。だれにもばれなかった？」

石井 「ばれませんでした。」

私 「その後はどうしたの？」

石井 「彼女と結婚しました。しかし、友達を埋めたところが気になって仕方なくて、そこが見える場所に家を建てて、
彼女と暮らしました。」

私 「彼女は毎日どうしてた？」

石井「毎日苦しそうでした。ベランダに出ては彼を埋めた場所を眺めて、辛そうにしていました。」

私「その彼女を見て、あなたはどんな気持ちだった？」

石井「申し訳なくて、申し訳なくて……。私は彼女と結婚すべきではありませんでした。こんな自分が結婚してはいけなかったんです。(涙)」

私「そうなんだ。辛かったね。でももう大丈夫だからね。ところで、友達のこととは最後までばれなかったの？」

石井「ばれませんでした。」

私「しかし、いろんな人に友達のことを聞かれたでしょう？ その時はどうしたの？」

石井「その時に応じて色んな嘘をついてました。こう聞かれたら、こう答えようといつも考えてました。」

私「とっさに嘘をついてたんだね。」

石井「そうです。」

彼の嘘をつく理由、幸せを自分で潰してしまう理由がわかりました。過去の罪を知られてはいけけない。こんな自分が結婚したら、また奥さんを不幸にしてしまう。そう思って、嘘を繰り返していたのです。

彼は、前世に誘導されても無意識に嘘をついていました。それは、今の彼が嘘をついているのではないのです。前世の彼が準備していた嘘を、今の彼が無意識にしゃべっていたのです。ややこしいですが、前世に誘導された今の彼は、

「友人は五人の男に殺された」と思い込んでいるのです。つまり、セッションの中で今の彼も前世の自分に騙されていたのです。

彼の悩みであった、無意識に嘘をついてしまう本当の理由がわかりました。そして、もう今の人生で嘘をつく必要はないことを理解した彼は、二〇〇年もの間かかえていた罪悪感から解放され、とても明るい表情になりました。

このように、前世での思い込みや悪い習慣を引きずってきている典型的な例です。

それは、自己防衛からの行動ですから、その習慣をやめることに恐怖心があるのでしょう。彼の場合は、嘘をつくことは自分と彼女の身を守るために必要なことでした。さらに、彼女を苦しめてしまった自分には、結婚する資格はなかったのです。そう思い込んでいた彼は、幸せが目の前に近づいてくると、自分で潰していたのです。

しかし、それは過去のことであり、今はその必要がないということを理解した時に、今まで彼を悩ませていた悪癖から解放されたのです。

神様に対する恐怖心

三二歳、女性

彼女は極度の冷え性と漠然とした不安感、罪悪感に悩まされていました。夏場にもかかわらず、靴下を二枚履いて来られるほどの冷え性なのです。

さらには、いつも不安で、誰かに叱られているような強迫観念に潰されるような感じだということです。「前世で何か悪い事でもしたのでしょうか？」と少し怯えたような感じですよ。

【原因となっている前世】

カウンセリングによって、彼女の思考パターンを明らかにした後、原因となっている前世へと誘導しました。

そうすると、一六三八年に島原・天草地方で勃発した「島原の乱」の場面が出てきました。

「島原の乱」のことはご存知だと思いますので、ここでは簡単に述べさせていただきます。

江戸時代の初期、キリシタン禁教令の下にあった島原天草地方のキリシタンの人々が蜂起をし、原城に立てこもり、最後の抵抗しましたが、抵抗むなく幕府軍に全滅させられました。原城での犠牲者は三七〇〇〇人ともいわれています。

彼女は、そのキリシタンが立てこもった原城にいました。一七歳くらいのまだまだ若い女性です。

戦闘が激しくなり、幕府軍の総攻撃がはじまりました。目の前で仲間が次々と殺されていくのを見て、彼女は怖くなり、

「あんなひどい殺され方をするくらいならば自ら死のう」と、崖から海に飛び降りたのでした。

しかし、キリスト教では自殺は固く禁じられています。自殺をすると無限地獄に落ちると教えられています。それがわかった上で、さらになお自殺を選んだ彼女ですが、亡くなった後、魂だけになった時に、その教えを破ったことに強い恐怖心を抱いたのです。

「こんな私が天国に行けるわけではない。ましてや神様の前に出れるはずがない。神様の教えを破り、怒りをかっただけが、神様の所に行くとは無限地獄につき落とされる。」そう思って彼女は、海の底で動けなくなっていたのです。彼女の魂は冷たい海の底で、地縛霊になっていたのです。それが極度の冷え性と恐怖心の原因でした。

ここで不思議に思う方もいらっしゃるかもしれませんが、海の底で地縛霊になっている魂が、なぜ今生まれてきているの？と思われる方もいらっしゃるでしょう。私も当初は不思議に思っていました。

しかし、今までたくさん事例を見ると、魂は分裂をするようです。例えば、地縛霊になった一つの魂の一部が浄化をして、今ここに生まれ変わってきているが、残りの魂の一部は今でも地縛霊として、元いた場所に居続けている。分裂した地縛霊のままの魂と、今の自分はエネルギー的につながってまですから、地縛霊の恐怖心や不安感、その場所の寒さや冷たさが、今の自分に伝わってくる。どうもこんなことが起きているようです。

そこで彼女の場合、地縛霊である彼女の魂の一部を浄化し、今の彼女の魂と統合するという事をしました。その瞬間、彼女の冷え性と不安感は治りました。

更に彼女を光の世界に誘導すると、イエス様と対面することが出来ました。信じられないかもしれませんが、こう

いう事はよく起こります。いわゆるガイドや守護霊や守護神と言われる存在との対面です。

人によってそれがイエス様であったり、お釈迦様であったり、天使や女神様であったり、或いは光の存在であったりしますが、高次元の存在であることは間違いないようです。時にはご先祖様が現れることもあります。

彼女の場合はイエス様と対面することが出来ました。

しかし、彼女にとってのイエス様は信仰の対象であり、尊敬の対象であると同時に、自分を無限地獄に落とすかもしれない恐怖の対象でもあったのです。

ですから、イエス様と対面させようとすると、彼女は最初怖がつて躊躇しました。しかし、「大丈夫だからね、誰もあなたを罰する人はいないから。神様があなたを罰しようと思っっているなら、海の底にしようが、どこに隠れていようとつくに突き落とされているよ。今あなたが地獄に落とされてないということは、神様はあなたを罰しようとは思っていないことだよ。神様は決してあなたを罰しないし、どんな人のことも救うことしか考えてないから、心配いらないからね。大丈夫だから。」という私の言葉に安心したのか、イエス様との対面をする事が出来ました。

そして、イエス様の優しい笑顔を感じた瞬間、彼女の罪悪感と恐怖心は溶けはじめました。

「私は許してもらえますか？って聞いてごらん。」と私が言うと、彼女は小さな声でイエス様に話しかけます。

「私は許してもらえますか？」

「イエス様はなんとおっしゃった？」

「もちろん。最初から許されていると。」と泣きながら答えます。

この一言で彼女は全てから解放されました。

では、彼女はなぜ何百年も苦しむことになったのでしょうか。

それは、地獄に突き落とされるかもしれないという恐怖心からでした。今までたくさんのクライアント様のセッションをやってきましたが、どのようなことをやったとしても、地獄に落とされる魂はないようです。地獄は存在しないようです。

しかし、自分は地獄に落とされるかもしれないという恐怖心によって、成仏できなくなっている魂はたくさんいます。魂の故郷である光の世界に帰れば、神様から地獄に落とされると思い込んで、亡くなった場所から動けなくなってしまう魂は沢山いるようです。

前にも述べましたが、人間はさまざまな体験をするために生まれてきていますから、何かの失敗をしたところで地獄に落とされるということはないようです。失敗も大切な体験ですからね。失敗したからといって、罰せられる理由は見つかりません。

だからといって、悪いことをやってもいいというわけではありません。悪いことをすると当然いろんな問題が発生してきます。恨みや怒りも買います。そこに苦しみが生じます。地獄のような体験をすることにもなりかねません。地獄という場所は存在しませんが、地獄のような体験は存在します。自分の心が地獄を作り出してしまいます。ですから、やはり悪いことはしない方がいいでしょう。

それは、自殺にも言えます。自殺をしても地獄に落とされることはないようですが、しかしそのことによって大きな後悔をし、自分を責めるようです。そしてさらなる課題を自らに課して生まれてくることとなります。決して楽しい人生にはならないようです。

「楽しい人生を送ってはいけない」という思い込み

三四歳女性の場合

彼女は、「いつも不安でネガティブ思考で嫌になるのです。やりたいことも好きなことも思いつかず、ずっとトンネルの中をぐるぐる回っているような感じなんです。」と、沈んだ顔でご相談にいらつしやいました。

さらに、「いつも他人の顔色を伺って、くよくよしているんです。夫とも不仲続きで、いつもイライラして寂しいんです。」と、寂しそうに言われます。そして、「それとは関係ないのですが、左足が痛めた記憶は無いけども時々疼くんです。」とも言われます。

彼女の中にも、幸せになってはいけないという思い込みがありそうです。そして、左足の疼きも何か関係しているようです。そこに焦点を当てて、原因となっている前世に誘導しました。

【原因となっている前世】

彼女は二〇〇年ほど前のヨーロッパの男性でした。

三〇歳の頃、ある街で商売をやっていたのですが、なかなかうまくいかず、詐欺まがいのことをしていました。それがばれて、妻子を置いて町から逃げ出しました。実はその前も、他の街で詐欺を働き、前妻を置いて今の街に逃げてきていたのです。

逃げ出した彼は、詐欺や盗みをしながら逃げ回っていました。女の人も利用し、ヒモ状態になったりもしていました。そういう人生が、ずっとうまくいくはずがありません。四〇歳の頃、彼は馬車に轆かれ、左足の膝から下を切断してしまつたのです。瀕死の重傷から助かつた彼は、二番目の妻子に会いたさが募り、昔暮らした家の前まで行くのですが、合わせる顔がありません。

詐欺で蓄えたお金ではあるけれども、妻子の住む家の玄関にそっと置いて、足を引きずりながらまた旅にでました。その後、彼は今までの行いを反省し、一人寂しく暮らしていたのです。

「人のことを利用してはいけません。騙してはいけません。こんな自分は楽しんではいけません。償わなくてははいけません。そうでなければ、また一人ぼっちの寂しい人生になってしまう。」という思いの中で、一人寂しく亡くなっていました。

その前世の体験を引きずってきていた彼女は、楽しい人生を送っていませんでした。奥さんを騙し利用してしまつた自分は、今回の人生ではご主人から苦しめられる必要があつたのです。

実は、前世で置いてきた奥さんが、今のご主人だったので。

そして、前世の自分の行いを忘れないように、また同じ間違いをしないように、左足の痛みをその印としてもつて来ていたのでした。

原因が分かつた彼女は、自分を許すことができました。そして彼女にとって、今の結婚生活は自分を罰するためのものだったことに気づき、ご主人に対しても自分の思いをはっきり言えるようになりました。少しずつご夫婦の関係も改善し始めています。

発作的な寂しさと不安感に悩む女性の場合

二五才、女性の場合。

村田さん（仮名）は、いつも不安で寂しくて、その不安感や寂しさが何かのきっかけで、発作的に襲ってくるというのです。

彼女は、「私は家族にも恵まれてると思うし、皆優しくしてくれるのに、いつも寂しいんです。時々強烈な不安感と寂しさが発作的に突然襲ってくるんです。そんな時は、自分の部屋にこもって、雨戸を締め切って部屋を真っ暗にして、ベッドで布団を頭から被ってジツとしてると、少し落ち着くんです。自分でもおかしいと思うのですが、わけがわからないんです。」と不安そうな表情でご相談に來られました。

「真っ暗な中に一人にいる方が余計に寂しく不是吗？」と聞くと、「自分でも変だと思つのですが、その方が少し落ち着くんです」と言われます。

【原因となっている前世】

その寂しさと不安感の原因となっている前世へと誘導しました。

そうすると三〇〇年ほど前のヨーロッパの人生が出てきました。彼女はまだ五歳の少年です。前世では男の子でした。ある時、少年は友達と遊んでる最中に馬車に跳ねられ亡くなってしまいました。しかし、彼は自分が死んでしまったことに気づいていません。ですから、いつものようにお家に帰るのですが、その日からお父さんもお母さんも自分を突然無視するようになったのです。当然のことです。ご両親からは亡くなった彼の姿は見えません。

しかし、彼には意味がわかりません。昨日まであんなに可愛がってくれていたお父さんお母さんが、いきなり自分を

無視するのです。

何度声をかけても、叩こうが蹴ろうが相手にしてくれないのです。

寂しくてたまらない彼は友達の方に遊びに行きますが、そこでもだれも相手にしてくれません。寂しくて寂しくて仕方ありません。

そうこうする内に弟が産まれました。お父さんお母さんはとても喜び、弟を可愛がりますが、自分のことは無視したままです。さらに寂しさが募ります。

しかし、そういう状況の中でも、月に一度だけ皆でお出かけをすると自分に話しかけてくれるのです。そこに行くと「お利口さんに寝んねしてた？ 寂しくなかった？」と声をかけながら、おやつをくれます。

「また来るから、お利口さんに寝んねしてなさいね。」とまたお家に帰ってくる時無視が始まります。

それが何度も繰り返される内に「あ、ここにいれば話しかけてもらえるんだ。お母さんにお利口さんに寝んねしときなさいねと言われたから、ここで寝んねしてたら誉めてもらえるんだ。」

そう思った彼はそこに寝んねする事で安心するようになったのです。実は、そこは彼のお墓だったのです。

月に一度、お父さんお母さんは彼のお墓に来て優しく話しかけてくれます。彼にとっては唯一の楽しみです。しかし、次までの一ヶ月間は寂しさに耐えながら、真つ暗なお墓の中でジツと待ち続けなくてははいけません。

それでも二両親が生きている間は、お墓参りに来てくれるからいいのですが、当然二両親も亡くなります。もう誰も訪ねて来てくれません。しかし、お父さんお母さんに「お利口さんに寝んねしときなさいね」と言われたから、「寝んねしていたらいつか会いに来てくれる」と信じて三〇〇年間、真つ暗な中で待ち続けていたのです。ですから、今の彼女も真つ暗な中にジツとしていると少しだけ落ち着くのです。

強烈な寂しさと不安感の原因がわかりました。前世の彼に「もういいよ。光の世界に帰ろう。いつまでもそこにいらなくても良いよ。」と、彼の魂を光の世界に返してあげました。そして、今の彼女の魂と統合することで、寂しさと不安感
は消えました。

ここで大切なことは、「やっぱりお墓って大切なんだ。お墓参りをしないと、亡くなった方は成仏しないんだ。」と勘違いされることです。そうではないようです。彼は「両親の言葉で、逆にお墓に縛り付けられていたのです。」

「お利口さんに寝んねしときなさいね。」の一言で、彼は「ここに寝んねしてたら誉めてもらえるんだ。」と思ひ込んで、光の世界に帰れなくなってしまっていたのです。

死んだらお墓に入つて、子孫が供養してくれたら成仏出来ると思つている方は、亡くなった後間違ひなくお墓に行くでしょう。そして、子孫が手厚く供養してくれるのを待ちます。お墓を気にかけてくれる子孫がいればいいのですが、そうでなければ、いつまでたつても成仏できないということになってしまいます。

では、どこに問題があつたのでしょうか。供養をしてくれない子孫に問題があつたのでしょうか。少し違ふと思いませんか？ 問題は「お墓に入つて供養してもらわなければ・・・」と思ひ込んだ本人の勘違いにあるのです。

誰でも自分の意志で、いつでも光の世界に帰ることが出来ます。誰かの許可や力が必要なわけではありません。

「じゃあ、ほっといいいの？」と言われそうですが、そう言うわけでもありません。やっぱり亡くなった方も氣を向けてほしい。相手にされないのはやはり寂しいですよ。だから供養や祈りを捧げるのは、やるに越したことはありません。

お墓や仏壇に手を合わせ感謝を捧げることは、どんどんやつた方が良くと思います。

そしてその時には、「ここでゆっくりお休みくださいね。」というのは、やめたほうがよさそうです。下手をするといつまでもそこに居続けることになります。そうではなくて「もし此処にまだとどまっているご先祖様がいらつしやるのならば、光の中に帰りましょう。いつまでも此処にとどまらなくても良いですよ。光の中でゆっくりお休み下さいね。」と声をかけるのが良いかもしれませんね。

あえて誤解を恐れずに言わせていただければ、間違った宗教観で逆に成仏出来なくなっている魂が、沢山いらつしやるようです。

例えば先の事例でもありました、自殺をしたキリシタンの女性の方もそうです。

彼女は「自殺したら無限地獄に堕ちる。」と信じていたのです。ですから、深く冷たい海の底から出れなくなつて、自縛霊になつていたのです。

今まで三千人ほどのセッションを行い、一人当たり三〜五個の前世を明らかにしてきました。つまり一万以上の前世を見てきましたが、一人として地獄に堕ちた人はいません。自殺をしたとしてもです。自殺の場面は時々出てきますが、地獄には堕ちてないようです。というか、地獄は存在しないようです。

前にも述べましたが、では自殺していいのかというと、そういうわけでもなさそうです。やはり自殺するからにはそれなりの理由があり、地獄のような体験苦しみを味わうことになります。地獄が存在するわけではないのですが、地獄のような体験を自ら創造する事になる場合が多いようです。

そして次の人生で自らに更に大きな課題を課して生まれてくるようです。

どうせ、しなくちやいけない課題なら、自殺などやめて、大きくなる前に今のうちに済ませた方が良さそうです。

不安確認症の男性

三五歳、男性の場合。

本田さん（仮名）は家を出るときに、何度も鍵の確認や、ガスの元栓の確認をしないと、不安でしようがないのです。一度考え始めると、一旦家を出てもまた家に戻って確認を繰り返すほどでした。ドアを閉める時も、しつかり閉まっているか何度も確認しなければいけないのです。それが最近では仕事にも悪影響を及ぼし始めていました。

「いつからそのような症状が出ましたか？」と私が聞くと、「五年ほど前、電車に乗ろうとして、券売機で切符を買った瞬間、ホームに電車が入ってきました。慌てて改札を通ろうとした時に、胸ポケットに入れていた携帯電話がブルツとなったんです。その瞬間、あれ？お釣りを取ったかな？と思い、確認しなくちゃいけないかと思ったと思い始めて、そこかなんでも確認しなくちゃと思う思いが強くなったみたいです。」と言われます。

胸ポケットに入れていた携帯電話の振動が、何かの古い記憶を呼び起したようです。その原因を探りました。

【原因となっている前世】

前世へと誘導していくと、旧日本陸軍の場面が出てきました。そこは南方の戦場です。彼には五〇人ほどの部下がいました。

145
ある時、敵であるアメリカ兵を待ち伏せするために、部下に塹壕（身を隠し待ち伏せするための縦穴）を掘らせていました。自分は見張りと指揮を兼ねて、高台からその様子を見ていました。そうしていると、遠くに敵兵が来るのが見え

ます。戦車も見えます。しかしまだ、味方には準備が整っていません。部下に撤退するように命じるのですが、部下はそれを聞かず、戦うと言います。そうこうするうちに、戦闘が始まってしまいました。激しい戦闘です。

準備も不完全であった部下達は、健闘むなく全滅してしまいました。そして、自分だけが生き残ってしまったのです。

彼は一人生き残ってしまった自分を責めました。そして一人で復讐することを誓ったのです。本隊には戻らず、ジャングルの中で一人でゲリラ戦をやりました。何人かの敵兵を殺すことができたのですが、まだ気は収まりません。そして、敵の指揮官を殺そうと決意をしたのです。

そこで彼は、敵の基地の指揮官の部屋に忍び込んで、指揮官を殺そうと思いついたのです。そして、真夜中にそれを決行しました。まんまと指揮官の部屋に忍び込んで、彼を殺すことに成功したのです。

しかし、敵を討った彼は、目的を達し油断をしてしまいました。無造作にドアを開けてしまったのです。ドアの向こうには、異変に気づいた敵兵がいたのでした。そして彼は、心臓を撃ち抜かれてしまったのです。

そのとき彼は、「確認しなければいけなかった。油断してはいけなかった。」と強く思いながら死んでいったのです。五年前に、改札を通ろうとした時に、胸ポケットの携帯がブルツとなった時、前世でドアを開いた瞬間、胸を打ち抜かれた感覚が蘇り、「確認しなければいけなかった」という思いが蘇ったのです。

確認症の原因が分かりました。今はもう確認しなくても殺されることはないということがわかって、彼の確認症は快方に向かいました。

離婚した元夫との関係

四五歳女性の場合、

彼女は三人のお子さんを持つシングルマザーです。

彼女がセッションを受ける動機は、少し変わっていつて、「私は三人目の子供がお腹に入ったと分かったと同時に、元旦那と別れました。その時に、自分でもなぜこのタイミングで別れるんだろうと思っただけです。というか、別れるつもりだったのに、なぜ三人目の子供がこのタイミングでできたんだろう。そんな感覚でした。

しかし、特別に元旦那と仲が悪かったわけでもなく、狭い街ですから時々顔を合わせますし、時には一緒に食事もしたりします。養育費ももらう約束をしています。時々もらえないこともあります。しかしそれを特別に恨むわけでもなく、何か不思議な感覚なのです。なぜこうなっているのか、理由を知りたいのです。」ということでした。

彼女に限らず、夫婦になるということは、生まれる前に何か約束をしているはず。その約束の理由となった出来事を、明らかにしていこうという方針で、前世に誘導していきました。

【原因となっている前世】

二〇〇年前のヨーロッパの人生がでてきました。

彼女は三人のお子さんがある、五人家族のお母さんです。今の家族構成と全く同じでした。とても仲の良い幸せな家族のようです。しかし、彼女はその時のご主人が大好きで大好きでたまらず、子供は二の次という感じのご夫婦でした。

しかし、幸せな家族生活も束の間、大好きなご主人が徴兵され、戦場に行くことになってしまったのです。そのこと

で彼女はとても落ち込んでしまいました。そうして約一年後、ご主人は戦死してしまったのです。

大好きで大好きでたまらないご主人を亡くした彼女は、とても落ち込んでしまい、ウツになってしまいました。家事も全く手につかず、子供の世話もできなくなってしまったのです。その状態が一年ほど続き、結局彼女は衰弱して亡くなってしまったのです。

残された子供たちは、誰も面倒を見てくれる人もなく、可哀想なことに三人とも餓死してしまいました。

魂だけになった彼女は、残してきた子供たちのその後の姿を見て、とても後悔をして自分を責め続けました。「私は自分のことしか考えていなかった。子供たちに、あんなに辛く苦しい思いをさせて、なんて身勝手な母だったんだろう。」

そして、「次に生まれ変わる時には、あの子たちは自分の手でしっかり育てあげよう。あんな辛い思いを二度とさせないようにしよう。」そう思っただけで生まれ変わって生きていたのです。

しかし、同じ三人の子供を産むには、同じ旦那さんが必要です。でも、大好きな旦那さんがずっとそばにいと、また子供たちをないがしろにしてしまうかもしれない。辛い思いをさせるかもしれない。そう思っただけで、生まれてくる前にご主人をお願いしていたのです。

「あの三人の子供たちを、私の力で育て上げたい。だから、同じ子供たちを私にちょうだい。しかし、あなたがそばにいとまた同じ失敗をするかもしれないから、子供ができたら私のそばから離れてちょうだい。」とお願いをしていたのです。それを思い出した瞬間、全ての謎が解け、心から安堵した表情でした。

「やっとわかった。納得しました。」と言う彼女。

「もう理由がわかったから、意地を張って一人で育て上げることもないんじゃないの。お子さんたちもそれを望んでると思えないけど。」と私が言うと「そうですね。よりを戻そうかな。」と、とても穏やかな表情でおっしゃってまし

た。

不登校のお子様二例

鈴木さんの場合。

彼女のご相談の内容は、高校二年生の息子さんが、不登校になったということです。

中学生の頃までは、元気に登校し、どちらかというとリーダー的な存在であった息子さんが、急に不登校になって戸惑っていらつしやいました。

普通ならば、息子さんのセッションをお願いされる方が多いのですが、鈴木さんは「私が変われば息子は変わります。だから、私がセッションを受けます。」ということでした。

私もそれをお勧めしますと予約をお受けいたしました。

ここで問題なのは、普通息子が学校に行けなくなった、あるいは家を出られなくなったと思われる方が多いのですが、そうではありません。

人間の魂は完璧ですから「できない」という事はあり得ません。

「できない」のではなく、「してはいけない」と思っている場合が多いのです。

話は少しそれますが、よく「私にはわからない」「私にはできない」「私は人前でしゃべれない」「私は思い出せない」と言われることが多いのですが、そう思い込んでいるだけのことで、実は違うのです。

「わからない、できない、思い出せない。」ではなくて、「わかってはいけない。できてはいけない。思い出してはい

けない。しゃべってはいけない。」と深層心理では思っているのです。

「わからない。できない。」という消極的な動機ではなくて、「わかってはいけない。できてはいけない。」という積極的な動機なのです。

そういう積極的な動機ですから、「わかってもいい。やってもいいんだ。思い出しても良い。喋ってもいい。」と思つた瞬間、できるようになるのです。そこには努力は必要ありません。

ですから、鈴木さんの息子さんの場合もそうなのです。

「学校に行けない。家を出られない。」ではなくて、「学校に行つてはいけない。家を出てはいけない。」と深層心理では思っているはずなのです。

ではなぜ「家を出てはいけない。」と思つてしまったのか。そう思い込んでしまった何かの体験があつたはずです。さらにそれは、とても重要な出来事であつたと思われまますから、お母さんである鈴木さんも、その出来事に関わつていた可能性が高いのです。親子として生まれてきている事実がそれを物語っています。

そこに焦点を当てて、前世へと導くと、予想通りに原因となつてい人生が出てきました。

【原因となつている前世】

鈴木さんは、前世でとても能力の高い巫女さんでした。二〇人程の弟子を抱えていました。その弟子の中に、その人の娘がいました。その娘もとても能力の高い巫女さんで、異彩を放つていたようです。

昔の巫女さんは、今の巫女さんとはイメージが違って、霊能力を持っていたり、予知能力を持った人もたくさんいたようです。その能力を使って、いろんな人の相談に乗っていたようです。そういう場面は、他のクライアントさんから

もたくさん出てきています。

前世での鈴木さんとその娘さんも、とても高い能力を持った巫女さんだったのです。

しかし、そのような特別な能力を持った巫女さんは、権力者からも目をつけられ、悪用される危険もあります。前世での鈴木さんと娘さんも例外ではなく、土地の権力者から目をつけられ、彼女たちの能力を権力者の都合のいいように使うよう圧力をかけられ始めました。

しかし彼女たちはそれを拒否したのです。でも権力者は諦めようとはせず、一番能力の高い鈴木さんの娘さんを差し出すように命じたのでした。当然それを拒否した鈴木さんたちは、皆殺しになってしまいました。その時の娘さんが、今の息子さんだったのです。

鈴木さんはその時に「娘（今の息子）を守らなくてはいけない。人目につかないようにしなくてはいけない。」と思ったのです。そして鈴木さんの前世の娘（今の息子）は、「自分は人の目についてはいけない。見つかるもまたみんなが大変な目に会う。見つかつてはいけない。」と思いつんでいたのでした。

息子さんの不登校の原因がわかりました。鈴木さんも息子さんも、みんなを守ろうとしていたのでした。だから、家から出てはいけなかったのです。

原因がわかり、鈴木さんを通じて息子さんの魂の癒しを行いました。数日後、彼は家を出ることができるようになり、リースクールに通い始め、見事に有名大学に合格しました。

河村さんの場合。

河村さんも、中二の息子さんが不登校になってしまいました。

当初は息子さんにセツシヨン受けさせたいということだったのですが、お電話でお話をしていくうちに、お母様である河村さん自身がセツシヨンにおいてになりました。

鈴木さんの事例でもありましたように、息子さんも「家から出ちゃいけない。」と知っている可能性が高いと思われるので、そこに焦点を当ててお母様を前世へと誘導しました。

【原因となっている前世】

三〇〇年ほど前のヨーロッパの人生がでてきました。子供二人を抱えた幸せな家庭の風景でした。河村さんはその家族のお母さんで、ご主人ともとても仲が良く、とても幸せそうな家族です。

ある時、ご主人が仕事で一晩家を開けた時がありました。そして、その夜に強盗が押し入ってきたのです。お母さんである河村さんと幼い子供二人は、残念なことにその強盗に殺されてしまいました。

翌日帰ってきたご主人は、家族の無残な姿を見て、とても悲しみ茫然自失の状態になってしまいました。そして、家族を守れなかった自分を責め続けたのです。一人残された彼は、人との交流を断ち山奥で一人寂しい人生を送りました。

そのご主人が今の息子さんだったのです。息子さん（前世のご主人）は「家を空けてはいけない。妻（今の母親）を守らなくてははいけない。」と生きていたのです。だから家を出てはいけないかったのです。

彼の場合も、お母様を通じて魂レベルの癒しができました。

その後、完全な回復とまではいきませんが、週に何度かは学校に行けるようになりました。

引きこもり、リストカットの娘さん

前の二つの事例とは、違うパターンの不登校や引きこもりの例もあります。実は、こっちの方が実際には多いようです。親御さんのネガティブな価値観が、不登校を作り出し出している場合です。

まず、「子供の問題は家庭の在り方の問題」にありそうです。そして、その家庭を作ってきたのは、親御さん自身であるという事を考えて頂きたいと思います。

そういう環境を作った家庭があるという事に気付かなくてはいけないようです。「この家庭には問題がある」。子供はそれを教えてくれているだけなのです。

全ての人が毎日元気でイキイキとした、幸せな人生を送りたいと思っています。問題を抱えている子供もそうなのです。子供自身は変わりたい、元気になりたい、イキイキとした人生、心から充実した人生を送りたいと間違いなく思っています。しかし、それが出来ない環境があるという事なのです。それに気づいていない親がいるということなのです。

「それは単なる甘えだ！」と言うこともできますが、それで問題が解決するのであれば、それでいいのですが、果たしてそうなのでしょうか？

ではその原因とは何か。それは、親御さんの社会に対する心配や不安感や恐怖心に原因がある場合が多いのです。ですから、子供に対して「世の中って大変なんだよ。社会って怖い人が沢山いるんだよ。だからしっかりしなきゃいけないんだよ。負けないようにしなくちゃいけないんだよ！ 人生って修行なんだよ！」というメッセージを、常に与えて

いる方がいらっしやいます。

そう言われた子供はどう思うでしょう？

「世の中って怖いんだ。大変な所なんだ。だから、しっかりとしなきゃいけないんだ。いっぱい修行しなくちゃいけないんだ。」と思いますよね。

「家を出るときは完全武装しなきゃ。みんなにやられないように良い子でいなきゃ。ヨロイをいっぱい着けなくちゃ。」となって、家を出るだけで大変です。

しかし、小さい頃はまだいいのですが、中学生くらいになると疲れ果ててしまいます。そして、怖くて出ていけなくなってしまっている場合が沢山あります。そうすると、さらに輪をかけて、「そんな弱いことでどうするの！ そんなんじゃ社会に通用しないんだよ！」と脅してしまいます。ますます不安になって、出ていけなくなつて当然ですよ。

では、どこに問題があったのでしょうか。子供に問題があったのでしょうか。そうではありませんよね。それは親御さんの中に元々あった不安感や恐怖心の原因があったのです。子供はそれに振り回されているだけなんです。

その状況の中でお子さんのセッションをしても、それは親御さんの不安感からの要望であつて、本質的な解決にはならないのです。

ただそれは、お子さんを変えることで、自分の不安感を誤魔化そうとしているに過ぎません。お子さんに「あなたが変わつて、お母さんを安心させて！」と言っているようなものです。言っている方向が違います。お子さんの問題を解決するためには、まず親御さんの恐怖心や不安感を、解消するのが先になって来るのです。

もしお子さんが変わろうとしても、それを受け入れる環境が変わっていないければ、また同じことの繰り返しになってしまうし、さらに子供は苦しんでいくことになります。

子供に心から安心感を与えることができる自分。自分や子供を、そして全てを信じていることができる自分。人生を楽しむことができる自分に親が変われば、お子さんは「世の中って楽しいんだ！ 素晴らしい所なんだ！ 人生って楽しいんだ！」と喜んで行動を起こすでしょう。楽しい、喜びに満ちた人生を歩くことが出来るでしょう。

ですから、お子様を変えようとするのではなく、その親御さんご自身、特にお母様がセッションを受けられることをお勧めします。それは家庭の中心はお母様だからです。お母様が変わるとお子さんは劇的に変化をします。

もちろん親ですから、お子さんのことを心から心配し、元気になって欲しい、立派な大人になって欲しい、と願ってらっしゃるのはよく分かります。しかし、親御さん自身のお子さんに対する期待や、こういう子供になって欲しいという願望が、お子さんをつぶしてしまっているという事に気付いて欲しいのです。殆どの方が、自分の理想像をお子さんに押し付けて、そうならないからといって悩み不安になり、またそれを更にお子さんに押し付けることによって、悪循環に入っています。それは親が持つ不安感からきているのです。

全ての人が、どのようにしたら、自分は幸せになれるのかをちゃんと分かっています。そして、その計画をちゃんと持って生まれて来ている。もちろん子供たちもそうなのです。しかし、周りの大人がそれを否定してしまうから、自分を見失い、問題行動を起こしていくのです。「お父さんやお母さんの価値観では、自分は幸せにはなれない！」と抵抗しているのです。

しかし、「何でも思うまま、自分勝手にやらせていい。」と言っているわけではありません。社会の基本的なルールや礼儀、思いやりの心などは教える必要があります。しかし、生き方そのものに関しては、本人に介入しない方が良いでしょう。その純粹さを汚してはいけません。

全てをそのまま受け止めてあげれば、お子さんは心から安心し、自由に生きることが出来ます。事の善悪もすっかり判断できます。心から安心できる場所があれば、外でどんな辛いことがあっても耐えられるのです。

全てを受け入れてもらえる、心から安心できる場所を作ってあげてください。その場所は、まぎれもなく家庭であり、ご両親なのです。

そしてそれは、口先だけ、形だけを取り繕っても全く意味がありません。親御さん自身が本心からそれが出来るかどうかには掛っています。親御さん自身が、本当の幸せに向かって生きられるかどうかなのです。周りの価値観や、周りの評価で自分の幸せをはかるのではなく、家族の笑顔や、心の奥底で感じるしみじみとした幸福感を、あなた自身が得られるかどうかなのです。それが子供に伝わるのです。

あなたは、あなたのご両親との関係はどうでしたか？ うまくいってましたか？ 寂しい思いや、悲しい思い、悔しい思いはしてきていませんか？ あなたがご両親に感じていた感情を、お子さんは同じように表現していませんか？

あるいは、あなたが母親であるならば、ご主人に対してはどうですか？ 心から信頼できていますか？ 甘えることや相談はできますか？

もしそれが出来ていないとすれば、あなたが子供の頃、お父さんやお母さんに対してはどうでしたか？

あなたがご主人に感じている感情を、子供の頃にご両親に感じていませんか？ そして、それをそのままお子さんは、あなたに同じように表現していませんか？

よく考えてください。思い起こしてください。あなたの心の中の思いや感情が、そのままお子さんに反映されているはずで、子供の魂は、親に大切なことを気づかせるために、我が身を犠牲にしても教えようとしています。親のネガティブな部分、間違った部分をそのままの形で見せてくれるのです。演じてくれるのです。子供は親の鏡なのです。どう

か、そこに気づいてください。

あなたが変われば、周りも変わります。お子さんは必ず変わります。苦しんでいるお子さんをぜひ助けてあげてください。そしてあなた自身が本当に大切なものに気づき、人生を豊かで幸せに満ちたものにしてください。必ずそれは手に入ります。

ではここで、親御さんご自身の寂しさや不安感が、お子さんに影響を与えていたことに気づかれた事例を紹介します。

森田さんの場合。

森田さん(仮名)は四人姉妹のお母様です。その四人の娘さんのうちの一番下のお子様は、中学生のころから不登校、そして高校一年で中退。その後は拒食症の上、リストカットを繰り返すという状態でした。

もちろん森田さんは、お子様に心療内科やカウンセリングを受けさせましたが、何の改善の道も見えてきませんでした。

一方、ご主人はとてもワンマンな方で、全てにおいて自分の考えを押し付けるような方でした。それに反発でもしよものなら、さらに輪をかけて怒鳴り散らすような事を、ずっと繰り返していたのです。当然お子さんはそれに反発し、家の中はいつもピリピリした雰囲気だったそうです。

森田さんにしてみれば、そのようなご主人と娘さん達の間に入って、自分は一生懸命やっていたのですが、もうどうにもならないところまで来ていたのです。そのような状況の中で、当方のセッションを受けられた方からのご紹介で、お電話があったのです。

森田さんは当然、娘さんご本人にセッションを受けさせようと思ってお電話をされたのですが、お母様である森田さ

んご自身が受けられることをお勧めしました。森田さんにしてみれば、自分は夫と娘の間に入って、やれるだけのこと
はやってきた、という思いがありますから、「なぜ私が？」と思われたようですが、一縷の望みを託して、ご自身がセッ
ションを受けに來られました。

以下は森田さんのセッションの簡単な内容です。

当日、セッションを進めていくうちに、森田さんの中の様々な感情が明らかになっていきました。森田さんは子供の頃、五人兄弟の中の四番目で、共働きで忙しいご両親の元で、甘えることもできず、いつも「忙しいお父さんやお母さんに、心配をかけないように、邪魔にならないように良い子でいよう・・」と寂しさを押し隠し、いい子を演じてきていたのです。その寂しさを紛らわすために、いつも一人でお母さんの絵を描いていました。

描いた絵を叔母さんに見せると、とても誉めてくれるから嬉しかったのですが、それをお母さんに見せることはできませんでした。「お母さんは忙しいから、どうせ私のことなんか相手にしてくれない。邪魔にならないようにしなくちゃ。」という思い込みの中で、じつと我慢していたのです。いつも一人で遊んでいたのです。

彼女にとつては、その寂しさが当たり前だったのです。自分の気持ちなど、誰にも分かってもらえないと思
い込んでいたことに、自分でも気づいていませんでした。彼女にとっては、それが当たり前のことだと思っていたので
す。子供の頃のさまざまな思いがよみがえり、涙が止まりません。

そして、さらに前世へと誘導していきます。

三〇〇年ほど前の、日本の人生がでてきました。彼女は、四大家族の長女でした。下にはかわいい妹がいます。ある
時、妹の火遊びが原因で家が全焼してしまいました。全ての財産をなくした一家は、以前のような暮らしができなくな
ったのです。小さい妹に何もできるわけがなく、姉である彼女が住み込みの奉公に出なくてはいけませんでした。

その一人ぼっちの寂しさの中で、やっと最愛の人と結婚をし（その時のご主人が今のご主人）、そして一人娘をもうけ（この子が現在の四女）、やっと幸せな生活が手に入りました。

しかし、その幸せも長続きはせず、ご主人が病死してしまつたのです。また寂しい生活に逆戻りした彼女は、その寂しさの中で病気になる、幼い娘を残して亡くなつてしまいました。当然、幼くして両親を亡くしてしまつた前世の娘（今の四女）も、寂しい人生を送ることになります。

その寂しさを森田さんも娘も、今の人生にずっと引きずつて来ていたのです。そして、お互いにその寂しさを埋めてくれることを周りに求めているのですが、「自分の寂しさなど誰も分かってくれはるはずがない」という諦めの中で、人の思いに気付くことができなくなつていたのでした。しかし、前世の出来事を思い出したことで、一人残された娘の寂しさに気づくことができたのです。そこに気づいた彼女は、ずっと泣き続けていました。そうすることで、彼女の奥底に抱えていた寂しさや怒りを、解放することができたのでした。

このような、彼女の幼少期の家庭環境や、前世の体験や彼女の思考パターンから、森田さん一家の共通の課題として、「分かつてもらえない寂しさ」が根底にあることが伺えます。当然その寂しさは、ご主人にもあるはずですが、それが、お互い「分かり合えない」という、大きな原因の一つになっていると思われまます。

そこで、彼女をご主人の幼少時代へと誘導しました。不思議に思われるかもしれませんが、深い催眠状態に入ると、意識が時空を超えてしまいますので、時には自分が知るはずもない場所や時を見ることも可能になります。高次元の存在や、亡くなった方の魂と会話ができたり、時には未来へ行くことができたりするのも同じ理屈です。

私 「子供の頃のご主人の姿が見えますか？」

森田 「はい。部屋の隅で、六歳くらいの男の子が座って何かしています。」

私 「その子が、子供の頃のご主人ですか？」

森田 「そのようです。」

私 「その子は座って何をしているの？」

森田 「何か絵を描いているようです。」

私 「何の絵を描いているのかな？」

森田 「ちょっと待ってください。・・・飛行機の絵のようです。」

私 「飛行機の絵を描いているんだ。楽しそうにしてる？」

森田 「いえ、寂しそうです。」

私 「寂しそうに描いているんだ。その絵は、どうするのかな？ 誰かに見せるのかな？」

森田 「誰に見せるわけでもなさそうです。ただ、寂しさを紛らわせるために描いているようです。」（涙）

私 「そうなんだ。あなたと同じだね。」

森田 「ほんとにそうです。私と全く同じです。」（号泣）

私 「ご主人も、寂しさを誰かにわかって欲しかったんだね。」

森田「そうみたいです。」

私「では、子供の頃のご主人をどうしてあげたい？」

森田「抱き締めてあげたいです。」

私「では、そうしてごらん。」

森田「はい。」(涙)

そうだったのです。森田さんの家族は、それぞれが「自分の寂しさなどわかってもらえない」という思い込みの中にいたのです。それがわかった彼女は、自分の寂しさを癒すことができ、さらには、ご主人も受け入れ許すことができたのです。そのことよって、ご主人と娘さんとの関係も劇的に改善し、娘さんの拒食症も治り、今では以前の状況が嘘のように、とても明るい家庭を取り戻すことができました。

以下は、その森田さんからの一週間後の報告メールです。

こんにちは。森田です。

セッションを受けて一週間、受けた日から劇的に変わりました。私自身、心の平安ってこういう事なんだ。幸せってこういう事なんだ、と実感出来ました。本当に私が変われば、周りのみんなが変わりました。

退行催眠で夫が寂しそうに飛行機の絵を描いていた事を、夫に話した瞬間、夫は号泣！「どうして俺が忘れてた事まで分かったの？ 小さい頃俺は飛行機の絵ばかり描いていた」と。あんなに泣いて私に弱い自分を見せた事は初めてでした。私も夫も全く同じ寂しい子供だった。

先生から「あなたたちは、一番分り合えるんだよ」と言われたのは本当でした。素直に、夫に「今まで辛い思いさせてごめんなさい」と言えませんでした。娘たちにも「寂しい思いさせてごめんね」と言って、抱き合って泣きました。

今まで家の中が暗くて重かったのが、霧が晴れたように明るく、みんな笑顔で暮らしています。みんながイライラして、棘のある言葉で相手を攻撃していたのが、つい最近の事だったなんて嘘みたいです。

五日前、夫は脑梗塞で入院しました。少し左手の麻痺はありますが、夫は「一度に幸せと不幸な出来事が起きたけど、今とても心が軽い。幸せの方が何倍も勝っている」と言います。私にはいつも暖かい黄色い光が守ってくれています。だからどんな事があっても大丈夫。

先生、本当にありがとうございます。

以上

更に一ヶ月半後の報告です。

先生のセッションから、一ヶ月半が経ちました。幸せな毎日が続いています。

先生に予約のお電話をして、娘の状況を聞いていただいた時、先生は、「これは、お母さんの問題だから、お母さんが来てください」とおっしゃいました。

私は、母親として出来る限りのことをやって来たし、私は間違ったことはしていない自信がありました。だから、先生が、「お母さんの問題だ」とおっしゃった意味が理解できませんでした。

でも、その頃家族全員が限界に来ていて娘を連れて夫と別れるしかないと考えていましたから、最後の最後に先生に賭けてみよう、信じてみようと思いました。

しかし、先生とお電話で話しをした日から、少しずつ変化が見えて来たのです。食事を摂らなかつた娘が、少しです

が食べるようになりました。先生と電話で話したことは、もちろん一言も話していません。

娘（M子）は、中二で不登校になり、頑張れない自分はダメで、父親からも、頑張れないお前はダメだというメッセー지를与えられ続けていました。せつかく入った高校も一年の二学期に中退し、その上拒食症になり、一ヶ月で一二キロも痩せてしまいました。

もうその頃は、父親から声をかけられるだけで、キレるという状況でした。娘が反抗すれば、父親はそれに対して怒鳴る。その後はリストカット……。そんな日々が続きました。

夫と何度も話し合いましたが、何も変わりませんでした。ある日、娘が、「私は、お父さんを冷静に刺すことが出来る。お父さんを殺すか、私が死ぬかどっちか……。」と言った事がありました。そうなったら家族は地獄です。もう、夫と別れるしかないと考えていたのです。

そんな状態だった父と娘が、今は、本当に信じられないくらい普通の会話をしています。先日の日曜日は、二人でショッピングです！ お父さんに洋服を買ってもらってニコニコです！ 信じられないかもしれませんが事実です。

先生のセッションを受けたその日から、本当に劇的に変わっていききました！

前回は報告しましたように、セッションを受けた二日後、夫が脳梗塞で入院。その朝夫からのメールです。

『今、国立病院に来ている。朝、M子に「おはよう」と言ったら小さな声で返事があった。昨日夫婦で話し合ったことを、「今までごめんね」と話ししていたら涙が出てきた。病院に着くまで、子どものことやあなたのことを考えていたら、急にまた涙が出てきた。』

人生いろんな人に生かされているんだとしみじみ感じた。本当に大切なことは何かがわかった。

今、脳神経外科の待合室にいる。身体は検査してみないと分からないけど、気持ちは軽い。幸せな気分。二人で協力してみんなで幸せになろうね。』

今では、私たち夫婦も本当にお互いを必要としています。夫に言わせると、私が先生の所に行った日が、二回目の結婚式だそうです。二ヶ月前はこんな幸せな日々が来るとは夢にも思っていませんでした。先生の所に行つて、体験して分かりました。「それはお母さんの問題です」の意味が。先生を信じて本当によかった。

以上

森田さん一家に、忘れかけていた笑顔が戻ってきました。沢山の苦しみや悲しみの中から、とても大切なものを皆さん手にいれることが出来たのです。それは何物にも変えがたい、しみじみとした幸せです。情です。

森田さんご自身も、ご主人も、娘さん達も、何回もの転生の中で抱えてきた苦しみや悲しみを、「みんなと一緒に乗り越えようね。今回の人生で、またみんなで学びあおうね。そして、今度こそは最高の幸せをみんなでつかもうね。」と約束されてきたのでしょうか。

その御家族の中心である、母となることを選ばれた森田さんの勇気と、それを信じ、またここで出会うことを選ばれたご家族の絆に感銘を受けます。

皆さんのご家族や、全ての方々はこの絆があります。例外はありません。

ウツの原因

話は変わりますが、不登校やひきこもり以上に、ウツで悩んでいる方が沢山いらつしやいます。当方にもウツの御相談で沢山の方がいらつしやいます。

ウツの原因にはいろいろありそうです。真面目すぎる方や完璧主義の方、プライドにこだわっている方や、中には単なるわがままという方もいらつしやいます。しかし、その根底に共通するものは、古い価値観から新しい価値観への転換点に来ているということです。

今までの事例のように、皆さん間違いなく幸せと成長を願って、頑張ったり努力をしたりしているのですが、その方向性が少しずれている場合に悩みが発生するようです。

頑張ることや努力することは素晴らしいことです。そして、その努力によってただ自分を高めたい、皆を笑顔にしたというのであれば、それは叶っていくでしょう。しかし、周りの評価を得ることや比較をすることで、幸せを得ようとしている努力であれば、少し意味合いが違ってきます。

それはプライドにも言えそうです。プライドが高いということは、周りの人よりも優位に立つことによって、幸せになろうとしているのでしょう。ここでも、周りの評価や比較によって幸せを得ようとしています。いずれも同じことです。

中には、自己犠牲や償いによって、あるいは物やお金で自分の価値や幸せを量ろうとする人も沢山います。そうすることで、幸せな人生が手に入ると教え込まれてきているのです。あなたはどうか？

多くの人は、それを信じて頑張ってきたのですが、奥底では何か違うのではないかと気づきはじめています。しかし、長い間その価値基準で幸せなれると信じてきていますから、捨てることはできません。その価値観を捨てることは、今までの自分をすべて否定することになりそうで、怖くてできないのです。しかし、どんな価値基準で生きていけばいいのかもわかりません。

例えると、古いお茶に満たされたコップのようなものです。そのお茶でコップを満たすことで幸せになれると信じてきたのですが、どうも違うようだと感じてきています。しかし、せっかく溜めたお茶を捨てることはできません。全てがなくなりそうなのです。でも、コップの中に古いお茶が入ったままでは、新しい綺麗な水を入れることは出来ません。一旦お茶を捨てなければいけません。古いお茶の中に、新しい水を入れても、なかなか綺麗にはならないのです。しかし、殆どの方がそれに抵抗しようとしません。

あなたの魂レベルでは、実はわかっているのですが、あなたの表層意識が抵抗しているのです。でも、実際に現実化するのには、魂レベルの思考です。そうすると、「それを持ったままでは、苦しいでしょう。幸せになれないでしょう。」と、あなたの古い価値観が壊され始めます。そうして、ウツになっていくようです。

ウツまでにはならないにしても、悩みの原因のほとんどが、ここにありそうです。今までの価値観では幸せになれないということに、魂レベルでは気づいているのです。しかし、それに抵抗している自分がいるのです。そこに悩みが発生してきているようです。

つまり、間違った価値感に占領されたあなたの内面を、空っぽにする作業。古いお茶でいっぱいになっているコップ

を空にする作業。これがウツのようです。ならば、古い価値観をすんなり捨てることが出来れば、すんなりと新しい自分に変わることができます。綺麗な水に満たされます。ウツも悩みも解消していきます。

今まで私たちは、「人生は椅子取りゲームのようなものだ。幸せの椅子は限られた数しかない。その椅子に座れたものが勝ち組で幸せになれる。」と、どこかで教え込まれていました。そして、その幸せの椅子に座れるように、頑張ってきました。皆さんの中にも、そこまで強くはないにしろ、そんな感覚が、うっすらとあるのではないのでしょうか。誰かわからない相手と、競争している感覚。どこかにありませんか？

そして、幸運な人は、その椅子に座ることができます。そうすると「やった！ 幸せが手に入った！」と、達成感や幸福感に満たされます。しかし次の瞬間、「誰かに奪われるのではないか？」と、ビクビクし始めます。そんな経験をした方もいらつしやるでしょう。では、その幸せの椅子は本当に幸せの椅子だったのでしょうか？ もしかしてそれは「ビクビクの椅子」ではなかったのですか？

今まで私たちは、どうもそういう事をやってきているようです。もうそろそろそれを止めましょう。幸せの椅子は、百人いれば百個も二百個もあります。そこに気づくことなのです。そうすると奪い合いは起きません。奪い合う必要などないということがわかります。ちよつと視点が変わること、真実に気づくことで、悩む必要などなかったということに気づくことができるでしょう。

実は私もそうでした。「はじめに」にも書きましたように三〇歳〜三五歳の約五年間、ウツでした。社会的地位や、物やお金で最高の人生が手に入ると思っていたのです。そしてそれは、手に入りかけました。

しかし、「このままいくと傲慢な男になるのではないか」と思ったのです。ということは、「他に何か大切なものがある。本当になりたい自分は他のところにある。」とどこかで気づいていたということでしょう。

それを、魂レベルでは求めていたということでしょう。しかし、今までの価値感が邪魔をするので。今までの自分を全て否定するようで、今までの努力の成果、得てきた物が全てなくなりそうでとても怖いのです。

その古い価値観が、壊されていく過程がウツや苦しみの原因だったということに、自分がこのセッションを通じて、クライアントさんに教えていただきました。

まとめ

もしあなたがたつた今、迷いの中にいるのであれば、考えてみてください。あなたが本当に求めているものは何なのかを。

あなたが本当に求めている人生を歩んでいるのか。他人や社会に与えられた価値観に振り回されていないか。それを自分の価値観だと勘違いしていないか。自分の魂の本当の望みは何なのか。今一度感じてみることです。そしてそれに、自分を近づけていくことです。

確かに、全てをいきなり変えることは難しいですし、逆にさまざまな軋轢を生じます。少しずつでいいのです。あなたの向いている方向が、魂の望みの方向を向いているのであれば、川の流れが必ず海にたどり着くように、人生の流れは大きく変わってきます。それが自然の流れだからです。今までの人生が川の流れに沿わせていなかったのです。ですから、スムーズに流れていなかったのです。

私も、新しい価値観が変わっていくときに、「今まで得たものや体験が、全て無駄になるのではないか。」「逆に、間違った方向に進んでいるのではないか。」と、とても怖かったです。実は逆でした。今までの辛い体験や悔しい体験の、本当の意味がわかったのです。全てが私にとって必要な出来事だったことが、全ては私が望んだ事だったことが、心の底から理解できました。全てが感謝に変わりました。全てが宝物として生きてきたのです。

価値感を魂の望みに沿わせることで、今までの体験が本当の意味で生きてきます。なぜなら、体験の本当の意味に気づくことができるからです。

今まで自分に、「X」を付けてきませんでしたか？

「大変な世の中で、ダメな私が頑張らなくてはいけない。」と、思っていませんか？

「限られた幸せを奪い合わなくてはいけない」「幸せになるためには、神様や誰かの許可が必要だ」「許可を得るためには、償いや苦行が必要だ」と、思い込んでいませんか？

そして、足りない自分に、ムチを打ち続けていませんか？ そうすると、周りの人も、ムチを打つお手伝いをしてくれず。

自分を罰するために、償いをするために、苦しい人生を選んでいませんか？ そうすると、周りの人もあなたを罰してくれます。そうやってあなたの思いが叶えられません。

もしかしたら「こんな私は幸せになれないんじゃないか」と、諦めている人もいるかもしれません。

私たちは、どこかで自己否定や罪悪感や恐怖心を、魂の奥底に刷り込まれたようです。それが、さまざまな問題や悩み、根本的な原因のようです。

しかし、あなたは足りない存在でも、罪深い存在でもありません。人間界という過酷で素晴らしい体験を選んだ完璧な存在です。反省は必要ですが、罰する必要はありません。努力は必要ですが、苦行は必要ありません。

周りの人は、あなたが与えた役柄を演じているだけです。あなたが自分を罰しない限り、誰もあなたを罰しません。それは神様であつてもです。

全てはあなたの思い通りになっているのです。ですから、これからもあなたの思い通りの人生が歩めるのです。つまり、たった今あなたがどう思うかです。

私たちは、今まで何度も輪廻を繰り返してきました。そして、前世の体験を通じて、今の人生のストーリーを自分が決めて生まれてきているのです。

時には、辛い苦しい人生になると分かった上で、素晴らしい自分になりたいという一途な思いで、過酷なストーリーを自らに課した方もいます。

さらには、あなたの魂の望みに協力して、自らの人生をかけて、悪役を引き受けてくれた素晴らしい方々もいます。中には、そのストーリーが余りにも過酷すぎて、本来の自分の姿をすっかり忘れてしまっている方もいます。

しかし、もうそれも終わりに来ているようです。すでに答え合わせをするときに来ています。合格点ももらってなければ、この本に目をとめることもなかったでしょう。

合格点ももらおうというよりも、自分が自分に課したプログラムの終わりに来ているのでしよう。

『なりたい自分になる』 実はこれこそが今回のあなたの人生の目的なのです。

『すべての出来事は、私がなりたい私になるために、私が望んだ素晴らしい出来事』なのです。

そして、今までの悩みや苦しみは、実は「素晴らしい世の中で、その素晴らしいさに気付いていない自分が苦しんでいる」だけだったのです。ただ勘違いしていただけのことなのです。

『素晴らしいことしか起きていない』という真実に、あなたが気付くことが出来れば、人生そのものが変わってきます。

全てはあなたの思い通りになっています。

「悩める人々への銘」

大きなことを成し遂げる為に 強さを求めたのに
謙遜を学ぶようにと 弱さを授かった

偉大なことをできるようにと 健康を求めたのに
より良きことをするようにと 病気を賜った

幸せになろうとして 富を求めたのに
賢明であるようにと 貧困を授かった

世に人々の賞賛を得ようと 成功を求めたのに
得意にならないようにと 失敗を授かった

人生を楽しむために あらゆるものを求めたのに
あらゆるものを慈しむために 人生を賜った

求めたものは一つとして与えられなかったが
願いは全て聞き届けられた

私はもつとも豊かに祝福されたのだ

【作者不詳（アメリカ南北戦争の無名兵士）】



これほど、人生の本質を言い表した言葉はありません。

私が、この本のなかで皆様にお伝えしたいことが、見事に表現されています。人生に何一つ無駄なことはないのです。全てが、「私がなりたい私になるために、私が望んだ素晴らしい出来事」なのです。

あなたが、プライドや権力欲に走れば、謙遜や尊敬を学びなさいと弱さを与えられるでしょう。それをあなたの魂が望むでしょう。

あなたが、物や金で幸せを量ろうとすれば、「もっと大切なことに気付きなさい」と、物やお金に支配され、心のぬくもりや、さらには物までも不足していくでしょう。そのことによつて、本当の幸せの意味に気づいていくでしょう。それをあなたの魂が望むでしょう。

あなたが、周りから認められること、周りの賞賛や地位や評価で幸せを得ようとするれば、「自分の内側にある、何物にも左右されない幸せを求めなさい」と、あなたを認めてくれない人達が現れるでしょう。そのことによつて、自分を信じ、許すことを学んでいくでしょう。それをあなたの魂が望むでしょう。

それは全て、あなたが望む最高の自分になるために、あなたの魂が望んだことです。

ただ、それに気付いていない自分がいただけなのです。一〇〇%の体験をするために、気づいてはいけない、思い出してはいけないというシステムを、受け入れた私たちがいるのです。

私たちは完璧な存在です。本来の自分の姿を忘れることを選択した、勇気ある存在です。その体験も、もうそろそろ終わろうとしています。本来の自分に戻る時です。



おわりに

このセッションを始める前、私自身が深い悩みのふちにいた時に、毎日のように、近くの林の中にあるベンチに座り、本を読んだり、瞑想したり、気功をしたりしていました。その林の中では、沢山の気づきや、不思議な体験をしました。終わりにあたって、その林の中での一つの出来事を紹介させていただきます。

ある日のこと「無」についての本を読んでいるときのことです。すでに、一ヶ月ほどその本を読んでいました。そして、ずっと「無」について考えていたのです。「無ってなんだろう。どんな感覚なんだろう。」と。何となくわかります。しかし、腹に落ちないのです。

いつものように、いつもの林の散策道のベンチに座り、本を開こうとした瞬間、目の前の足元を、翼を広げた鳥が滑るように飛んでいくのです。翼の幅は一メートル近くありました。最初は鷹かな？と思ったのですが、林の中に鷹がいるわけないよね、と思い、その鳥を目で追いかけると、一〇メートルほど先の、人がうずくまったくらいの大きさの石の上にとまって、こっちをじっと見ているのです。なんと、フクロウです。

野生のフクロウが、真つ昼間に目の前に現れて、こっちをじっと見ているのです。一生のうち、一度あるかどうかの体験でしょう。びっくりして、にらめっこ状態です。

しばらくして、「何かを教えに来てくれたんだろう。」と思い、二分ほど会話を試みるのですがわかりません。諦めて、本に目を落としたときに、フクロウのいる反対側から、犬を連れのおじさんがやってきました。

「なんてタイミングが悪い。せっかくフクロウがいるのに、犬を連れてくるなんて。」しかも、猟犬のポインターです。さらに、リードも外しています。犬は喜んで駆けずり回っています。「フクロウも逃げてしまっただろうな。」と思い、フクロウの方を見てみると、微動だにしていません。

しばらくして、犬がフクロウがいる石のところに向かって、一目散に走っていきます。「あつ、気づいたかな。」と犬の動きを見てみると、犬はフクロウがいる石の周りをクンクンと嗅ぎ回りますが、フクロウには気づかないのです。顔を上げれば、すぐに目の前にいるのです。ほんの五〇センチほど前にいるフクロウに全く気づかないのです。私はびっくりにして見てました。その間フクロウは、犬のことなど全く意に介していない様子です。二〇秒ほど嗅ぎ回った後、犬は山の方に向かって走り去っていきました。

その後を追って、おじさんがフクロウのすぐ横を歩いていきます。手を伸ばせば触れる距離です。しかし、気づかないのです。

「あ、これが無ということだ。フクロウは犬やおじさんに一切反応していないんだ。普通ならば、恐怖心から逃げようとするだろう。しかしあのフクロウには、一切が無かったんだ。だから、犬やおじさんにとっては、無いものと同じだったんだ。」と。やはり、フクロウは教えに来てくれたのでした。

心の中で「わかりました。ありがとうございました。」とお礼を言って、本に目を落とし、五秒ほどしてフクロウのほうに目をやると、もうすでにいませんでした。

全てが、心のありようなのです。自分がつけた意味合いの中で生きているのです。犬は戦闘態勢満々でした。しかし、



フクロウは一切意に介していなかったのです。

フクロウと犬は全く違う世界にいたのです。全く違う次元にいたのです。それを、自分が選ぶことが可能なのです。フクロウが教えてくれました。

そして、その後このセッションを始め、今度は沢山のクライアント様に大切なことを教えていただきました。

一人でも多くの方が、本来の素晴らしい自分を思い出し、素晴らしい人生を歩まれることを期待します。

全てが『〇』です。ありがとうございました。



一
字

ichiu

フォレスト前世療法研究所の活動（2021年9月現在）

※対面・オンライン可能です。

◇個人セッション

セラピストと1対1で、じっくりと時間をかけてカウンセリングと前世療法を行います。1回のセッションで7割の方が効果を実感されます。

◇セラピスト養成講座（初級・中級・上級）

23年間3500人の実績の中から編み出した、日本人の感性に即したフォレストオリジナルの、前世療法の技術を伝授します。

他の人に前世療法が出来るようになりますし、プロも目指せます。さらに、あなたの隠れた能力が開く場合も多々あります。

◇自己変容講座（旧 自己廻帰講座）

徹底した癒やしと気づきを通じて、本来の素晴らしい自分を思い出す事を目的とした講座です。深い感動を通じて、本当の自分と出会うことで、人生の流れが変わり始めます。

◇グループセッション

複数の方を同時に前世誘導をしていきます。個人セッションとは違い、他の方の前世誘導や、癒やされていく過程に立ち会うことで、自分自身に気づきや癒やしをもたらされます。

◇レイキ伝授

ハンドヒーリングの技術を伝授します。あなたが他の人にヒーリングが出来るようになります。さらに、あなたの隠れた能力が開く可能性が期待できます。（対面のみ）

フォレスト前世療法研究所

福岡ルーム：福岡県福岡市南区野間4丁目

東京ルーム：東京都豊島区西池袋1丁目

長崎ルーム：長崎県諫早市日の出町

ZOOMによるセッション・講座等も
行っております。

URL：<https://www.88forest88.com/>

【前世療法 フォレスト】で検索

Mail：forestmind8@gmail.com



ホームページ



動画

第二巻：3500人の前世療法で見えてきた「人生の法則Ⅱ」



紙本



Kindle版

著者：一字 ichiu

長崎県生まれ。1999年より福岡を中心に日本各地でセッション及び講演会等を行う。

公式LINEをご登録いただくと
各種講座、オンラインサロン
セッション等のご案内を
差し上げます



公式LINE

